ToLOVEる ― FIRE GENERATION ―

改造ハムスター

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんでもかんでも、燃やして解決じゃーーー!!!

結城リトがデビルーク王となり、ハーレムを築き上げてから早１０年。

息子たちによる王位継承戦争が始まった！

主人公はリトと美柑の養子!?

ちょっとハードなノンストップバトルアクション、始動！

※全体の修正が終わり、やっと新章が書けました。思い切ってタイトルも変更しました。応援よろしくお願いします。

目次

第１話「彩南デッドヒート」 1
第２話「彩南暴走族ＭＢＣ」 12
第３話「ｖｓ　デビルーク親衛隊隊長」 26
＊登場人物紹介・地球編＊ 39
第４話「バーンアウト・ハイスクール」 41
第５話「バーンアウト・ハイスクール　Ⅱ」 57
第６話「バーンアウト・ハイスクール　Ⅲ」 73
第７話「ｖｓ　ヒッタクン星人」 84
第８話「ｖｓ　バルケ星人＆ＰＳＰ版の敵」 94
第９話「ブラックホール　ｖｓ　メテオ」 111
第１０話「爆熱少女リターンズ」 124
第１１話「爆熱少女リターンズ　Ⅱ」 140
第１２話「爆熱少女リターンズ　Ⅲ」 164
第１３話「対メモルゼ防衛戦線」 183
第１４話「対メモルゼ防衛戦線　ＩＩ」 195
第１５話「対メモルゼ防衛戦線Ⅲ」 208
第１６話「悪魔　ｖｓ　天使」 228
第１７話「ハーディス　ｖｓ　ゼウス」 241
＊登場人物紹介・宇宙編＊ 257
第１８話「炎の臨海学校」 260
第１９話「炎の臨海学校　Ⅱ」 278

第1話「彩南デッドヒート」

ー？　？　？ー

炎が揺らぐ。

黒い無機質な星の地表を、チラチラと照らす。

「私を、殺しに来たの？」

金色の髪をなびかせて、少女は静かにそう言った。

俺は、

フライパンを握りしめた。

なんでこんなもん持って来たんだろう。

銃にしときゃよかった。

いや、でも、これで良かったのかもしれない。

もしこれが「あの銃」だったら、

俺たちは、本当に……。

「当然か」

目の前の少女は、悲しげに首を振った。

「私のお母さんは……結城リトを殺すつもりだった」

黒い、ボロボロのドレスが揺れる。

「だからって、お前が罪を負うことじゃない。それに、ヤミさん、いや、お前のお袋だってもう……」

「彼女がそうでも、私に流れる血は消えない」

兵器としての宿命。

「お前、それじゃあ、
何でお前たちの親父が、ハーレムなんて作ったと思ってんだ！
親父は、たとえ兵器でも、変われるって、幸せに暮らせるって、そう信じてたから！
だから……」

「クロウ」

少女が、あどけない声で俺の名を呼び、
ボウ……
白い、透き通るような両腕を、青い炎に変える。
そして、

「あなたは、プリンセスを選んだ」

哀しげに、しかしはっきりと言い放った。

「でもお前だって」
『大事な友達だ』
思わず口に出かかった言葉を飲み込む。
でも、遅かった。
少女の赤い瞳が、底知れない妬みを宿して燃え上がる。
「やっぱり、そうなんだね」
少女の小さな頭から、捻じ曲がった二本の角が生える。
「私とあなたは、殺し合わなきゃダメみたい……そうでしょ？」
黒いドレスが、白く染まり始めた。
「あなたの体に流れる「正義」の血。
聴こえるよね。　クロウにも……」

『何でもかんでも……』

「知らねえよ」

『燃やして解決っ！』

「知らねえっつってんだろ!!」

俺は、頭に響く言葉を掻き消すように叫んだ。

「フフ……いい言葉だよね……」

目の前の少女はもう、俺の知ってる姿じゃない。

『インフェルノ』

全宇宙に戦火をもたらす、究極の変身兵器。

「あなたは英雄。
私は兵器。
愛し合える訳ないもんね」

燃える両腕を広げ、彼女は真っ直ぐ俺を見据えた。

「私は、あなたのターゲット。
もし私があなたのものになれないなら、ここはもう、
私のいるべき世界じゃない。
だから……

燃え続けよう」
クロウ。
あなたが、
「私を殺してくれるまで」

金色の髪が暴れ、無数の獄門が口を開く。

「さようなら。甘くて温い、平和な日々」

俺たちの親父はどんな思いで、このおぞましい「楽園」を作り上げたのだろう。

「さようなら。お母さんが愛した、美しい惑星（ほし）」

こんなところで、全てが終わるのか。

「さようなら」

やっぱり、

「私の、大好きな……」

分かり合えない

「やめろおおおおおおおおおお!!!」

「トランス。

『業火』

――――――――――――――――

―地球―

パチパチと、鉄の焼かれる音が響く。

炎につつまれた肉塊が、血を滴らせ、黒ずんでゆく。

『料理はね…食べる相手のことを想いながら作るんだよ』

お袋の言葉が頭をよぎる。

「そんな奴いねぇけどな」

俺は、

ステーキをひっくり返した。

はじめまして、結城ザク郎です。

本当はもっとかっこいい名前が別にあるんですが、今はこれでいいです。どうか「ザック」とお呼びください。

俺は宇宙人です。地球に亡命しています。

もともとはデビルーク星の宮廷コックでした。

デビルーク星っていうのは、今銀河を支配しているむっちゃ強い星です。　俺はそこの王宮で働いていたのですが、ある日、料理に混じった暗黒物質（ダークマター）を捨てに裏口へ行ったら、王宮の庭からこんな会話が聞こえてきました。

（しかし王宮の食事は本当に美味くなったな）

（数年前とは比べ物にならん）

（これもあの新入りコックのおかげですな）

（結城ザク郎……さすがに地球人なだけあって、料理の腕は確かな様だ。

血は汚れているが）

（やはり本当なのか？彼が、王と、王の妹君との間に生まれた「王子」だというのは）

（きっと本当だろう）

（調理の仕方だって美柑様に似ているしな）

（何をおっしゃる。あれは嘘に決まっております）

（馬鹿なことを。彼の姓は結城ではないか）
（だからあれは養子でございます。見た目こそ人間ですが、確か……）
ヒソヒソ
（そんな！本当か？）
（だから皆んな、あんなに彼に冷たく……）
（しーーっ、こんなことが王宮の外に広まったら、俺たち生きていられねぇぞ）
（とにかく、この話は二度と……）

ズシャッ

（おじさんたち、楽しそうな話してるね）
（お、お前は「デビルークの死神」……！）
（僕にも聞かせてよ。
拷問部屋でね）
（た、頼む！誰にも話さないから、どうかっ……）
……
（　素敵っっ！）
一週間後、こいつらは処刑された。スパイ容疑ということだった。
この時、俺は王宮を脱走することに決めました。
俺のせいで誰かが死ぬのはもう嫌ですからね。
お袋には申し訳ないけど、俺はデビルークが馬鹿にしてる弱小惑星「地球」に引っ越してきました。ここなら流石に俺のこともバレないでしょう。ちょうどコックとしての武者修行もしたかったし、丁度いい。
でも、これで王宮はまた不味い飯に逆戻りです。
俺がいなくなったことで王宮は大騒ぎらしいが、ざまあみやがれ。
デビルークの飯はマジで不味いからなｗｗｗ
まぁ、俺がいなくなると困る理由が、もっと他にあるんでしょうが。

カラスは、自由に生きるもんです。

「あっ」

余計なこと考えてたせいで焼き過ぎた。

ただちに火を「引っ込める」。

ん、おかしい？俺は別にキッチンで調理してたわけじゃないですよ。今はソファに座って、テレビ見ながらフライパンだけ回してます。

自分は生まれつきどこからでも火を出せるんです。いわゆる特殊能力らしい。

その時点で地球人の子じゃないって気づけよ！っていうね。

俺は、フライパンに乗っかっている肉を口に放り込んだ。

ガツガツ

「まずい」

俺ミディアムレアが好きなのに。

オムライスとかも半熟が好きです。お袋の影響でしょうね。

お袋、か……。元気にしてるかな？

お袋には、ガキの時に拾われました。血は繋がっていません。

何の生き甲斐もなかった、宇宙のゴミみたいな俺に、地球の料理を教えてくれた恩人です。

……

昔のこと思い出してたら、なんか言いようもなく虚しくなってきた。しかもステーキはまずい。これはやばい、憂鬱になりそうだ。

俺はスマホを取った。こういう時は、やっぱり友達を呼ぶに限ります。

「よお西連寺、ゲームしようぜ」

地球人の親友に声をかけてみる。

『ああ、結城くん！今ちょっと……』

「自主練か」
『そうそう！ごめん。もうすぐテニスの試合だから』
「へぇー」
相変わらず真面目な奴だ。
西連寺季虎。
俺と同じ、彩南高校の学生だ。
成績優秀で、テニス部のインターハイにも出てる。
普段はおとなしいが、やる時はやる頼もしい奴だ。
しかも「念力（サイコキネシス）」っていう、宇宙でも珍しい特殊能力を身につけている。並の宇宙人なら互角に闘えるだろう。デビルーク星人とかじゃなけりゃな。

でも弱点があって……
『来週やろう！どんなゲームなの？』
「ゾンビ撃ちまくるゲーム……」
『!!』
あ、やべ、
「西連寺、落ち着」
『ゾ、ゾンビぃ!?』
キーン！

スマホが俺の右手から吹っ飛ぶ。次の瞬間、

バチバチーン！

我が家のテレビに亀裂が入り、
ドーン！
俺はソファから投げ出された。
宙に浮いたテーブルとステーキが、俺の頭に落下する。
（そう……西連寺はお化けを異常に怖がるんだ）
しかもこいつは恐怖を感じた時、念力を暴走させるという、困った

癖を持っている。
『ごめん結城くん！僕ゾンビとかお化けとかまじ苦手で、だからそのゲームは』
「……お前が一番怖ぇよ」
俺は液晶テレビを棚に上げた。
「おい西連寺、今すぐ俺の家に遊びに来い。嫌ならテレビ弁償しやがれ」
「……うん、すぐ行く」
「その念力、テニスの試合で使うんじゃねぇぞ」
ガチャ。
俺は電話を切った。
（あいつ、お化け無理って、誰に念力習ったと思ってんだ）
スマホはとっくに壊れている。西連寺の奴、反省のつもりか、念力で回線を繋げていたらしい。
……ちょっと言いすぎたかな。
どうもイライラしているみたいだ。
とりあえずソースまみれの体を洗うために、俺は風呂場に向かった。
ー俺の風呂ー
宇宙って、非常識だ。
宇宙人のくせに、俺はシャワー越しに映る鏡の顔にそう語りかけた。
逃げたつもりか？
今度は鏡の自分が睨み返してくる。

（ザック……行かないで……。あなたがいなくなったら、私は……）

幾多の水が、涙の様に鏡を伝う。俺はバスタブに逃げ込み、頭の先まで湯船に突っ込んだ。

親父はすげぇ。

どんなヤバイ目に遭っても、絶対に王妃たちの想いから逃げなかった。1人残らずだ。

いろんな批判もある。だが少なくとも、たった1人の想いさえ受け入れられない俺よりずっと強い。王に相応しい男だろう。俺は会ったこともねぇけどな。

勘弁してくださいよ、プリンセス。

俺には無理だ、

次期デビルーク王なんて。

俺を包む湯が小さく波打ち、やがてぶくぶくと泡を吹き始める。

キィィイイン……

にわかに、水面が光り輝いた。

「あ……？」

俺はデビルーク王の養子だが、血は繋がっていない。

それなのに王位継承者の最有力候補になったのは、「彼女」の存在があるから。

でも、俺は王になんかならない。

そんなものを目指してたら、忙しいやら危ないやらで、気ままに生きることも出来ない。

そしてなにより……、

「っしゃあ！脱出成功っ」

「……アッシュ……様？」

こんなＴｏＬＯＶＥるな日々を、乗り越えなきゃいけないから。

俺たちの父親であり、偉大なる銀河の覇者、

結城リトのように。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第２話「彩南暴走族ＭＢＣ」

「へーっ、ここがザックの家か」
「アシュラ様！服を着て下さい！それと……、
マ、マスクも」
「なんだよ。おまえしかいないんだからいらねぇだろ。あんなもん」

（いや、そうは言っても……）
う、宇宙一の美少女が、タオル一枚で俺の部屋をうろついているッ!!
ここは二階。何故か窓が開けっぱで超寒いが、俺はあぐらをかいたまま動けない。
「たっているのでたてません」ってやつです。

アシュラ・サタリン・デビルーク。

デビルーク王、リト様と、彼の正妻であられるララ・サタリン・デビルーク様との間に生まれたプリンセスだ。
デビルーク家の例に漏れず、とんでもない美貌をお持ちだが……この方のはそんなレベルじゃない。
「なあ、ザック」
短めのバスタオルを巻いたアシュラ様が、背中にかかる桃色の髪をなびかせ、
「元気にしてたか？」
一気に顔をつめてくる。

……やばい、むっちゃかわいくなってるッ!!
『チャームの能力』
これはアシュラ様のばあちゃん、セフィ様の能力だったのですが、覚醒遺伝して、孫の顔に備わりやがりました。

能力の説明？
「むっちゃかわいい」それだけです。
彼女の顔を見た「雄」は、肉親だろうが動物だろうが関係なしに理性がぶっ飛ぶ。襲いかかる。そして人生が終わる。
普通は死刑。そうなった奴が何人もいた。それがチャームの能力だ。
しかもこれは超強力で、耐えるとかそういう次元じゃないらしい。トラックが突っ込んでくるのと同じで、抵抗は不可能とのことだ。
だから王室でも、
アシュラ様が気をつけて当然、
っていう、暗黙の了解的な空気があって、アッシュは小さな時からマスクで顔を隠していた。いわゆる普通のマスクです。風邪の人がつけるやつ。アシュラ様の場合は、口元さえ隠せばチャームの能力は発揮されないらしいですね。
そうはいっても、はっきり言ってアッシュの能力は、家臣からも凄く迷惑がられてましたよ。かわいそうに。
一番ヤバかったのは、王の忠臣が部下に押さえつけられながら「殺してくれーーっ!!」って全裸で叫んでたやつです。
たまたまマスクを外してたアッシュに鉢合わせちまったんだろうが……周りはかなり戦慄してたな。なんせ押さえつけられていたのが親衛隊の隊長だったから。面目まる潰れだったよ。

ああ、そいつの名前？名前は確かーー
てんじょ

「おい、聞いてんの？」
「あ、ああ、もちろん。俺はどこでも食っていけますからね」
「はは！そーだよな」
アッシュが幸福そうに笑って、じっと俺の目を見つめる。
どうも俺には生まれつき、トラックにも負けない耐久力があるらしい。チャームの能力が効かない雄ってわけです。

たまにいるらしいですね。親父とか、先代王のギドとか。
でも今アッシュが唯一素顔でお話しできる相手は俺だけです。だから俺まで暴走して、この無邪気な御顔を絶望させることは許されない。
ってのはわかってるのですが……

「それで、いつお帰りになられるのですか？」
せっかく家出してきた王女に、俺はそう切り出した。
「え、ええっ!?」
びっくりされたお顔も可愛い。やっぱり危ない。こんなとこにいさせるのは危険過ぎます。
俺はこのお転婆な姫君を説得することにした。
「あのね、アッシュ。ここで楽しい時間を過ごしてしまうと、また別れが辛くなります。すぐにデビルークへお帰り下さい。
はっきり申しますよ。俺はね、面倒くさいんですよあなたがそばにおられると！せっかくここまで逃げてきたのに、これじゃさらに立場がヤバくなっただけじゃないですか。
私はここ両親の母星で、地球人に紛れて普通のコックとして生きていくんです。決めてます。私の人生です。そもそも「アシュラ様」には関係な……」
「ペケェッ!!」
え？
アシュラ様のドスの効いた声に、俺はちびりそうになった。
こんなキャラだったっけ？　笑
「ドレスフォーム！」
てけてーんてーんてーんてーてーてーん（↑懐かしい）
ペケと呼ばれる、なんか目がついたバッチみたいなのが、アッシュの胸元にくっつく。
部屋を、眩い光が照らす。
光の中、ドレスに着替えたアッシュの姿が現れ……
って、

ジャージｗｗｗｗなんでｗｗｗしかも白ｗｗｗ真っ白ｗｗｗ髪もピンクだしｗｗｗ地球のヤンキーにしか見えねぇｗｗｗｗ
ジャージの全体に、王家の紋章（@↑こんなやつ）が黒色で刺繍してある。俺がいない間に何があったんだ。宇宙のお姫様がグレてたらみんな嫌だよ。

「ザック」
「はい？」
ドガァッ
テーブルがアッシュに蹴飛ばされる。今日何回目だこのテーブル吹っ飛ぶの。

「知らねえよ」

完全にグレてます。親の顔が見たいっ！
ってか親今どこいんだよまじで。子どものそばにいてやれよ。何で結城家は代々ダメ親なんだよ！だから俺が世話役なんてめんどくさい役目を負わされるんだ！
「私はアッシュだ。二度とアシュラ様とか呼ぶな。あとその下手くそな敬語もやめろ、腹が立つ」
「も、申し訳ありませんでした!!」
額を床に擦り付けつつ、上目でアシュラさ……アッシュの顔を見上げる。
信じられないかもしれませんが、
キレてる顔もかわいいｗｗｗｗｗ
「私はおまえのごはんしか食べるつもりはないし、もう王宮に帰るつもりもない。だって……私は。
おまえのことが……」

急にアッシュが俯き、そう言いかけた時だった。

「アシュラ様アーーッ！」

バリィーン！

窓が粉砕され、もう一人、招かれざる客が来やがった。

部屋に飛び込んできたのは、
ベジ○タみたいなアーマーを装着した、銀髪ドリルヘアーのイケメン！

「やはり貴様か、結城ザク郎！」

そうだ。こいつが……、

「この私が来たからには、もう好きにはさせん！」

さっき俺が話してた……、

「我こそは……偉大なる……、

デビルーク王室親衛隊隊長!!!

天条院アーサーだあぁっ!!!!!!!」

変態だ。

「異星人の養子ふぜいが、やはり王位を狙っていたのだな！」
「興味ねぇっつってんだろ。
とりあえずあんた、アッシュの顔は見るな」
なぜなら、
「さあ、アシュラ様はどこへ……」

「だから見るなって！」
今、アッシュは、
「あ、あ、しまっ……」
なんと……、
「そ、その顔のせいで、わ、私は、くそぉっ、また……」
顔を隠していません。
「ウ、ウ……ウーリイイイイイイイイイイ!!」
ビリィィ!!
「アーサー様ぁっ!!」
側近の制止もよそに、「自称紳士」天条院アーサーが全裸になって、大剣を引き抜き、振り回し始めた。
だから見るなと言ったのに……。
早速チャームの能力にやられてしまいましたね。
天条院アーサー
デビルーク王室　親衛隊隊長。
この肩書を聞いただけで、大抵の奴は震え上がる。
こう見えてこいつは、銀河統一戦争で先代王ギド・ルシオン・デビルークと共に暴れまわった、デビルーク最強の剣士、ザスティン前隊長の息子なんです。こんな奴に暴れられたら、
自　宅　が　やばい。まだローンも払ってねぇのに。
それに逃亡中とはいえ、目の前にアッシュがいる以上、世話役としてお護りしないとな。
俺はアッシュの前に躍り出た。
「はぁっ」
フライパンを引っ掴む。
ボゥッ
飛び上がり様に、燃えるフライパンをアーサーの側近2人に投げつけた。
慌てて燃えるフライパンをかわす側近。
だがその首はすでに俺の足が捉えている。
ドン！ドン！

「ぐぁっ!?」
二回空中で回って、２人の後頭部を蹴り落としてやった。
白目を剥いて気絶する側近２人。
これでこいつらがアッシュを見て、チャームの能力で暴走する心配はなくなった。
バシッ。
フライパンをキャッチ。
「さて……」
「うおおおおお!!」
アーサーが剣を振りかざし、よだれを垂らしながら突撃してくる。
気張りやがって、この星の重力がデビルークよりちょっと弱いこと知らねぇな。
ブォン！
フォトンを唸らせ、でっかい剣が襲いかかる。
俺は腰を落とし、剣をフライパンで受けた。
ドガァアン！
斬撃が跳ね返り、壁がブッ壊れる。
どいつもこいつも、俺の家に恨みでもあんのか。
シャッ！
俺は破れた壁を駆け上がり、棚の上にあるジェットブーツを足にはめた。
「アーサァァッ！」
ブーツの底から火を噴出させ、
ドゴッ
踏み込んだアーサーの右膝を思い切り踏みつけた。
「ぐっ」
一瞬引き退るアーサー。
続け様にハイキックを叩き込む。
ガッ
アーサーの顔が仰け反った！
と思いきや……

「はぁーー、ぐへへへぇっ！」
（効いてねぇっ！）
「ぬうううん!!」
真横から、アーサーの大剣が振り抜かれる。俺はとっさにフライパンでガードした。
ガギィイイン！
「ぐっ」
ドガァッ
「ザック！」
俺は壁に叩きつけられた。アッシュの心配そうな顔が見える。理性を失っているとはいえ、さすがは親衛隊隊長。なかなかやるじゃねぇか。
でもフライパンは傷一つついてねぇ。さすがオリハルコン製。
（よし）
「うおおおお！」
俺は素早く床を這いずり、
ビシュッ
フライパンをアーサーの「脛」に向かって投げつけた。
ゴスッ
「ぐぁっ!?」
堪らず、膝から崩れるアーサー。
俺はこいつの弱点を知っている。
こいつの親父は、常に紳士的な振る舞いを心掛けていたらしい（その割には馬鹿だったとも聞くけど）。
そしてお袋も財閥のご令嬢だった。地球人で、西連寺のお袋と同じ彩南高のＯＢだ。王宮の召使いたちをリゾートに連れていったり、いい人なんだが、とにかくプライドが高かった。そんな両親にアーサーは育てられた。
だから、こいつも常に「紳士」に拘る。戦いにおいてすら。
でも、それは違う。
命懸けの戦いは、どこまでも「汚い」もんだ。

こいつはそれを知らない。
（それじゃあ、俺には勝てねぇよ）
床を蹴り、飛び出す。
アーサーが膝を着く、その瞬間、
俺はアーサーの股間を、思い切り蹴り上げた。
ゴンッ
「ぬぉぉおうっ!?」
うずくまるアーサー。
アーサーの手から、剣が落ちる。
よし、退避だッ！
「アッシュ、マスクをつけてこっちへ！」
「う、うん」
少し威圧をこめて命じると、アッシュも黙って従い、俺の手を取った。
ダッ
二階のまどから、隣家へ、隣家へ、屋根を飛び移る。走る。
アッシュの小さな手から、高く脈打つ温もりが伝わる。
……楽しんでるのか、このプリンセスは。こんな時に。
しょうがない人だ。
「このまま、どこ行きましょうか？」
もう、あの家には戻れない。騒ぎすぎたし、壊れすぎた。
でも、なぜか不安じゃない。夜風が心地いい。あんなに面倒だった動乱も、この人となら、乗り越えられるかもしれない……そんな俺らしくない思いが、ふっと、
「あのさ……ザック」
「どうしました？アッシュ」

「ペケの充電、
切れちゃった」

……え？

目の前で、アッシュの体から服が消えてゆく。

「ちょっ！何故こんなところで……」
ズルッ
うろたえてる間に、俺は足を滑らした。
なぜ地球の家は、こうとんがった屋根をしているんだ。
俺は背中から倒れた。目の前には、一糸纏わぬプリンセスの、泣きそうな顔。
落ちるっ！
とっさに受け身を取る。フライパンが手から離れ、ちょうど俺の股間の上に乗っかって……そしてその上に、
「んんぅっ！」
またがる……プリンセス。
グニュッ
（え？）
これ今、フライパンにささっ……
いやいや乗っかってるだけです！よかったいやよくはないけど。
それより……
ブゥンブゥン
パパラパパッパー
屋根の下。迷路のように広がる彩南町の道路から、爆音と共に、派手なバイクにまたがった男が群がってきた。

「おいなんだよあの屋根の上ぇ!?」
「え、あれヤッてんじゃね！」
「やべぇ、来てみろよ！」
男どもが、俺と、裸のアッシュを見て騒ぎ出した。
あれが噂の暴走族か。彩南も荒れたもんだ。
とりあえず俺はアッシュの体に覆い被さった。

どっと歓声が沸き起こる。

だがどういうわけか、急に暴走族たちが不気味な程静まりかえった。

目の前で、アッシュのマスクが、ひらひらと舞う。

「ごめん、ザック……」
なるほど。
暴走族の奴ら、アッシュの顔見ちまったんだな。
面倒臭いことになった。

ガチャ、ガチャ、
鎧の音が近づく。
「見つけたァ……」
アーサー……。
俺の上には全裸のお姫さま。
下には理性崩壊直前の暴走族約３０名。
前から理性のない剣士（↑こいつも全裸）。

「うっひょぉおおおーーっ！」
「あの娘とヤんのは俺だぁあっ！」
ケダモノと化した暴走族たちが、一斉に襲いかかってくる。
どうすんだよこれ……俺フライパンしか持ってねぇよ。

やっぱり、隣に誰かがいるから、面倒ごとが起こる。
仲間とか、大事でしょうよ。普通に生きる分にはね。
でも俺みたいに、勝手に飯作って適当に生きて、たまに強い奴と闘いたいだけの人間にはいりません。お互い迷惑です。なんか孤独が悪いみたいな風潮なんなんですか。いいでしょう俺みたいな奴がいたって。働いてるし。
まぁごたごた言っててもしかたねぇ。アッシュの側にいる以上、俺はこの方の世話役兼専属コックの使命を果たさなきゃならない。
俺はアッシュの体を抱きしめた。思ったよりもずっと細い。健康的だけど、やっぱり女の子なんだな。
爆音が近づく。理性を失ってもバイクに乗ってるのはさすが暴走族と言うべきか。

ゴウッ……
俺は、自分の体に火をつけた。
「ザック！何を」
「大丈夫です」
「やめろ！離せ、私のことはいい！」
いや、俺が嫌なんですよ。自分を好きでいてくれる人を、男どもの中に裸で残せるわけがない。だから始めっから関わりたくもなかったんだが……。
せめて銃持ってくりゃ良かった。
仕方ない。こいつら全員焼き尽くすくらい余裕だ。
最後の料理は丸焼きか、俺らしい。

さようなら
……

『そんなんじゃ一生ひとりぼっちだよ!!』

！……

誰だこれ？

昔の、お袋？と……

『少しは友達を頼ってよ！』

走馬灯……？

お袋の前にいるのは……だれ……？

「……きくん！結城くーん!!」

この声は……。

「結城くん、遅くなってすまん！まさか俺の念力で家があんなことになるなんて……」

……ふふ。

「おせぇぞ、西連寺」

おもしれぇ、

「友達」を頼ってみるか。

体の火を消す。アッシュは泣きはらして眠っている。疲れたんだな。

「結城くん……何が起こってるんだ？」

周囲を見渡した西連寺の顔が強張った。

「事情は後で話す。西連寺、

一緒に闘ってくれ」

「……わかった！」
西連寺は物怖じもせず、ケダモノの群れを見据えた。
「西連寺、あの暴走族は何なんだ」
「マルス・ビシャモ・クラブ、略してＭＢＣだよ。ここ最近、急にこの町に出てきて勢力を伸ばしてる。でもバックについてるのがとんでもない奴見たいで、警察も手を出せないらいしんだ。
俺たちの彩南高にも、カツアゲや売春の被害にあった生徒がいっぱいいるってのにな……」
（ビシャモ……
ビシャモ・ベリア・デビルーク）
デビルーク第二王子か。
そりゃあ、地球の警察が手を出せない訳だ。
「西連寺、お前クラス委員だろ」
「……ああ」
「こんな奴らに、学校の奴ら泣かしちゃいけねぇよ。
今日、ここでぶっ潰す」
力強く頷く、西連寺。
「フフフ、地球人まで巻き込んで、どうするつもりだぁ？結城ザク郎」
アーサーが剣を構え、にじり寄ってくる。　俺はアッシュを後ろに隠した。
そして、一度全宇宙に言ってやりたいことをこいつに言うことにした。
「てめぇ、
地球人なめんじゃねぇぞ！」
まぁ、俺は異星人だけどな
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第3話「ｖｓ　デビルーク親衛隊隊長」

ブゥーーンン……
地球で買った出前配達用のバイクを走らせ、俺はかつての「結城宅」へ向かっていた。
「……着いた」
まさかここの長男が、銀河の覇者になるとは誰も思っていなかっただろう。
「おじゃまするぜ」
「ここがパパのお家？」
「そうです、昔のね。もうご両親も引っ越されて、誰も住んでいません」
目を覚ましたアッシュとともに、さびれた階段を駆け上がる。
「ここだ」
トイレの向かい側、ドアに小さな看板がぶら下がっている。
そこには、可愛らしいサッカーボールの絵とともに、「リトの部屋」と書かれていた。
ギィィ……
（鍵が開いてる）
誰か入ったのか？
部屋に入るなり、俺はクローゼットを蹴り破った。
「うらぁっ！」
バキッ
扉が落ちた先に、
広大な空間が出現する。
「これって……」
「ララ様……アッシュのお母様が造られた研究室です」
「どうしてこんなとこに？」
アッシュの問いには答えず、部屋をあさる。
（あったあった）

俺はダンボールの中にあった「デダイヤル」を、アッシュに渡した。
「これは……！」
「アッシュ、あなたを、アーサーと、バイクに乗った男どもが狙っています。俺はあなたをお守りしなきゃならない。
俺がバイクを運転するんで、アッシュが後ろに乗って追っ払って下さい」
「でもどうやって」
「そのデダイヤルから、ここにあるララ様の発明品を取り出せます。今のうちにどんなんがあるか見といて下さい。
あと、これも」
俺はアッシュにもう一つ、「万能ツール」も渡した。メカを作る万能工具だが、武器にもなる。
「ザック！私は、戦ったりなんて」
「アッシュ！」
アッシュの肩に手をかける。
「今はその時です」
温室育ちのプリンセスが、不安げに瞳を揺らす。
「俺も、面倒事を避けるために、地球に逃げてきたつもりだった。
でも、どうも違ったみたいです。この地球はもう、とっくに「平穏な惑星」なんかじゃない。
結城リトが即位した時から……すでに、何かが始まっていた」
「そんな、どうして……」
「この世には、平和を望まない奴がいる。
次期デビルーク王候補者、あなたの兄弟たちですよ」
「！……」
「欲しいものは、どんな手段を使っても手に入れる連中です。そして奴らが求めているのは、王座、ただ一つ。
アッシュ、あなたは自分の立場をわかっていますか？」
「……こ、婚約者……」
「確かに、それもある。でもそれだけじゃない」
「え……？」

「「女王」ですよアッシュ。あなたは女王として、次期デビルーク王の有力候補者に挙げられているのです」
「そんな！私はそんなもの」
「デビルーク王としての実力、人格、家柄、全てを考えた時、消去法であなたしかいない。
ご自身でも分かるでしょう」
「……」
王女が、弱々しくうなだれる。
次期デビルーク王。
通常なら「デビルーク」の姓を持つ、王子が受け継ぐものだ。
確かに、王子はいる。だが王になるには余りに野蛮で、狡猾だった。
しかも王子は双子だった。物心ついた時から互いの地位を意識し始め、部下や人民を率いて、幾度も内戦をやりやがった。こいつらのおかげで、デビルーク星は乱世に突入したようなもんだ。
こんな奴らに王座は渡せないと判断した王室は、双子の王子どちらでもなく、長女、つまり王女に、デビルーク初の「女王」として、王位を継承させようと考えた。
それがアッシュだ。
だが、政府や国民が猛反発した。女を王座に着かせるなど、銀河に示しがつかない、デビルークの恥だと。
そこで新たに出た案が、現デビルーク王、リト様を決めた時と同じ手法、
「王女アシュラと結婚した男を、次期デビルーク王に決める」
これが決議され、馬鹿な政府は、全宇宙に「婚約者候補」を集める御触れをだした。
結果がこのざまだ。史上最大規模の「王位継承戦争」が始まった。
銀河中の無法者が、欲望のままにアッシュを奪いに来る。
リト様の血を引く兄弟たちは、女王候補のアッシュを殺して、王座を奪いに来る。
噂では肉親であるにもかかわらず、アッシュと結婚しようとする兄弟もいるらしいがな……。

「……ザック、私……」
アッシュの肩が、小さく震えている。
俺は、両手を肩にかけた。
「大丈夫です、アッシュ。
俺があなたを護る」

……この状況では、こう言うしかないでしょう。

廊下に出て、階段を降りる。一階から、二階の別のドアに目をやり、小さな看板をじっと見上げた。

『美柑の部屋』

（お袋……）
俺は、あんたの子じゃないんだよな……。

ということは、当然、結城リトの子でもないわけだ。

ホッとしたような、悲しいような。

「……準備できたよ、ザック。
行こう」

再びドレスフォーム（ジャージ　笑）に戻ったアッシュが、階段を降りる。マスクもちゃんと着けてますね。
俺たちはバイクに跨り、夜の彩南町へ繰り出した。

ー午前1時　彩南町ー
「西連寺が屋根から念力で援護してくれます。俺が運転してるんで、アッシュは奴らのバイクを！」
「わ、わかった！」

背後からアッシュの頼もしい返事が返ってくる。さすがアッシュ、もう覚悟を決められた様ですね。
ザーッ
『結城君！商店街の方から、２台！』
無線から、西連寺の声が飛び込んで来る。
「了解」
ハンドルを握る手が汗ばむ。
ギュン！
角を曲がると、報告の通り、２台の族車が襲いかかってきた！
「グヘヘ、アシュラは俺のものだぁっ！」
「死ねっ、結城ザク郎！」
バットが振りかざされる。
「アッシュ！」

「つるつるスリップくん!!」
ヒュッ！
アッシュの手からメカが投げられ、
ビシッ
突如、路面が凍りついた！
ズダーーッ！
二台のバイクが折り重なって滑り転げ、
ドガァアン!!
後方で爆発する。
２人の暴走族は、道路に投げ出された。
『もう1台ッ！』
「終わりだぁあっ!!」
ダダダダダッ
エアガンを乱射し、ひときわデカいバイクが突進してくる。
ガチャン
ギアを下げ、急旋回。
「うおおおっ！」

地面すれすれまで車体を傾け、俺は敵のバイクに潜り込んだ。
「今です！」
「とるとるハンドくん！」
ガチィッ
アッシュが操るマジックハンドの様なアイテムが、敵のバイクの前輪を捉える。
「おりゃあっ！」
バキィン！
アッシュが思い切り前輪を引っこ抜き、
「うわ、うわわわわ、
うわーーーっ！」
ドォッ
前輪を失ったバイクが、ショッピングモールに突っ込んだ。
「いいっすね、アッシュ！」
「だ、大丈夫かな、あいつら……」
この状況でも、アッシュは敵の心配をしている。
やっぱりデビルークの中じゃ、一番人間が出来てるな。
路地裏をすり抜けると、にわかに景色が開け、無数の灯りが夜空を照らす。
「ここは……」
「大通り？」
ブゥン！
ブゥン！ブゥン！
「オラオラァッ！」
「その姉ちゃんよこせぇーーっ!!」
無数の排気音とともに、残る全てのバイクが向かってきた。
「ザック……」
「まじかよ」
どう切り抜ける……ッ
その時、
「念力集中ッ！」

頭上から鋭い声が響き、
ビシィッ
暴走族たちが、一瞬で固まる。
「西連寺ッ」
「結城君！今のうちに」
西連寺の構えに、周囲の空気が荒ぶる。整った髪は崩れ、鬼神の如き顔が露わになる。
「念力拡散ッ」
シッ！
ドゥッ!!
静かな殺意から、強烈な拳厚が飛ぶ。うねる波動。３０余名の暴走族たちは一斉に投げ出され、ライダーを失ったバイクが虚しく折り重なった。大人しそうに見えるが、こいつは空手の有段者だ。
「ナイスだぜ、西連寺！」
俺はバイクを反転させた。
その時！
「結城ザク郎
覚悟!!」
ダカダカダカダカッ……
鎧を着直したアーサーが、ララ様の発明品の一つ、「うまパカくん」に乗って来た。
「あーっはっはっは！ララ様の発明品、ダイエット用にしておくなど惜しいわ！」
「くるくるロープくん！」
アッシュが、その名の通りの発明品をアーサー目掛けて投げつける。
ビュン！
ロープくんがアーサーの首を捉える。
「甘いッ！」
ズババン！
だがアッシュのメカは、アーサーの光子剣に虚しく斬り刻まれた。

「ハァッ！」
ブゥーーンン!!
迫る光の刃と、うまパカくん。
「しまっ……」
「ッシャアッ！」
ガギィインン!!
俺はアッシュに覆い被さり、右手を上げ、磨き上げられたフライパンでガードした。
キィ
「ック！」
くそっ、片手じゃさすがに防ぎきれねぇっ……！
「ハッハッハ、結城ザク郎！炎を出すことしか出来ない、地球人並みに貧弱な貴様が……」
「……」
「誰かを護りながら、
俺に勝てると思うなぁあっ!!」
ズバンッ
バイクから全身が投げ出される。
「ザック!!」
俺は、奴に競り負けてしまった。

ズザァァァッ
地面を転がる。
……地球に来て、なまったかな……。
くそ、全身が痛ぇ。
「終わりだ、結城ザク郎」
うまパカくんを降りたアーサーが剣を構え、近づいてくる。既に正気に戻っているようだ。

終わったな。

俺は何とか立ち上がり、アーサーに向き直った。最期に一つ、聞いておきたいことがある。
「……アーサー。てめぇは結城リトの子どもじゃねぇ。しかも家臣だ。王位継承権すらねぇだろ。何でアッシュに手を出す。何のつもりだ」
するとアーサーは、急に忠臣らしい、しかし狂気的な笑顔を浮かべ、剣を横に構えた。
「フン、何を言っている。
私は、アシュラ様を殺しに来たのだ」

……なに？

「その迷惑なプリンセスがいるばかりに、長男であられるハンニャ様が、いつまでも王になれない！
私はハンニャ様のために、アシュラ様と、その婚約者候補ともども、葬り去るだけだ……。
貴様もなぁーっ!!!」
……。
（ハンニャ・アスタ・デビルークだと？）
暴走族「M．B．C」の背後には、第二王子ビシャモがついている。
そしてこいつは、第一王子ハンニャに仕えているらしい。
……なるほど、そういうことか。
こいつら皆んな王子たちの駒なんだ。
アッシュを殺すための。

俺は王にもデビルークにも全く興味はない。

だが、あのバカ王子たちのために、この命をくれてやる気もねぇよ。
もちろん、世話役として5年間お護りしてきたアッシュの命もな。
ブォッ!!
アーサーの剣、イマジンソードの刃が、夜の彩南を映し出す。

「ワーハッハッハ！格闘ナイトの力に沈めぇ!!!」

俺は後ろを向き、

線路を飛び越えた。

「……へ？」

プァアーーン

轟音と共に、特急電車が接近する。

この町で配達してりゃ、どこに飛ばされれば有利かぐらいわかります。

「あばよ、馬鹿ナイト。

宇宙まで飛んでいきな」

「……！っくそぉっ」

「電車」と言う名の地球の乗り物が、アーサーの全身に衝突する。

ゴッ!!

鈍い音と共に、

アーサーの身体が、夜空の彼方へ消えていった。

……

「アーサー、ハンについてたのか」

俺の後ろで、アッシュがポツリと呟く。

「しかもビシャは、地球に勢力を伸ばしてる」

「めんどくさいっすね」

少し離れて、西連寺が不思議そうにこっちを見ている。
「あいつも、私の顔見ても平気なんだな」
西連寺を見ながら、アッシュが呟いた。
「マジで？」
さすが俺のダチだ。

「お前以外にも、そんな男がいるんだな……。
もっと早く、地球に来ればよかった。
ザックと一緒に」
胸の前で小さく手を握り、アッシュは自分に言い聞かせている。
西連寺を見る。確かに、理性を失っている様子はない。だがアッシュを見るあの熱い目は……。
まためんどくさいことになりそうだ。
ふいにアッシュが、俺の方に振り返った。
「私、ザックが好き。
初めて会った時から、
ずっ……と……」
アッシュが、その綺麗すぎる視線を、じっと俺の目に注いでくる。
「あなたが出て行ってから、毎日ずっと忘れられなくて……
馬鹿になりそうだった」
俺は思わず、目の前の王女を見つめた。それは、世話役としてすぐ側で仕えていた時と全然違う、初めて見る表情だった。
俺の視線から逃れるように、プリンセスが、恥じらいの表情とともに下を向く。
だがそれでも、彼女は懸命に自信を作り、再び俺を見上げた。
「だから、おまえが振り向いてくれるまで、私は此処にいる。それで宇宙がどうなろうが知ったこっちゃない。自由に生きる！
おまえが、ずっと昔。私にそう言ってくれたみたいに……。
めんどくさいぞ。悪いけど」
少し涙ぐみながらも、ちょっと口を歪ませて、悪戯っぽく笑い、
そして、

「私、温室育ちだけどさ、
ずっと、あなたのそばに……いさせて」
太陽のような笑顔が、アッシュの顔に輝いた。
その笑顔が苦手だというのに。
「……お幸せに」
複雑な笑みとともに、西連寺が暗い夜道へと消える。
その反対側には、ボロボロの暴走族を束ねる新たな人影があった。
「彩南の問題児はテメェだな……結城ザク郎、アシュラ」
「リュウさんっ！」
暴走族どもが、いっせいに「リュウさん」に向かって頭を下げる。
「この町の均衡を崩しやがって……、制裁が必要だな」
リュウさんと呼ばれてる奴が、俺を指差した。
「俺がいる以上、お前が王になるなど許さねぇ。
覚悟しとけ」
そいつも暴走族を引き連れ、闇に消えて行った。
今あいつ、妙なこと言ってきたな。
何か知ってるのか？
王宮にいた方が間違いなく気が楽でしたね。今更ですが……。
横では、まだ幼いプリンセスが小さな手を差し出し、穢れを知らない目でじっと俺を見つめてくる。
まぁ、いいか。
俺はアッシュの手を取った。暖かい。確かに、宇宙からこの温もりが消えるのはもったいない気がするな。

……とりあえず、
「喋り方はこれで勘弁して下さい」
そうアッシュに呟いた。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

＊登場人物紹介・地球編＊

○結城　ザク郎　（夕崎　ザラ）
通称ザック。精神エネルギーに火を点ける、負けを知らない料理人。穴と底を持つ物体全てを火砲に変える能力を持つ。デビルーク王の妹に育てられたが、素性は謎。親譲りの度胸と毒舌ツッコミを駆使して本日も無双中。

○アシュラ・サタリン・デビルーク
通称アッシュ。デビルーク星の王女。その美貌で雄の理性を崩壊させる「チャームの能力」を持つ。口調の割に優しく、頭がいい。ザックが好き。

○西連寺　季虎
ときとらと読む。真面目でイケメンなクラス委員。とある幽霊から念力（サイコキネシス）を習得している。だがお化けは苦手。ザックの親友。

○古手川　龍
ツンデレ。ヤンキーの癖に風紀委員をやっている。厳し過ぎる母親の影響でグレてしまった。妄想を爆発させ、アドレナリンを大量放出し、無敵状態になる。

○天条院　アーサー
元デビルーク王室親衛隊隊長。イマジンソードを持つ剣士。自信過剰かつ超絶バカな変態紳士（ナイト）。

○ホリー・エルシ・ジュエリア　（ホーレン）
裏表の激しい、メモルゼ星の王女。地球では人気アイドル。銀河通販の商品を武器に戦う。ザックが好き。片割れのホーレンは兵役中。

○妻村　力
チャラいクラスメート。挨拶代わりに乳首を摘んでくるヤバい奴。テニス部所属。ノリが良く、フォローの天才。

○指野　実
メガネのクラスメート。隙を見てはカンチョーしてくるエグい奴。

オタク。宇宙一役立つ情報屋。

○猿山　智子

エロいクラスメート。アッシュの親友であり、希少な常識人。放送部。母親が銀河最大のタブーらしい。

○九条　麟

銀河警察の潜入捜査官。彩南高校の先輩でもある。日本刀の形をした生体兵器「ブラディクス」を無理やり服従させる地球人最強の男。高所恐怖症。ナインの腹違いの弟。

●地球

辺境の発展途上惑星。近年やっと異星人に対する法が整備され始めた。現デビルーク王の故郷である彩南町は、かつて宇宙一と呼ばれる医師や科学者が在籍していたこともあり、銀河の重要都市に指定されている。また同星王妃たちの影響で、銀河中から料理人やアイドルを志す者が訪れ、交流が耐えない。だが同時に違法な武器、薬物、人身売買、密入国が横行し、宇宙の密輸組織と地球の反社会勢力との繋がりが示唆されている。さらに再びデビルーク第一王女がこの地に亡命したことで、危険な婚約者候補や傭兵、暗殺者たちが飛来し、宇宙連合や銀河警察では「ダークネス事件」以来の緊張が高まっている。

●メモルゼ

ジュエリア王国が統一する惑星。１つの体に男女別々の人格を持つ、希少な星人種を有する。競争心の強いメモルゼ人の特性に加え、地表の大部分を砂漠が占める過酷な環境下から、常に内乱が絶えない。軍事力が高く、またしばしば爆弾や宇宙船を用いたテロを行うことから、他惑星から警戒されている。

第４話「バーンアウト・ハイスクール」

「ふほほほ！久しぶりですね、
クロウ・キリサキ」
闇の中、なんか変なじいさんがケンカ売ってきました。
あんた誰？
「我が名はツカイ・マワッシ伯爵。
あなたの両親に滅ぼされたウザースの恨み、ここで晴らせでもらいましょう……」
ズシャッ……
変なじいさんの陰から、男が現れる。
「嘘、だろ」
そこにいたのは、昨日宇宙に吹っ飛ばしたはずの、あの……。
「ゆけ！アーサー☆天城院Ｚ！」
キェエエエーーィッ!!
くそっ
俺はフライパンを引っ掴み、そして……

「夢見てるんですかぁ、先輩？」

ガバァッ！
目が覚めた。

あ、おはようございます。結城ザク郎です。
なんだか不快な夢を見ていたような……。
ただ今ベッドの上で、なぜか昨日のフライパンを持っている次第であります。
結局あれから、家は直りました。アーサーの側近が２人いたでしょう。あれ（ナインとフジとかいった名前でした）を人質にとって、そいつらの通信機からデビルークに、家を直せと脅したんです。どうせ居場所はとっくにバレてるでしょうからね。

そしたら一瞬ですよ。ブゥン！って、一瞬で側近が消えたと思ったら、もう家が直ってたんです。壁の傷とかポスターとかもそのまんまです。怖すぎる笑

ありゃ脅す相手を間違えましたね……。

アッシュがいることもあって、常に自宅を監視されてる訳にはいかない。今は家全体に強力な盗撮・盗聴遮断バリアーを張ってます。

これは確かモモ様のメカだったかな。

モモ・ベリア・デビルーク……第二王子ビシャモのお袋。

あのお方こそ、リト様……親父のハーレム構築に最も貢献した人物だ。

悪人なんかじゃなかった。ただ親父が好きで、でも、親父や他の王妃たちの想いにも目を背けられなかったから、「ハーレム」という手段を取った。別に珍しくもない。他の王国でもよくやってることだ。

でもその結果が、今の王位継承戦争に繋がった。

優しすぎたんだ。モモ様も、親父も、皆んな。

でも、王座は違う。一つしかねぇ。欲しい奴にとって、他の奴は全員敵だ。

まぁ親父の世代が、そんなことまで考えて地球の高校生活送るわけがねぇ。これは俺たちの問題だ。

俺も巻き込まれた以上、覚悟決めねぇとな。

とりあえずアッシュはお護りする。例えどんな目にあっても。

珍しく崇高な思いで、俺は昨日のフライパンを握りしめた。

しっかし、昨日のフライパンか……

た、確かこの上にぜ、全裸のアッシュが跨って……

ムラムラしてきたｗｗ

いや、このフライパンはね、電圧式で、底だけちょっと鏡みたいになってるんですよ。だから……

あの時ちょっとだけですよ、本当にちょっ、とっ

映っ

あああああああーっ！

し、しかもよく見たらこ、ここ濡れてるぅっ!?　まさか……いや汗だよ汗。そうに決まってる！いやにおったりしませんよ分かんないしさすがににおいは……

フォオオおおおーーーう!!これ絶対アレだ！これ絶対アレ……
やっべぇっ！
こんな状況、学生時代の親父にとっては日常茶飯事だったらしいが……。
親父はどうやって耐えられたんだ!?ぶっちゃけ結構見てきただろ!!アレとか、アレとか！しかも見ただけじゃねぇよな！
唯様とか
「そんなこと一度もないわよ！馬鹿じゃないの!!」
って言い張ってたけど絶対嘘だよな!!
春菜様も
「ちょ、ちょっと、見られちゃったことはあるかな／／／」
とか言ってたけどもっとやらかしてるよな!!
ヤミさんにしつこく聞きに行った猛者が行方不明になってるけど、あのヤミさんにもやったってことだよな！
コックの同僚は、俺のお袋に聞いたらゴミ見るみたいな目で見られたって言ってたけど……。
「ラッキースケベ」
この能力こそ、宇宙最強だ。
親父すげぇ!!
俺には絶対無理だ！こんなの耐えられない!!

……
「バリアー万歳!!」
俺はフライパン片手に、パンツを下ろした。
宇宙人だってこういうことしますよ!!
みなさんには、僕の家族構成でもお話ししますね　笑
俺たちの親父であり、銀河の覇者、現デビルーク王のリト様は地球

人で、子どもは養子の俺を合わせて１１人います。（ただ一人、一つの体に男女の別人格が共生している奴がいるので、それを含めると１２人です）。
娘は３人で、あとは皆息子です。
親父は１１人と結婚したので、皆一人っ子です。その内デビルークの王族は３人だけで、アッシュことプリンセス・アシュラ、そして昨日の話に出てきた２人の弟、ハンことプリンス・ハンニャとビシャことプリンス・ビシャモです。
あとは王宮に仕えたり、地球で暮らしたり、他の惑星の王族だったり、行方不明だったり、追われてたり（俺ｗｗｗ）します。
ハンといえばデビルークきっての武闘派で、親衛隊を手篭めに出来たのも頷ける。噂では情報局の局長とも親しい間柄らしい。
実は知能派のビシャが怖いと言う人もいますが……ハンに暴れられた方が犠牲は大きいでしょうね。
はーぁあ……めんどくさ、っ
あーーーー
ガチャ
「ザックー、おはよう。今日学校とか……」
……
「おまえ、そのフライパン……」
そう言ったアッシュの顔が青ざめる。
まずい！昨日のこと覚えてる！
「いやいやいや別にフライパン見て興奮とかしてねぇし！昨日の今日ですから、またなんか襲ってくるかもしれないし！備えてただけだし！何ですか!?」
アッシュの視線が殺気を帯びる。
まだ寝起きで髪も整ってませんが、勘は冴えている様です。ダメですね。こういう男の嘘って、女性にはぜっったいバレます。
プリンセスの強烈な舌打ちッ！
ズカズカと部屋に入るなり、俺の手からフライパンをふんだくる。
「これは私が預かる」

そして……
こ、殺されるぅ！
「も、申し訳ありませんでしたぁっ!!」
俺は潔く頭を下げた。
「結婚してくれるなら、返してもいい」
……あれ？
「それまではダメ！朝ごはんも私が作る。マズくても我慢して食えよ」
アッシュが顔をまっかにして、足早にドアへ戻る。
そしてちょっと涙ぐんだ横目で睨みながら、

「エッチ」

バタン！
出て行った。

これ以上の生殺しには耐えられれん。
俺はさっさと制服に着替えて、学校に行くことにした。
（アレは公園のトイレで処理しよう！）
ガチャリ
玄関のドアに手をかける。
「行ってきま……」
「ザック、朝ごはんは？」
「……」
「食べるよね？」
そうだった……。
「アッシュ、お料理のご経験は？」
「ぜんぜん」

やっぱり。
フライパンを取られた俺は、姫君の料理に任せるしかなかった。
ー午前7時４０分　通学路ー
アッシュの朝飯は、思ったほど酷くはありませんでした。たぶん地球ではダークマターが入手困難だからでしょう。あれ入れないだけでも大分違います。
朝の時とはうって変わり、アッシュは満面の笑みで俺を送り出してくれました。服装もジャージではなく、地球の可愛らしい服着てましたね。
そう、今日は学校なんです。
しかも新学期です。４月です。
（もう高二かぁ……）
進路のこととか、なんも考えてねぇや　笑
「おはよう、結城くん」
後ろから、馴染み深い声がする。
「おぅ、西連寺」
こいつから挨拶してくるなんて珍しい。
「あのさ、結城くん」
西連寺が、酷く悩んでるように俯く。目にくまができている。
やべぇ、こいつ寝てねぇな。
「昨日のことなんだけど」
「おーっす、季虎ぁ！」
ズニュ
「いった！」
空気読まずに西連寺を羽交い締めする奴が一人。
「あー、おしい。乳首はもうちょい下か」
これ言ってくる奴いるよな。
「結城も久しぶりぃ」
「一昨日会ったばっかだろうが」
こいつはクラスメートの妻村です。
こいつが来たということは……

プス
「フンッ！」
「ぎゃああ指が折れる」
指野もいます。いつものごとくカンチョーしてきたので、ケツ筋でへし折ってやりました。
「だから俺にカンチョーは出来んと言うておろう愚民め」
「くっそぉー後ろから来たのにどんな反射神経してんだよお前、宇宙人かい！」
「宇宙人があんなうまい飯作れるはずねぇだろー」
妻村のツッコミに指野が笑う。俺のことを知ってる人間は西連寺だけです。いまのところは、ですが。
もう宇宙人なんて当たり前の世の中なんですが、俺の場合はちょっと、ね。
「結城、お前今日くらい教室来いよ。新学期だぜ」
「あー、おんなじクラスだったらな」
俺は本来学食のコックで授業には全然出ませんが、この星は高卒のが何かと有利なんで生徒として登録してもらってます。なんでも俺のメニューで東大行ったり、運動部で優勝したり、難病治したり、更生したりする生徒が続出したらしく(だいぶ盛りました)、それでこの特別待遇です。
結構なことですが……飯で変わるなんて地球人はピュアすぎる。
宇宙全部がこれだけ純粋だったら、俺も胸張って教室に出入りできるんだがな。
俺も、アイツも……アイツも。
まぁ授業なんて受けなくても全部解ってますが。
「今年も体育だけはよろしくな。宇宙人圧倒する人間なんてお前しかいねぇ」
「また食いに行くぜー」
「おーう」
「季虎先行っとくぞー」
「クラス一緒だといいなー」

「……」
いい奴らだ。
二人を見送ってから、俺は西連寺に向き直った。心ここに在らず、って感じだ。理由は聞かなくてもわかる。
「アッシュだろ？」
「え？」
「プリンセス・アシュラだよ。昨日俺といた奴。
お前の妹だ。お袋は違うけど」
「……あの子が、結城くんの言ってた」
「ああ、地球に来ちまった」
こういうことは先に伝えた方がいい。王宮は極秘とかほざいてるが、無視だ。
「西連寺！」
俺は西連寺の細身な両肩に手を置いた。久しぶりにマジになる。
「一回の失恋しか知らん童貞が教えてやる。叶わない恋もある」
「……。
お前はアシュラさんと付き合ってはいない、ということか？」
避難するような目で、親友が問いかける。
「ああ。面倒くせぇことになるし、俺には他に……、忘れられない奴がいる」
「そのこと、アシュラさんは」
「……」
ダメな俺は何も言えなかった。
「お前！」
突然、西連寺は俺を振りほどき、構えをとった。怖い奴。すげぇ覇気だ。
「落ち着け、俺も自分でよくわからねぇんだよ」
「そんなわけあるか!!」
ビシィッ！
全身に負荷がかかる。くそ、こいつの念力……洗練されてきやがったな。

「あの子は……アシュラさんは、お前を想って地球まで来てるのに……。そんな中途半端が許されるか！」
服が強張る。
一歩でも動けば内臓がぶちまけられる。
（こいつ、キレたら手に負えねぇからな）
チィッ
どうしたもんか……
ちょうどその時、彩南によくいる某パパみたいな犬が歩いて来た。
チャンス！
俺はカバンの金具を燃やして、上手いこと食材の鶏肉をちょっとこぼしてやった！
こっち来い、犬！
クンクン
「ばう、ばう！」
「ヒイッ、犬ぅ！」
不意を突かれ、西連寺の念力が消える。犬飼ってる奴がビビってんじゃねえよ。
「そんなんじゃモテねぇぞ」
俺は犬を抱き抱えて笑ってやった。
「……申し訳ない。取り乱してしまった」
西連寺は歩き出しながらも、またしょぼくれている。
「まぁ地球人にはわかんねぇよ。スケールがでかすぎてな」
そう言って俺は誤魔化した。
でも、そうも言ってられない。
西連寺が本気でアッシュを愛するなら、婚約者候補ということになる。アッシュの気持ちに関わらず、次期デビルーク王候補者になるわけだ。
そうでなくても西連寺は、デビルーク家ではないものの、王の血を引いている「息子」の一人だ。今までは本人が蚊帳の外だったが、こうなった以上、他の候補者から目をつけられるのも時間の問題になった。

「僕の母さんは、これで良かったのかな……」
ぼそっと、西連寺がつぶやいた。
「デビルーク王……僕らの父さんは、ちゃんと母さんを愛したんだろうか」
「……」
まぁ、そう思うのが普通だ。深く考えようとしない俺よりマシです。血が繋がってる人は悩むでしょうね。
西連寺春菜
親父が本当に愛したのは、この一人だった、そんな噂がある。お袋もいつかそんなことを言っていた。
何で、二人だけで地球に暮らさなかったのだろうか。
「なぁ、結城君」
ふいに西連寺は、決意をこめた顔で俺を見た。
「君のご両親は、僕たちの父さんと、その妹なんだよね」
「あ、ああ」
「じゃあ、そういう選択肢もあるってことだ」
ん？
まさか……
「俺、諦めないよ。
アシュラさんと結婚する！
例え血が繋がっていようともな」
やっぱそうきたかーーーーー！
親友だからって、ちょっとこいつに色々話しすぎましたね。
「その時は、
また組手でも」
たくましいガッツポーズしやがった。こいつ、意外と強引だな。
やっぱアッシュの顔見てから、何かしらの影響はあるみたいですね。静かな暴走、といったとこでしょうか。
「いや、朝から不快な思いをさせて悪かったね。
じゃあ、また会おう。あのゲーム以外なら、いつでもお相手するよ」
気がつけば正門前です。俺は西連寺とも別れて、一人職員更衣室へ

向かいます。
しかし、やっぱ西連寺はイケメンだな。見た目も性格も、デビルーク兄弟よりよっぽど王子っぽい。「テニス」やってるし　笑

もうあいつが次期デビルーク王でいいんじゃないか？
まぁでも、アッシュの気持ちを考えないとな……

そんなこと思いながら、俺は自分の主戦場である食堂の厨房に立っていた。
「結城ぃ～！」
勢いよく戸が開いて、指野が駆け込んでくる。
「よう指野、まだ始業式前だろ」
「それどころじゃねーよ、特大のニュースだ。いいやつと悪いやつ、超すげぇやつの三つ」
「順番に教えてくれ」
指野は彩南高一の情報通で、どっから集めてくんだ？ってレベルの質と量を揃えている。いつか俺の出生についても調査してもらいたいもんです。
「全部クラス替えのことだ。まず俺ら4人、俺とお前と西連寺と妻村はみんな同じクラスだ。あ、あと猿山も。それが一つ。そのかわり、あの古手川龍も一緒らしい。あいつと季虎がぶつかったら彩南高は崩壊する。だからなんかあったら俺はお前に救援を頼む。それが悪い一つ」
ああ、古手川ってあいつか。彩南でも札付きの不良です。直接見たことはありませんが、話聞く限りそんなに悪い奴とは思いませんけどね。家族想いらしいし。あと不良の衝突なんかなくてもこの学校は十分崩壊の危機です。そうです、俺のせいです。ごめんね。てへぺろ。
「で、目玉は？」
「聞いて驚くなよ」
指野は息を整え、眼鏡を外した。

何で眼鏡外すんだよ　笑

「すっっっげえ可愛い転校生が来るらしい」

ふぅ、なんだ。

その手の情報ほど期待外れなものはありません。なんせ俺は「チャームの能力」すら効かない面食いですからね。人気女優の顔面だって大したことないですよ。

アッシュ以外で可愛いと思った娘は……二人ぐらいかなぁ。

あ、王妃は全員美人ですよ。おばちゃんとは思えないくらいです。

まぁとりあえず、話にのってやりますか。

「どんくらいだよ、それ」

「おう」

「あの生徒指導部の鳴岩が」

「ふむ」

我が校最恐の先公だな。

「証明写真見た瞬間」

「絶叫してシ〇ったらしい」

あああああ？

「そういえば始業式の前にまずうちのクラスで紹介があるんだった！

こうしちゃいられねぇーっ」
「まて指野、行くなッ！それぶっちぎり最悪のニュースだぞっ」
いそいで彼を追いかけようとしたが
遅かった。
もうすでに、俺は敵の罠にはまっていたらしい。
指野が厨房を出ていった瞬間、
ズダン
何かに足を取られ、俺は転がった。
閉まるドア。
閉まるカギ。
血だらけの足に、絡みつく鉉。
「これ……ナスか？」
俺が用意した食材だ。生きてるみてぇに締め付けてくる。そして鉉の先には包丁がくくりつけられていた。
「くそっ」
俺の脚を斬り落とす気かっ。
背後から息遣い。
（誰だ……？）
肉が床を這い回り、くっついて、やがて……牛、馬、豚、猪、生前の姿に戻ってゆく。
しかも猪はギガイノシシっつー超危険な宇宙動物。
そいつらが口を開けて……
「お前が殺した」
「お前が殺した」
「この町から出て行け」
「殺し屋め」
「ここはお前の居場所じゃない」
何者か知らんが、悪趣味な真似しやがる。
「まだ人殺しはねぇっつの」
しかし、どうする。
両脚を拘束されている、この状況で撃てる技は……

パンチ　座ってるから無理
グランド　敵は一体じゃないから無理
ブレス　火を吹くことはもちろん出来ますが、威力が低すぎる。あれは広範囲をじわじわ燃やす技で、こんな密室でやったら俺も巻き込まれます。
（やっぱ飛び道具しかねぇよな……）
よし、
あれしかねぇ！
俺は足をバタつかせてなんとかズボンとパンツを下ろした。
そうです。あの「穴」を使います。今日は朝から下ネタばっかですいません。
仕方ない。そんなに食われたくねぇなら、食材は諦めてやりますよ。
ドドドッ！
ギガイノシシ（以下ギーちゃん）の猛進。
俺は、ちょうど足に絡まった荊棘がギーちゃんの牙に引っかかるように、どうぞいらっしゃい、といった感じで両足をあげた。
突撃してくる豚を、股開いて受け入れる俺ｗｗｗなんて恥ずいポーズｗｗｗお袋が見たらドン引きしそうです。
ブチブチィッ！
ちぎられる荊棘。そして
ドゴォッ
「ぶげぇっ！」
巨大な鼻がもろ腹に突き刺さった。ぶっ飛ぶ俺。壁に激突、皿が散乱する。
でも、これで両足が自由になった！
前ではギーちゃんが前足を蹴り、二発目の準備にかかっていた。次に食らえば、さすがに内臓が破裂する。
だが食らうのは一発だけだ。
「後悔させてやる、畜生め」
俺はギーちゃんのタックルでガスが押し出された腹に思い切り力

を込めた。只今俺の肛門は世界一凶悪な火炎砲となっております。
喰らえっ
「っそれーーい！」
ブッブボボボボアアアアアァーーーーンン!!!
俺は思いっきし、放屁した。
俺の有害ガスが、火炎を纏い、ギーちゃんたちを包み込む。
「ブヒィィィイッ!!?」
ドサッ
大事な食材は全部、めでたく悪臭を放つ丸焼きになりました。もう使いようがない。コックが食堂で一番やっちゃいけないことを仕出かした結果です。なんか自分が泣けて来た。
俺はムシャクシャしてドアをぶっ壊してから、びっこひきながらも全力で新しい教室まで走った。
もうとっくにアッシュは教室に入ってるでしょう。マスクを着けてても、俺を襲ったのと同じ奴が、何とかしてマスクを無理矢理外してるに決まってます。
きっともう男子生徒はチャームの能力にやられて、とっくに暴走してるだろうな。
仕方ねぇ、そん時はアッシュだけ連れてズラがるか、全員ぶっ飛ばすだけだ！
ガラガラッ
教室の扉を開ける。
目の前に広がる光景は、俺の予想からはかけ離れていた。
血と埃で、赤黒く染まった壁。
隅で震える女子たちの、啜り泣き。
床一面に転がる、ピクリとも動かない男子たち。
そして教卓には、どういうわけか傷一つなく眠る、アッシュの姿。
「来たか、結城ザク郎」
なんだ、あいつは。
「感謝しろよ。俺がこの転校生を守ってやったんだ。こいつらの暴走からなぁ」

真ん中にただ一人、立っている生徒がいる。
思い出した。
こいつは昨日、暴走族の中心にいた奴だ!!
「勘違いするんじゃねぇぜ。俺はただ風紀を守る為にやっただけだ」
まさかこいつが……
「こんな女子と同棲してやがるなんて、
『ハレンチ』だよなぁ?お、ま、え」
この男が……
「……消えな」

こ……

こ……

「コケ川?」
「古手川だ!!!」
to be continued

第5話「バーンアウト・ハイスクール　Ⅱ」

「ザックぅ……助けて」
　半泣きでそう漏らすのは女子生徒の猿山。こいつも西連寺と同じ中学出身です。
「西連寺は⁉」
「わかんない……さっきどっか行ったぁ」
「うるせぇぞ女子！静かにしろ」
　古手川がイラついた様子で俺に向きなおる。俺は教室を見渡した。死屍累々、俺とこいつ以外立ってる野郎は一人もいない。古手川の奴、1人でこれだけやったのか。西連寺がいないとはいえ、ただの喧嘩慣れした不良なんてレベルじゃねぇ。地球人離れしてやがる。
「だいたい授業もろくに出ねぇ奴が、生徒だと？非常識だぜ、おまえ」
　古手川が風紀委員の帳簿を取り出し、俺を睨みつける。
「校長に頼まれてっから校則違反じゃねえんだよ、残念だったな」
「黙れ！俺が校則だ……」
　古手川とかいう非常識風紀委員は肩を引き、拳を縦に構えた。
「こんな不条理な世界、俺が変えてやる。たかがコックのおまえが次期デビルーク王になるだと？ふん、俺は認めねぇ」
　ああん？
　誰からの情報でしょうかね。
　古手川龍
　親父の息子の一人。西連寺と同じ地球人だ。
　確かにこいつにも、王位継承権は十分ある。
　こいつが自分の素性を知っているかどうかはわかりませんが……。
　やはりさっきの攻撃といい、何者かが裏で動いてるみたいですね。
「大人しく俺に殴らｒ」
　ええぃ
「先手必勝ぉお！」
　なんかカッコつけて語り出しましたが、今がチャンス！躰を丸め、いっきに踏み込み、右足でハイキックを放つ。

「ホアチャア！」
古手川は動揺しながらも弾丸のようなカウンターキックを俺のこめかみに合わせてきた。カンフーか！
ガァン！
俺と古手川、両者の脚が一瞬競り合う。そして、
「クッ」
古手川の重心がぐらつく！こっちはジェットブーツを履いています。学校指定の上履きには負けません。
「まて結城ザク郎！まだ話は」
「そりゃーっ」
その勢いで畳んだ左膝を古手川の股間へ潜り込ませた。アーサーの時と同じ、股間を蹴り上げてやる！体の柔軟さと外道さを兼ね備えてる奴にしか出来ない技です。
左膝を突き上げるため、思い切り右足を跳ね上げ……
ズキッ
「がああああっ」
荊棘に足やられたこと忘れてたｗｗｗ
不安定な俺の体がなすすべもなく崩れる。
その時、俺の左膝が、
古手川の股間に、
グニュン
と、ゆっくり擦れた。
（ありゃ？）
「ああんっ！」
ん？
古手川じゃねぇ。この声は……
背後の教卓へ振り返る。
舌を出し、腰を浮かせたアッシュが、大きく痙攣していた。
（こ、これはどういう……）
「……今、俺の感覚は全部あいつに行くようにしてるんだよ。
テメェが俺を傷つけられないようにな……」

古手川が何故か顔を真っ赤にして説明し出した。
「だから、お前はただ俺に殴られるだけだ、って言おうとしたのに……お前が話を聞かないから……」
ズオッ
四方から強烈な負のオーラが立ち上がる。
見渡すと、今のアッシュの声に欲情したのか、気絶していた男子どもがよだれ垂らしながら近づいて来た！もう女子たちは恐怖を通り越してドン引きしてます。
「おい古手川、これヤベェぞっ、て……」
古手川？

「ち、違うぜアシュラ、今のは結城が話を聞かずに攻撃してきたからこんなことに……
『ふふ、いいよ。慌てなくて』
アシュラ？」
なんか古手川が一人で喋りだしたｗｗｗ
『でも私、ほんとはザックじゃなくて……古手川くんに触られたかったな……』
そ、そ、そんな……オメェ……
『……たまには早退も、ね』
な、なに言ってやがるっっ！」

「な、なに1人で言ってんだ古手川……」
「ハッ！
こ、この変態がぁぁあっ！」
「いやお前だろ!!」
どんな性格してんだこいつは！
無駄口叩いてる間に、クラス中の男子に囲まれちまった。しかも全員暴走する変態。
どうする、もう屁はでねぇぞ。
「コォォォォ」

ふいに古手川が身をかがめ、俺に向かって両手から気を放つような動作を始めた。
いやいや、何してんだよお前。人間からは何も出ないから……
『キャノンフラワーッ！』
何ッ!?
ボシュッ！
「ハァーッ!!」
ドドゥッ!!
(!!?)
ビュン!!
ドガァッ
感覚だけでかわした。
俺の耳から、血が流れる。
振り向けば、黒板には煙を吐く痛々しい穴が空いていた。
埋まってるのは巨大な植物の種。
どういうこった。
あいつ今、キャノンフラワーっつったな……。
キャノンフラワーといえば、危険度S級の惑星で凶悪な進化を遂げたお化けホウセンカのことです。
でっかい種子を弾丸みたいに飛ばすのが特徴。馬鹿みたいに速くて、俺でも見切るのがやっと、てのは知ってるんですが……。
それにしても速すぎる。それこそ非常識だが、この人間の力で速度が増幅されてるとしか思えねぇ。
「とどめだ」
古手川の手元で、花びらがきらめく。あいつ、ただ気を溜めてたんじゃねぇ。あん中にキャノンフラワー隠してやがったんだ。
クソッ
足さえまともに動けばな……
俺はただアッシュの前で体を張るしかなかった。
その時！
「来たよ、結城君！」

この声は、
西連寺ッ！
『念力集中！』
ビキィッ！
硬直する男子たち。またもや非常識人間が登場しました。でもこっちは味方です！
「季虎！」
猿山が叫ぶ。普段明るい女子のこういう声聞くとなんかドキッとしちまう。ぶっちゃけると、彼女は西連寺にずっと片思い中です。
「結城君、今のうちにアシュラさんを！」
「西連寺……ちょうどいい。お前を倒して、俺がクラス委員になる！」
シュルシュルシュル……
古手川は標的を変えたらしく、全身にキャノンフラワーを装着させ、一斉に西連寺へ向けた。
「危ない！」
だが、
『クラウドン！』
ボワー
西連寺の周りに、雨雲のようなものが立ち込める。
ドドドドドォッ
発射される種子ッ
バリバリバリバリ
だが全ての種子は、西連寺の雨雲から放たれた稲妻に叩き落とされた！
強ぇ、クラウドン……ってなんだっけ、動物？
「結城君、早くアシュラさんを安全な所へ！」
正直この二人の闘いをもっと見ていたいですが、そんな暇はない。
俺はアッシュを抱きかかえて教室を飛び出した。
ガラスの散乱する廊下を走り抜け、階段を駆け上がる。
お姫様抱っこは走りにくい。ですが、マスクの外れた彼女の顔を隠すにはこれが一番です。実際お姫様ですし。

制服も似合っておられる。
俺がもっと強けりゃ、この星でずっと幸せに暮らさせてやれるのに。
でも俺には、
忘れられない人が……
「ザ、ザック……」
薄目を開けて、アッシュが俺の顔を見上げる。意識が戻ったみたいだ。
「わ、私……履歴書なんて出してないのに、ザックの高校から手紙が来て、手紙開けたら……気がついたら、教室にいて……」
「大丈夫ですよ。俺がいます」
しまった、言っちまった。つい昔の癖で……。
無責任な俺に、アッシュが優しく微笑む。
「足、怪我してんじゃん」
降ろして。
そういって、彼女は俺を止めた。
「まだ危ないですよ。追ってくるかも」
「大丈夫だって」
どこに持っていたのか、柔らかい包帯を取り出し、端を口に咥えて、両手で俺の足に巻き始める。くすぐったい。傷口に、温かい吐息がかかる。
「酷い傷だな。何にやられたんだ?」
傷は焼いて治すもんだと思っていたが、こういうのも悪くない。
というか、もうずっとこのままがいいな。
でも、もし、こうしてくれるのが……。
アッシュの澄んだ緑色の目に、
一瞬、
あの赤色を重ねてしまう。

最低だな、俺。

『そんな中途半端が許されるか!!』

西連寺の言葉が胸をえぐる。

「アッシュ」

俺は、ピンク色のつむじに話しかけた。アッシュは顔を上げようともせず、包帯を巻き続ける。

悲しすぎる想いから目をそらせて、俺たちはどこまで歩んでゆくのだろう。

俺は……

「俺には、好きなひtぶげぇあっ!!」

「ザック!?」

顔面に、なんかでかいタコの足みたいなもんが激突してきました。流石にアッシュもこっちを見てくれます。

「チュミミーン!」

現れたのは、やっぱりでかいタコでした。

「アッシュ、逃げてっ!」

俺が叫ぶより速く、奴は器用にアッシュの体を巻き上げた。

「ザック!やばいっ」

プリンセスが括れた身体をくねらせ、懸命に逃げようとする。だが抵抗虚しく、アッシュの制服はすぐに吸盤で吸い上げられた。

アッシュの下着が現れ、やがて崩れ始める。

こ、これは……!

ぷるん!

うおおお……

ちゅうううう

マ、マジかぁ!

アッシュのお、おっぱいを……もう一回見られるとはっ!!

「あ、くっ、た、助けてっ！」
「は、はいっ！」
プリンセスの呼びに俺は我に返った。アッシュの方から助けてとかめったに言いませんからね。これは命を賭して救出せねば。
って
あり？

俺の足にも吸盤が……
「チュミミーーン！」
ブラァーーン
俺もあっけなく捕まった。
「ごめんなさいプリンセス」
「こ、この役立たずっ」
さすがのアッシュも怒ってます。そうですね、タコの足は一本じゃないですよね。
ぐるん
「きゃうっ！」
アッシュを助けられないばかりか、今度は自ら、アッシュの御体に絡まりにいってしまった。
しかも、互いの頭と足が逆になっている。
こ、この格好は、噂の……
（しまった！プリンセスになんて失礼な格好を!!）
俺は必死で体勢を戻そうとした。
だが、
「い、いやっ。ザッ……ク……」
アッシュの口から、聞いたこともないような声が漏れる。
俺はおそるおそる、自分の手が突っ込まれてる先を見た。
スカートの中に、
薄水色の、湿った三角形が……
小刻みに震える白い太ももに、輝く水滴が流れる。
あーこれは、

これはあかんわ。
急に沈黙しだしたアッシュの目の前には、どーせ俺のおっ勃った「アレ」があるんでしょう。
こりゃ後で顔面変形するまで殴られても仕方ねぇな。
どっちにしろ脱出せねば。
「ア、アッシュ」
「……ええ？」
俺は考えた末、思いついた打開策を言ってみることにした。
「今、尻尾ビームとか出ます？」
なんか説明する機会があんまなかったんですが、デビルーク星人には黒い悪魔みたいな尻尾が生えてます。あとはどっからどう見ても人間です。俺みたいに。そして大抵の個体はそっからビームを出せるんですが……。
「ハァ……ハァ……
ダメ。私、出ない。なんか生まれつき出にくくってっ」
たしかにアッシュには、お袋のデビルークの血はあんま受け継がれてないみたいっすね。性格はララ様に似てるけどもっと人間臭いし、能力は完全にお婆ちゃんのチャーム人譲りだし。
そうはいっても、2人の両手足がタコに封じられてる以上、尻尾しか頼みの綱はないです。
「もう絶対出ないんですか？」
「……」
切羽詰まった俺の問いかけに、アッシュが何故か顔を赤らめる。
そして遂に、消え入りそうな声で、こんなことを言った。
「　……　いっぱいこすったら、出るかもしんない」
そんなこと言われたらッ！
俺も（白い）ビーム出そうッッ!!
ドドドド

また新たな人影が現れた。しかも一人じゃねぇ。
「こんなところにピンチの美少女発見!!」
最悪だ。あいつらは確か野球部の三年……
「よし、お前、助けてやるから俺と付き合え!!
って……」

「フォォオーウウ!こ、こんな可愛い女子いたか!?俺の写真集（盗撮）にもねぇぞ!
おい、お前今すぐ俺と結婚し……
って」

「ウーリィィイイイイイーッ!!」

「「「「さっすが先輩！一瞬暴走しないと見せかけてやっぱり暴走しだしたぜっ！
って……」」」」

「「「「「ウーーーリィィィィィィィィィィィィィィーーーーッ!!!!」」」」」
何なんだよこいつらｗｗｗｗｗｗｗｗ
相手は取り巻きもあわせて5、6人はいます。あんまこないんで、ここが上級生のフロアってこと忘れてました。
やばい、タコをよじ登ってくる。
「アッシュ!すみません!!」
「へっ？」
ギュウ
俺はかろうじて動く右手でアッシュの尻尾を握った
「嫌ぁっ、私、しっぽはぁっ！」
アッシュが俺に飛びつき、両手で俺の肩を握ってくる。なんとこの尻尾、デビルーク人にとっては性感帯でもあるのです！つまり今の俺はくそ野郎です。
「アッシュ」

最低野郎の俺は、性感帯を握り締めながらアッシュの潤んだ目を見つめた。
「やらなきゃ、やられます」
やかましい俺だけやられとけ変態めｗｗｗ
「……うぅ、わかった」
ベソをかきながら、アッシュが答える。
「後で許さないから」
可愛すぎるｗｗｗｗ
タコの頭を蹴っ飛ばし、なんとか２人で上に上がった。
「大丈夫です。先輩たち、何も見えていません」
「……いいから早くやれっ」
俺はアッシュの尻尾を暴走した先輩どもに向け、
力いっぱいしごき始めた!!
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
「痛い、アッシュ、肩を噛まないで」
「あっ！う、うるさいっ。はぁん！お、おまえもがまんしろっ」
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
シュッ、シュッ！
「やばいアッシュ、もうそこまで来てるっ！」
シュシュシュシュシュシュシュシュシュ
「ンン、ンクッ、ッハァッ、ハァッ！く、くるっ！なんか来ちゃうぅっ！」
「よっしゃあーっ!!」
シュココォォオオオーーッ！
俺はアッシュの尻尾を火が出るほどしごきまくった。
「いやあああああっ！」

バチチッ！
バッシュゥゥウウーーン!!!
溜まりに溜まってたビームが勢いよく飛び出し、
廊下が剥がれ飛び、
先輩たちは落ちていった。
死んではいないはずですが、記憶喪失くらいにはなってるでしょうね。
「……だ、大丈夫ですか、アッシュ」
「……ッ！」
アッシュはぐったりとしながらも、俺を振り払って下へ降りた。
怒ってますね。当たり前だ。
はあ……
とにかく、助かった。
なんか凄くいいにおいがする。
振り返るとそこに、巨大なタコ唐揚げが出来上がっている。
腹にくっついたタコ足をちぎり、食べてみた。
う、うまいッ!!
「アッシュ、２人で料亭を作りましょう！俺がメニューと接客、アッシュはビーム担当で！」
「……ぶっ殺すぞ」
アッシュの平手が飛んでくる。
「ぶべっ」
血が薄いとはいえデビルーク星人。危うくＫＯされるとこだった。
「プッ、
アッハハハハハハハ」
ふいにアッシュが腹を抱えて笑い出した。
「バッカみたい」
心地よい笑顔で涙を拭く。
「やっぱり、おまえといると楽しいな」
アッシュがこんなに笑ったの、久しぶりだ。
アハハハハ！

半壊した校舎に、俺たちの笑い声が響いた。
「はあ」
アッシュが、転がる揚げだこを見た。
「これ、キューオクトパスじゃん」
「なんですか、それ」
「ん、女の子がおっぱい大きくするやつ」
「どうやって……」
「……吸われて」
宇宙は神秘ですな。それより今一瞬胸を寄せ上げたアッシュがくっそ可愛かった。
「なんでこんなとこに」
「こいつだけじゃないです。俺がさっき襲われたのも荊棘とギガイノシシだったし、古手川はキャノンフラワー巻いてましたよ」
「……何？」
アッシュの表情が急に険しくなる。
「でも、助けに来た西連寺もクラウドン付けてきたし、必ずしも敵ってわけじゃ」
「ザック、
動物と植物だぞ」
まだ気づかねぇのか、そう言いたげにアッシュが視線を向けてくる。
「……弟たちに決まってる」
「あ！」
マジかよ、
すっかり忘れてた。
ハンニャは、動物と、
ビシャモは、植物と、会話ができる。
宇宙でも稀な能力だ。
「とんでもねぇことになっていると」
「うん、代理戦争だ」
王子２人が、比較的強い人間同士をぶつけて、後継者争いを始めて

いる。
そして、邪魔な俺やアッシュを殺そうとした。
しかもアッシュに対しては……
ふつふつと怒りがこみ上げてくる。王位のためなら、姉の体など汚しても平気だというのか。
「ぶっ殺してやる」
俺は床に開いた穴を飛び降りようとした。
「待て！誰をだよ」
「まず、あの古手川とかいう奴だ」
「人間なんだろ？そいつも騙されてるだけだ」
「だからですよ」
「でもクラスメートじゃんか！これから友達になるかもしれない」
「騙されるような雑魚はいらない」
俺がそう言い終わらないうちに、アッシュが俺の頬をつねってきた。
「いてててっ！離して」
「いい加減にしろっ、ザック」
本当に面倒くさい人です。
「もう、殺し屋の息子とか言われたくないだろ。おまえ」
切実な声でアッシュが訴えてくる。
なかなか言いますね。
「どっちかというと、アイドルの息子って言われる方がムカつきます」
「なんだよ、それ。どっちでもいいけど、ザックに変な噂が流れるのは私も嫌だから。
おまえが誰も殺さないように、私が見ててやる」
「え？」
「私も戦う」
アッシュはそう言い、小さな拳を握りしめた。
いいかもしれませんね。この機会にトレーニングも。自分で身を護れるんならもう俺もいりませんし。
「……じゃあ、一緒に行きますか」

「うん！」
２人で穴を飛び降りようとした
その時、

ガチャッ
銃を持った奴らに囲まれた。
女子高生の格好しているが、俺にはわかる。こいつら全員宇宙人です。
「離せ！」
抵抗虚しく、アッシュはマスクを被せられ、取り押さえられた。
「ったく、上級生の教室前で騒ぐんじゃねぇよ」
後ろの教室のドアが開き、長身の男が出てくる。こいつも彩南の制服を着ているが、人間か？
いずれにしてもアッシュ相手に、チャームの能力が効かない女だけで対処してくるなんてただもんじゃねぇ。
「だがここまでだ、結城ザク郎。
いや」

長身の男が、日本刀を空にかざす。

そしてそいつは、

俺の、本当の名前を呼んだ。

「……霧崎　玄凰」

こいつは、
いったい……

「放火、傷害、器物破損、動物虐待、公然猥褻で連行する」

おまわりだったｗｗｗｗｗ

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第6話「バーンアウト・ハイスクール　Ⅲ」

なんてこった。まさか学校でパクられるとは。
アッシュに関してはむしろ安全な場所へ隔離されたとも言えますが、俺はやばい。別に地球の法に触れてなくても、極力警察とは関わりたくないです。なんせ亡命中なのでね。
「やい、俺は被害者なんだよ、弁護士を呼びやがれ」
「黙れ。暴れれば地球で前科がつくぞ。それともデビルークに移送して皇女誘拐か？それも面白いな。どちらか選べ」
腹立つ！でもこいつただ者じゃねぇ。だって片腕で挟まれてるだけなのに全く抜け出せる気がしない。細いくせに。何者だよ。この学校規格外の地球人多すぎだろ。

このまま護送船にでもブチ込まれるのかと思いきや、なんと連れて行かれたのは学校の屋上だった。
急に警官は手を緩め、そっと俺を座らせた。
「手荒な真似をしてすまなかった。こうでもしないと、奴らが五月蝿いからな」
「奴ら？」
「デビルークの王子たちだ」
……地球の警察にしては、大胆なこと言いますね。
「でも屋上なんかもっとバレやすくね？」
「この騒ぎだ。今は校内に監視が集中している。だが下手な動きはするな」
だから俺は今亀甲縛りにされていると。
「さて、霧崎玄凰。お前は」
ブチィッ
「その名前で呼ぶんじゃねえよ」
俺は速攻でブチ切れました。頭の血管と、亀甲縛り両方です。
「……すまなかった、結城ザク郎。話を聞いてくれるか？」

警官は意外に紳士的な対応をしてきた。ビビってる感じは全然しないけど。
俺は警察とか信用しませんが、こいつは結構まともな奴なのかもしれない。
「あんたの名前は？」
「すまんが後で話す。まずはこれを見てくれ」
警官は自由の身になった俺を警戒するでもなく近寄ってきて、パソコンを開いた。
「校内に設置したカメラの映像だ」
次々に映し出される、血にまみれ、崩壊した教室、便所、廊下、渡り廊下、食堂。
酷い、酷すぎる。一体誰がこんなことを……。
あ、食堂は俺か　笑
「そしてこれが数時間前の体育館だ」
俺がまだ食堂にいた時間か。
ワーーッ！
アァーーッ！
ウワァーーッ！
キーーイイーーッ！
制服を着たケダモノたちの、割れんばかりの叫び声。みんな我が校の男子生徒です。全員荊棘で拘束されている。
彼らの目線の先には……。
巨大スクリーンに映し出された、
アッシュの顔。
「これが転校生だ。こんなハレンチな女子生徒は、風紀のため、俺たちが管理しなければならん！」
「オーーッ」
「お前ら、俺に協力するか!?共にアシュラを支配したいか!?」
「オオーーーッ!!」

「なら、俺がこのクラスの委員長だ!!」
「ッシャアァーーーッ!!」
「この古手川龍に、清き一票を!!!」
ウワアアアアーーーッ！

「こっちが、現在の校庭」
砂の巻き上がるグラウンド。今度は理性のある生徒たち。少し女子もまじっている。あとは……宇宙の猛獣たち。
「勇敢なる生徒諸君！我々はクラスメートである以上、どんなに危険な存在であっても、転校生であるなら、友好に迎え入れなければならない！」
「ハッ！」
「私自身、不安を抱えている。しかし、クラス委員を希望する者として、この問題を解決する義務がある！」
「ハッ!!」
「諸君、我々で古手川龍の暴走を止めよう！」
「押忍!!」
「そして、この西連寺季虎に清き一票を!!」
おーーっす!!
!!

どういう状況、これ？

「お前たちがキューオクトパスと戦っている間、西連寺と古手川が闘っていただろう。その時にクラスの男子が分裂した様だ。結果双方につき、なぜがそれに全学年の男子まで付き従っているという異常事態が起きている。あの野球部の連中も俺の同級生だが、もう古手川についたらしい。つまり、理性は失われたままだ。プリンセス・アシュラの顔を晒し、生徒の暴走状態をキープさせる古手川のやり口は、人間の脳に多大な負荷をかけ、生命を脅かす。必ず止めなければならない」

「双方の大将それぞれに動物と植物が付き従っている事実についてだが……」
警官の冷静な分析に我に返る。
「二人とも一見上手く操っている様に見えるが、彼らは所詮人間。動植物と心を通わす力など持っていない。実際にコミュニケーションを取り、命令を下しているのは、地球外にいるプリンス・ハンニャとプリンス・ビシャモだ。つまり彼らは自我を残したまま完全に奴らの駒にされている」
「なんでこの二人なんだ？」
「西連寺……この男は念力を使えるそうだな。俺には霊感の類はわからないが、こういった力を持つ者は動物の魂と同調しやすいらしい。そこを利用されたのだろう」
「古手川は？」
「彼に関しては、性的な妄想力が異常に強い。それが植物の「子孫繁栄」の本能と結びつき、成長を促進させるそうだ」
どんな能力だよｗｗｗ
「そして、さらに悪いことには……
王子たちが、プリンセスの婚約者候補を雇っていることだ」
……異星人か。それはやばいな。
「どこに潜伏させているか、俺にもわからん」
「報酬はアッシュだと」
「ああ。だから、プリンセスを巻き込む訳にはいかなかった」
どこか遠くを見つめて、警官はそう言った。
「でもおまわりさん、そりゃあちょっとアッシュを舐めすぎてたみたいっすよ」
俺に促され、警官はパソコンのモニターを見つめて絶句した。
慌てるおまわりの部下たちの真ん中に
脱ぎ捨てられた、スカート、ブレザー、靴……ｅｔｃ
全部アッシュの服です。
「ぴょんぴょんワープくん、っすね。あれは」

「どうなっている!?」
「たぶん学校のどっかにいます。どこかはわかりません。しかも今、彼女は全裸です。
……いや、まて!!」
「どうした!?」
「正確にはネクタイにブラウス、パンティ、靴下は身に着けてるみたいっす！」
「どうでもいいわ!!」
クールそうな警官は頭を振り、立ち上がった。
この違いがわからないとは……まだまだだな。
「俺、探してきますよ」
俺は立ち上がった。
「1人で何が出来る」
「出来る出来ないじゃなくて、やるんすよ」
「デビルークに監視される中、数百人以上の暴徒を突破し、正体不明の異星人たちと戦い、何処にいるかもわからないプリンセスを1人で探すか」
……
「本当の能力を封じたまま」
なんでやる気を削ぎにくるかね。
「それにお前は、失礼だが、そんなに責任を感じる奴だったか？プリンセスの方が勝手に来たんだ。この件は俺たちに任せて、お前はこの機会にどこへでも行けばいい。その料理の腕なら、いくらでも勤め先はあるはずだ」
「責任とかじゃないです。
プライドです」

殺し屋が、絶対に標的（ターゲット）を逃さないように。
運び屋は、絶対に荷物を捨てない。
どんな形でも。

「変わったのか、変わらないのか……。プリンセスの能力は大変だな。
俺もそうだが」
そう言って、警官はなんかのボタンを押した。
タタタタッ
誰かが来る。

「ここにいたのか、結城！」
妻村!!
「お前、理性大丈夫なのかよ」
「へっ、童貞と一緒にしてんじゃねぇよ」
それは関係ないと思うが……意外だな。
「二次元の女にしか反応しない俺に死角はなかったｗｗｗ」
指野……なんかかっこいいと思っちまった。
「この指野が、俺に連絡をくれたんだ」
「ザック」
「猿山……」
「あんたがあんな可愛い娘連れてきたから……バカ虎、わたしの方が、ずっとアイツのこと……」
「まだ何も始まってねぇよ」
「わかってる。だから、私も協力するよ。なんも出来ないけど、アイツを正気に戻してやるくらいさせてよね」
「ザク郎殿～！」
バリィイイン！
「またお前かよ!!」
窓を割って入ってきたのは、昨日ぶっ飛ばしたはずのアーサー天城院！
「申し訳なかった!!」
……へ？
「デビルーク親衛隊隊長の務めは、王家に忠義を尽くすこと。ですが、私はアシュラ様のお力を怖れるあまり、父や、主君であるリト様のご意向に反し、ハンニャ様に利用されていました。

もう母星からは追放されましたが、せめてこの星で、ザック殿と共にアシュラ様をお護りさせていただきたい！どうか、お許しを！」
俺は、急に土下座しだしたかつての敵を見下ろした。
「……大丈夫か？」
「ハッ」
「ウザースに改造された使い回しじゃないよな」
「……は、ウザースとは？」
「いや、こっちの話だ」
床に着いたアーサーの頭には、白い目隠しがされている。
「アーサー、なんで目隠ししてんだ？」
「勿論、アシュラ様の素顔を見て、暴走しないようにするためです」
「いやいやそんなんじゃ戦えないっしょ！」
妻村のツッコミに、アーサーがムッとした表情を浮かべた。
「私は、心眼ナイトでもあります！アシュラ様の為ならこの両眼、惜しくはな
ずべっ!!」
心眼ナイトが立ち上がった瞬間、盛大にこけた先には、猿山の……

ぐにぃっ
「きゃあっ、どこ触ってんのよっ！」
ドゴォッ
「くほぉっ」
心眼ダメじゃねぇかw
「目隠し外せよ、アーサー」
「……な、何故？」
俺はキョドるアーサーに言ってやった。
「そんだけの覚悟がありゃ、お前はもう大丈夫だ。チャームの能力なんか効かねぇよ」
「ザ、ザク郎どの……」
「ワーッハッハッハ!!

さすがは私、紳士ナイト！余裕で克服してやったわ!!」
紳士ナイトってなんだよ。

「これを着ていけ」
どこにあったのか、警官がでっかいケースを俺に放ってきた。
中身を開ける。
「これは……！」
入っていたのは、俺が王宮に置いてきた真っ黒い防弾調理服。そして愛用の肉切り包丁と、フライパン。
「どうやってこんなもの」
「お前は希少な戦闘能力を有しているが、身体能力そのものは、極めて優れた地球人とそう変わらない。違うか」
俺の質問には答えず、警官は俺の弱点を公表しだした。
そうです。俺は1ヶ月くらい猛特訓すればオリンピック全種目の記録を塗り替える自信がありますが、宇宙レベルではその程度、貧弱です。銃で撃たれたら死にますし、生身では弾を避けることも難しい。全部ジェットブーツのおかげなんです。
「そして地球人の母親に育てられた。お前はもう、自分を人間だと思っていていい。
だから人間らしく、利用出来るものは全て利用して戦え。武器も、仲間も、情報も。自分だけで勝とうとするな。
宇宙は変わった。暴力だけでは生き残れない。これからは頼れるものを多く持つ者が勝利する。現デビルーク王が人間なのも、そういう時代だからだ」

確かに、それはそうなのかもしれない。

俺は調理服を被った。ガキのころから着てたらしい、無意味なベルトがいっぱいついて、背中に白いひび割れと真っ赤な斑点が散らばった戦闘服。お袋にザクロと名付けられた所以だ。
「こんなもん俺に渡して、俺が暴れたらどうすんだよ？」

「安心しろ。その時は直々にぶった斬ってやる」
警官の腰から、赤黒い日本刀が刃を覗かせた。
あれは魔剣ブラディクス……とんでもねぇもん持ってますな。
「カフェで初めて聞いたけど、お前やっぱり宇宙人だったんだな」
指野が感慨深そうに頷いている。呑気な奴らだ。

でも、それでいい。

「ここにいるみんなも、西連寺も、アッシュや王子たちも、みんな人間の血を引いてるんだ。俺だって血は繋がってねぇけど、人間に育てられた。みんな、兄弟なんだ。
これ以上この星で、同族どうしの馬鹿げた争いを続けさせるわけにはいかねぇ。
だから、
最後に、暴れようぜ」
アーサーのイマジンソードが唸る。友達が、力強く頷く。
「あんたは来ないのか、おまわりさん」
「馬鹿言え。警察が前線に立つのは最後の時だ。
まだまだ、お前たちはやれる」
こいつかっこいいな……
「まだ、お前から名を聞いていなかったな」
俺は振り返って答えた。
「結城ザク郎。ただのコックっす」
「……そうか」
「あんたは？」
「九条麟。銀河警察の潜入捜査官だ」
マジかよ、人間なのにヤバ過ぎる。
ってゆうか、この人が九条先輩だったのか!!

九条麟
親父の息子の一人で、三人目の地球人。

次期デビルーク王候補者の中でもトップクラスの実力を持っているが、王位には一切興味を示さず、警察として地球を守っている。
噂通り、肝が据わった男だ。俺もこれからは九条先輩と呼ぶことにしよう。
「何かあれば、また協力する。ただ他言はするなよ。お互いにな」
「ああ、よろしく頼むよ」
「プリンセスは、お前が護れ」
「ナイン！フジ！」
アーサーの呼びに応えて、あの側近２人が飛んできた。
「元気そうだな、兄貴」
九条先輩が、ナインに向かってそう呼びがける。
「沙姫様のことは任せてくれ、麟」
兄弟だったのかよｗｗｗｗｗ

『来るな！変態っ！』
『そんな格好しといてどっちが変態だこの露出きょウリィイイーッ!!』
『ザック！助けて！』
モニターから、護るべき人の声が聞こえる。
使えるもんは、全部揃ったみたいだな。

「行くぞ、みんな、
調理実習じゃーーーー!!!」

見えてるか、ゴウカ。
俺は、ちょっとずつ変わってるぞ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

見てるよ、クロウ。

すぐそばで。

to be continude

第７話「ｖｓ　ヒッタクン星人」

「カラスめ、地球で牙を抜かれたと聞いていたが……やはりそう甘くはないか」
「仲間がいるなんて話も聞いてねぇんだよオイ！もう三階制圧されたぞ。てめぇの計画全然駄目じゃねーか!!
　あとカラスに牙なんかねぇよ動物なめんなバーカ」
「ふん、まさか貴様と天城院の信頼があんなに薄かったとは予想外だったからな。
　ま、詰めが甘い、ハン兄様らしいが」
「ビシャ、いつもいつも俺を見下しやがって……噛みつくぞコラァッ」
「まぁまぁ二人とも、喧嘩はやめようよ。今は一旦協力してアシュラちゃんたち潰すって話っしょ？」
「タナ、お前の情報は誤っている。ザックの戦闘力は格段に下がったなどとほざいていたが、この通りだ。嘘を言うくらいなら……」
「えー、甘いなぁ、ビシャモくんも。
　何言ってんの？

　本当だよ」

　ねぇ

　せーんぱい？

全力疾走してる最中というのに、またうっとうしい夢が頭に流れ込んできました。もう無視です、無視。今は闘いに集中させてくれ。もちろんアッシュを探しながらね。

俺たちは今二階にいます。俺たち二年の階です。屋上から三年、二年、一年と手強い方から突破する作戦です。さっきは真剣持った剣道部員全員とチャンバラやって、蹴散らしてきましたが、問題はまだ地球人としか闘ってないことです。

（そろそろ婚約者候補が出てきてもおかしくないはずだが……）

「危ないっ」

妻村の悲鳴。

ドガァッ!!

「カッ、ハッ!?」

はらわたに巨大な筋肉が突き刺さる感覚。

と同時に、視界に横縞のシャツが映った。

（ラグビー部かッ）

細身の俺は軽く5、6メートル吹っ飛び、床に背中を打ち付けた。

「ウラァァァッ！」

2人目の柔道部員っぽい奴が俺の胸倉を掴み上げ、壁へ投げ飛ばす。

バガァン！

俺は壁に人型のヒビを作り、剥がれ落ちた。

やっぱり武器より、重量級の突進のが俺は怖いです。

「潰れろォッ」

視界がグラつく中、ラガーマンの大振り右フックが迫る。

ど素人め。

（なめんじゃねえぞ）

ゴォッ！

火を噴くジェットブーツ！

「ドリャァッ！」

両足で壁を蹴飛ばし、右肘でガラ空きの顔面を切り裂いた。

バキャッ！

やべ、やりすぎた。
顎砕いちまったか？
そう思ったその時……
ビリビリィッ
ラガーマンの顔が破れた。
「あ、てめぇ、俺の変装をっ！」
新たに現れた顔は……
緑の肌。
頭の突起。
穴だけの鼻。
とんがった耳。
こいつは確か……

「ナ○ック星人？」
「違うぞ妻村。こいつ、
ヒッタクン星人だ」
すると柔道部の奴も、自分の顔を剥がし始めた。
「俺たちの変装を見破るとは、なかなかやるな」
見破ったというより物理的に破ったんですが……

ヒッタクン星人というのは、その名の通りひったくりが得意な宇宙人です。お袋も小学生のとき被害にあったらしい。なんかシャンプー食われたとかちょっと面白かったとかおそろいいいよねとか意味不明なこと言ってたが、今俺の前にいるこいつらにそんな愛嬌はありません。当たり前か、暴力でアッシュを奪いにきた野郎なんだから。
スチャッ
レーザー銃が向けられる。
俺はとっさに、フライパンで顔面を隠した。
「アシュラ姫はどこだ」
「し、しらねぇよ」

片目だけ出して、フライパン越しに答える。非常にダサい格好だが仕方ない。レーザーに炎は効きませんからね。跳ね返すしかないんです。
「とぼけてんじゃねえ！見当ぐらいはついてんだろ！」
「だったら苦労しねぇよ！」
「これでもか？」
ブゥン
柔道家がでっかい光子剣を出してきた。
はい、どう見てもアーサーのイマジンソードです。
「それ、どうしたんだよ!?」
「決まってんだろ。

ひったくったんだよ」

あのポンコツ剣士ィィイ!!
なんで剣ひったくられてんだよーー!!
「そりゃっ！」
俺は尻餅をついたまま、コサックダンスみたいに左足を突き出した。
ゴゥッ
左足のジェットブーツが火を噴く。
「ハァッ！」
ブゥン!!
狙い通り、柔道家が跳びのきざまに剣を斬り払ってくる。
ガァンン！
フライパンで弾き、サイドステップ！このフライパンはオリハルコンとかいう無駄に硬い金属で出来てるので無敵です。仰け反る柔道家。すかさず俺は腰に手を回し、包丁を引き抜……
え？
（包丁は？）

「足怪我してる割には速いじゃねえかよ」

すぐ横に、俺の包丁をプラプラさせるラガーマン。
今、ひったくられたのか？
全然見えなかった……
ブゥウン！
迫るフォトンエッジ！
だがもう引っかからねえ！
（次はフライパンをひったくるつもりだろ！）
俺は両手でフライパンを抱き抱え、横切るラガーマンをバックステップでかわし……
ズボォッ！
ドカッ
（!?）
ふいに俺は、仰向けに転げた。
「甘いな」
廊下を仰向けに滑りながら、ラガーマンが嘲笑う。
奴の手にあるのは、
さっきまで俺の左足にはまっていたはずのジェットブーツだった。
どうなってやがるっ!?
履いてるブーツってひったくれるものなのか……タイにもそこまでの奴いねぇだろ。
とにかく、こいつらは強敵だ。
息を荒げる俺を見下ろし、二人のヒッタクン星人が腕を組む。
「俺たちは、ただのヒッタクン星人じゃねぇ
元ヒッタクン陸軍特殊空挺部隊だ」
うそだろ……
「俺たちにひったくれないものはない。そう、たとえ
銀河のお姫様だろうとな」
なんかとんでもないこと言い始めやがった。

甘く見てましたね。たかがひったくりが兵士になるとこんなに手強いとは。しかも2人とも特殊部隊。
俺は両足怪我してるし。
部が悪すぎる。
しかもここは廊下。火砲になりそうなもんは意外とどこにも無い。鉛筆ケースが落ちてますが、あれじゃゴキブリしか殺せません。鉛筆ケース……まだ使ってる人いるんだな。
どうしたもんか。
ビィイーンン！
柔道家がイマジンソードを振りかざし、突進してくる。俺は右足のブーツを脱いだ。もうフライパンしか使えない。
（くっそー、俺ガンマンなのによ！）
やるしかねぇっ！
俺はフライパンを両手で握り、イマジンソードの刃に潜り込んだ。
ガキィイン!!
キン！キン！
荒ぶ炎。飛び散る光子。相手も相当やり手だが、やはり剣技はアーサーより数段下だ。それでも剣を取るのは、俺の調理服にレーザー銃が効かないことを知っているのだろう。
「せりゃっ！」
ガッ！
フライパンの柄を逆手に持ち、回転斬りを浴びせる。
「くっ」
柔道家の体勢が崩れる。裏拳を放とうとしたその時、
ビュン！
ラガーマンッ、フライパン獲りに来やがった！
「させるかっ」
俺はフライパンを上空に掲げた。
それで、
胴が開いてしまった。
ブチン！

ブチブチッ！
奴が狙っていたのは、フライパンなんかじゃなかった。
俺の調理服の、腹部をつなぎ止める金具。
（しまっ……）
ペラッ
服が垂れ、無防備な俺の腹が露わになる。
瞬間、柔道家は軍人らしい洗練された動きで剣をレーザー銃に持ち替え、こちらに向けた。
バシュッ！
「っがぁっ！」
刹那に躱す。腹の肉が僅かに溶け、焼け跡が残る。
その瞬間、
スパアンッ
右手に、摩擦の痛みが走った。
見なくてもわかる。
遂にフライパンも盗られてしまった。
スチャッ
柔道家のレーザー銃。
「死ね」
くそ、こんなところでっ……

「やめろぉぉぉお!!」
プシューーーッ!!
妻村の放つ消化液が、柔道家の後頭部に命中した！
「うおぉぉお!?」
柔道家は堪らず頭を押さえる。こいつらは皮膚が弱いらしい。
「邪魔しやがって」
柔道家がグラつきながらも、すぐに妻村へ銃を向けた。
（妻村っ！）
俺の背後からは、ラガーマンの殺気が刺さる。突進してくる気だ。
今しかねぇ！

ドゥッ！
ラガーマンのタックル！
俺はジャンプでかわし、右足をブーツに差し込んだ。アッシュが巻いてくれた包帯から血が噴き出す。
「うらぁあっ！」
俺は妻村を狙う柔道家に向かって、全身の力を込めて体をぶっ飛ばした。
旋風脚ッ！
ドガッ
俺の踵が、柔道家の踵に命中する。あまりに速い蹴りに反応出来ず、柔道家は前のめりに倒れた。
だが俺の目的はそれだけじゃない。
ゴオオッ
ブーツのジェット気圧を屋根に走らせ、
ガチャン！
防犯カメラを落とす。これです！もうやってられっか。
ひったくりとは闘わずに法を適用しましょう！
俺はカメラを拾い、窓から身を乗り出した。ここからならギリ屋上が見えるはず。
やっぱり！九条先輩だ！俺は涼しい顔でパソコン見てる先輩に手を振った。
「おまわりさーん！ひったくりや、死刑にしてくれ！」
「現行犯だ」
ブン！
俺は先輩に向かって防犯カメラをぶん投げた。
「証拠だ、２時間以内なら解析できる。早くやらないと本部に訴えるぞこの税金泥棒め、働け働けー」
「ッ、うるさい奴だ」
タンッ
屋上から姿を消した次の瞬間には、先輩はもうここまで飛び移っていた。

だがすでに、柔道家は剣を構えて立っている。
「なんだ、俺たちはデビルークの王子に雇われてんだ。警察に用はねぇ」
「悪いがこの星では貴様たちの存在自体が犯罪だ。消えてもらおう。
結城、妻村、下がっていろ」
冷徹な態度で、先輩は刀を抜いた。
「ほお、てめぇ珍しい刀持ってやがんな……
よこしやがれぇっ!!」

ラガーマンの突進！

「フン、盗れるもんならくれてやる。
だがその前に」

ザシュッ……！

……一瞬で宙に散るラガーマン。

先輩の目から、瞳孔が消えた。

『血をよこせ』

ズバアアアアーーンッ!!

二体のヒッタクン星人は、緑色の血を残し、粉微塵になった。
……一応戦死なのか、これは？

「好みの血じゃなかったか」

魔剣を収める先輩。
怖すぎるｗｗｗ
「もう少し頑張れないのか」
呆れたように言って、先輩は俺にフライパンをよこした。
「俺にも銃を許可してくれないと不利じゃないっすかね」
「こんな時だけ現実的なことを言うな。あと、俺はちゃんと仕事をしている」

「え、エロ動画観てたんじゃないんすか!?」

妻村を絞め落としながら、九条先輩はパソコンを見せてきた。
「プリンセスはここだ」
「体育倉庫？
男子生徒しか見えないんですが……」
「とび箱に隠れている。エロ動画にならないうちに早く行け」
先輩ｗｗｗｗ
「妻村は俺が保護しておく」
俺はフライパンやら包丁やらブーツやらイマジンソードやらを回収して先輩たちと別れた。早くアッシュを救出して、ついでにペケに調理服を修復してもらう必要があります。
行くぞぉ！
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｄ

第８話「ｖｓ　バルケ星人＆ＰＳＰ版の敵」

キンコンカンコーン
「えー、こちら放送室。たった今結城君と九条先輩がヒッタクン星人を撃破しました！何のことかわからない校内の皆さんは、とりあえずその場を動かないで下さい！
ザックー！アッシュちゃんは隙を見て理科室に移動したよ！早く行ってあげてね。以上、猿山智子がお送りしました」
ブチッ

「……い、言ったよ」
クッククッ
「これでよ……
グッ」
ツー　ツー　ツー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
猿山の奴、よくあんなハイテンションでいられるな。いや、尊敬の意ですよ。あいつはヤバイ時とか悲しい時ほど明るく振舞いますからね。
アッシュは理科室か。でもどうやって跳び箱からバレずに移動出来たんだ？
「九条先輩」
「どうした」
「一応放送室確認してもらえます？」
「何？」
「だから、放送室を」
「何だ？もっとはっ、きり……いっ……ズズ」
ズーーーーーーーー
ブチッ

無線が切れた

……

これは罠だ。

俺は確信した。きっと、猿山は誰かに喋らされてる。今の無線だって、誰かがジャックしたんだ。

畜生、孤立しちまった。

基本はね。

この事件、笑い飛ばせるもんだと思ってるんですよ。

暴走した奴らは戻せばいいし。

ヒッタクン星人は死んじゃったけど、アイツらにはその覚悟があったはずだし。その上での婚約者候補なんだから。成り行きとはいえ、死ぬ気でアッシュ探してる俺と一緒だし。だから闘いは面白い。

ハンとビシャの兄弟喧嘩も大袈裟なことになってるけど、あいつらまだガキんちょだし、未来がある。絶望することじゃない。

でも

なんか1つだけ、

とんでもなく気味悪いもんがまじってる。

イノシシに言わせた言葉といい、

今の、放送室と無線の同時攻撃といい、

人の願いとか、トラウマとかを利用する、

悪意の塊みたいな奴が、1人。

靴箱に着いた。

だが出口が歪んで見える。物理的にじゃない。空間が捻じ曲げら

れている。出れたもんじゃねえ。
久々に冷や汗が流れる。俺はどこに行けばいい？理科室か？放送室か？アッシュは本当に理科室にいるのか!?
どっちに行っても……
「アッシュ、どこだ」
俺は思わず、そう叫んだ。
「へー、あんたやっぱりそっちなんだ」
背後から声が聞こえる。
「久しぶりだね、ザク郎」
くそったれ
「じゃあザク郎は、アッシュちゃんのことを想いながら『料理』するんだね」
なんでお袋の声がしやがるっ！
「ちゃんと上手に焼きなよ。
あの子は、リトとヤミさんの子なんだから」
恐怖でゲロ吐いてブッ倒れそうだ
「どんな料理になるのかなぁ……
ゴウカちゃんは」
「そうだろう？アイツはお前のターゲット。
愛せないなら」

「責任を持って」

燃やせ

「ぶらあああああああああああーーーーーっ！」

大奇声を上げながら、俺は振り向きざまに包丁をぶん投げた。

ドスッ

目の前に、

額に包丁を刺し、

不自然に首を傾ける、ガキの頃のお袋

の、形をした……銀色の何か。

ブゥーゥウウン

どす黒い炎が、俺と、異形を包み

ボゥ……

周囲の空間がゆっくりと燃えてゆく。

火が消えた時、俺は理科室にいた。

「遅かったね、クロウ」

……こんどはお前か。

「プリンセスはあっち。待ちくたびれて……おかしくなっちゃった」

さっきとは違う、俺の忘れられない少女の姿をした奴が、壁を指差す。

キシャアアーーッ
そこには、床に根を広げ、怒り狂ったように巨大な口を歪ます若木があった。
（シバリ杉……）

シバリ杉……オキワナ星（沖縄ではない！要注意）の危険植物。槍のような枝で動物を縛り上げ、養分を吸い尽くすまで決して離さない。名前の由来は捕らわれた人が死の直前に叫んだツッコミから＊銀河珍種大百科より

その触手のような鋭い枝の中に、
血塗れのアッシュがいた。
「あっ、ザック……」
虚ろな目を向け、だらしなく股を開く。そして
「私、もう、結婚出来ないや……」
出血。

「クロウが悪いんだよ。私がいるのに、プリンセスと幸せになろうとしたから。
言ったよね。
私を殺してくれるまで、燃え続けるって」
「君の大事なものを傷つけていくよ。それでも、まだプリンセスを」

聞き終わるより早く、俺は包丁で、その金色の額を斬り裂いた。
「うわっ！」
少女の形がみるみる崩れ、
「な、なぜじゃ、なぜまろの変装を!?」
やがて烏帽子を被った少年の姿になる。
「血の匂いがしない。それだけだ」
さっきのお袋に化けてた奴と違って、こいつからは全く邪悪さを感じない。わがままなガキって感じだ。

だが俺は動転していた。
背後も気にせず、無惨なアッシュのもとへ走った。
そして、小細工に気付けなかった。
「そっちもまやかしじゃ」
フシューーゥウ
アッシュの体が変化して……
「ゲへへへへ！これが俺の妃になった未来のアシュラだぜぇ。
結城ザク郎よ」
ムキムキのトカゲ人間になった。
「き、気持ち悪ぅ!!」
「黙れ！
ギ・ブリー様が叶えられなかった野望は、俺が叶える！」
バルケ星人です。残虐かつ下劣な性格で、今みたいな、詳しく描写したら即R―18になるような胸糞悪い精神攻撃が得意ですが
「バルケめ、てめぇなんか一発ぶん殴りゃしまいだ！」
こいつらの特技は擬態だけで、肉体的には超非力。ハムスター以下です。
俺は偽物を見抜けなかった自分への苛立ちも相まって、踏み込みグーパンチを放った。
ガシィッ！
俺の体に枝が巻きつき、
「キシャアアアアーーッ！」
ドガッ
天井に叩きつけられる。
ああ、忘れてた。
後ろの奴はシバリ杉でしたね。
ズバッ

俺は素早く体に巻き付いた枝を切り、バックステップをしようとした。
だが、
フワン　フワン
（あ、足が浮いてる!?）
「ふん、お前ごとき、簡単に持ち上げられるわ！」
烏帽子のガキが、真下から俺に向かって手を上げている。
重力を操る能力か！
ビュン！
ビュン！
シバリ杉の鋭い枝が襲いかかる。無様に浮いたままじゃろくに攻撃を躱せない。次第に体が切られていく。
「チクショー、てめぇ何モンだ!?何でアッシュを狙う！」
宙に浮いたまま、俺は烏帽子に向かってまるで敵の雑魚キャラみたいなセリフをぶつけた。
「ふん、いいだろう。冥土の土産に名乗ってやる。
まろの名はジュン！
ジュン・ネルス・アクアン！」

……いや、マジで誰？

「お前のせいでアッシュがデビルークを去って、まろがどれほど寂しかったか……その身に思い知れ！」

アッシュの幼馴染かなんかですかね？アッシュって言ってるし。
どうでもいいけど、その喋り方から絶対阿倍野仲麻呂みたいな和風の名前で攻めてくると思ったのに、外人の名前だったｗｗｗ
「ゆけ、メッタクソＶ!!」
ウィイイーン
今度は丸っこいメカが出てきた。ジュンがそれに乗り込む。
（はん、ガキのおもちゃに何ができる……）

ダガガガガガガン！
（!?）
実弾撃ってきました。機銃くらいでかそう。
ビュン！
必死で身をかわす。
バァアン！
天井が吹き飛ぶ。
子どもにこんなおもちゃ渡しちゃだめだろ！
くそ、こんな奴ら、地面に降りさえすれば一撃なのに……
「右じゃ」
（何ッ!?）
ジュンとかいうガキの言う通り、右側にシバリ杉の枝が伸びる。
俺は体の自由がきかない中、何とか左に避けた。
ビュン！
グサッ！
壁に穴が空く。
「左」
（またかっ）
右に避ける。
ビュッ！
ダガガガン！
今度は機銃が火を噴いた。
「上、左」
ビュン！ビュン！
ダガガッ
ボゴンッ！
「右、下、上、左、下、下、右、上っ」
（クッ）
ビュビュビュビュッ！
ダガガガガン！　ダガガガガ
グサッグサッグサッ

「はっはっは！なかなかやるのう」
（こいつ、楽しんでやがるッ!!）
「右」
ボシュッ！
なんか音が違う！
ミサイルか!?
「いや間違えた左じゃ笑」
素直に右へ避けるしかねぇっ！
パリィン！
避けた先には、薬品のビーカーが浮かんでいた。
パシャッ
「あっつ！」
服が破れる！
硫酸か？
そうかここは理科室……
バガァァアン！
「グァバッ！」
ミサイルが命中し、俺は柱に激突した。
所詮は子どものおもちゃ、ミサイルにそれほど威力はない。
だがシバリ杉に傷をつけられ、あらかじめ服を破られていた俺には大ダメージだった。
「こんな危ない薬品が学校に無防備で置かれているとは、さすが宇宙一の平和ボケ惑星じゃのお！アッハッハ」
「てめぇみてぇな分別つかねぇガキは日本にいねぇんだよ多分！」
「うるさいうるさい！」
パシャアッ！
全身に降りかかる液体。この匂い……もしや
「傷口に直接アルコールの原液をいれてやったぞ、コックさん。べろんべろんに酔っ払って、もうまともには動けんはずじゃ」
「くっそ、てめぇ……」
ち、畜生、体がふらついてきた。頭もクラクラする。相当アルコー

ル喰らったみてえだ。
「遊びは終わりじゃ、結城ザク郎。
二度と、アッシュと遊べない体にしてやる」
ウィイイン
メッタクソVの銃口が、俺に向けられる。
誰か……

ガシャガシャガシャガシャ
誰かの足音が近づいてくる。
この音は……鎧？
アーサーか!?
「丁度いい。
バルケ星人！」
ジュンがニヤリと笑い、バルケ星人に命じる。
フシュゥウ
バルケ星人の体が、再びアッシュの姿をとった。
「チャームの能力は、肉体的なもの。あの可愛らしいアッシュの完璧な目鼻立ちが生み出す、数値的なものなのじゃ。
このバルケ星人の擬態能力は、0コンマ数パーセントも違わずアッシュの顔を再現出来る！つまり……、
チャームの能力を再現出来る！」
(!!)
「お前は耐えられるだろうが……アーサーは大変じゃったなぁ……結城ザク郎よ」
「ああっ、はぁっ」
一層悩ましい表情を浮かべるバルケ野郎

やばい……
あれはエロ過ぎるッ!!
もしこのアッシュもどきの顔を、アーサーが見てしまったら……。
さっきああは言ったが、正直、暴走は免れないッ！

ガララッ！
「アシュラ様！ザク郎殿！おられるか!?」
（だめだアーサー、目ぇ瞑れっ！）
「久しぶりじゃな、天城院アーサー。
アッシュの悶える姿、とくと見よ！そして暴走するがいいっ！」
「うう、助けてぇっ……」
バルケの奴が、悩ましげな表情でアーサーを見つめる。
アーサーの目が見開かれ、
理性が消えていった。
（終わったか）
「貴様、何のつもりだ」
（え？）
アーサーのはっきりした声。
暴走じゃない、これは
ブチ切れてる!!
「アシュラ様に化けるなどぉおおーっ！
この私が
絶っっ対に許さんッ!!!」
（アーサー、見抜きやがった！）
忠臣の圧倒的な覇気に、ジュンたちがたじろぐ。

「アーサー!」
その隙に、俺はナイトにイマジンソードを投げた。
ガシッ
アーサーが剣を掴む。
ブゥゥウーンン!!
「覚悟ッ!」
「ちょっ、まっっ!!」
ザシュウッ!!
光が振り抜かれ、一瞬、理科室を照らし

気づけば、バルケ星人も、シバリ杉も、跡形もなく消えていた。
「ワーッハッハッハ!思い知ったか愚か者!」
ふよよーん
だがすぐに、調子に乗ったアーサーが隣に浮いてきた。
「ざ、ザク郎殿!?」
これさえ無けりゃな……
「ふ、ふん!バルケ星人を倒したところで、まろのメッタクソVのようなメカも持たないお前達に何が出来る?降りてくることも出来ないくせに!!」
メッタクソVの銃口が、空中の俺とアーサーに向けられる。
「蜂の巣になるがいい!」
でも、
俺だって、ただ馬鹿みたいに浮いてたわけじゃありません。
待ってたんです。
ブスン!
にわかに、メッタクソVのコクピットから煙が噴出する。
「な、どうしたのじゃメッタクソV!?動け、動かんか!」
「妨害電波ヲ受信……システム……停止」
シュゥゥゥン
メッタクソVの動きが止まった。
「ほーう、坊主。俺がメカも持ってないだと?

てめぇ俺が地球人じゃねぇこと忘れたのか？」
調理服に隠れたスイッチを押す。
ヒィィイン……
「な、なんじゃ。お前、何を言っておる!?」
「フ○ーザ様でさえ宇宙船で地球に来たのに、お前は俺が○ーパーマンみたいに何万光年も生身で地球まで飛んで来たと思ってんのかよ、ええ？」
「こ、これは……何だ!?お、重い！支えきれん！やめろ、潰れ……」
「俺だって
宇宙船くらい持ってるわ!!!」
ゴアアアアン!!
校舎の壁をぶち壊して登場したのは、俺の自家用小型宇宙船アクセローク号。見た目はタイヤのないトラックに垂直尾翼付けただけです。
「行け、アックス！自動射撃！」
ババババハバッ
メッタクソとかいうおもちゃは一瞬で黒焦げになりました。
ドスン！と地に着地する。
おもちゃを失ったジュンは、力なく地べたに座り込んだ。
「ザク郎どの、子どもですぞ」
頭から湯気が出ているであろう俺をアーサーが嗜める。だが俺は無視してジュンのもとへズカズカ歩いていった。
「もう……家に帰れん……」
ジュンは、まさにメッタクソにされたおもちゃの前で泣き出した。

それ宇宙船だったのか。ちょっとかわいそうになってきた。
「さ、寂しかったのじゃ。お前が王宮を去ってから、アッシュはお前のことばかり話すし、お前の真似してガラの悪い格好しだすし、挙句には……まろを置いて、こんな惑星までお前を追いかけていくし……うわあああーん！まろもアッシュと遊びたいのじゃーー」
……なんか俺が全面的に悪い気がしてくる不思議ｗ
「よしよし、ジュン、悪かったな。アッシュにも伝えておくぜ」
「そ、そうじゃ！全部お前が悪いのじゃー！」
「ああ、俺が悪かったよ」
「ザク郎どの、大人だ……」

「　でも残念だ」
「……へ？」

俺は充血しまくった自分の中指を、ジュンのデコに構えた。

「あいつに化けたのが悪かったな」
ふん！
バッッッチコーーーーン!!!
俺の怒りを込めたデコピンが炸裂する。
ジュンとかいうクソ坊主は、泡吹いてぶっ倒れた。当然です。こいつは先輩に頼んで、家に送ってもらいましょう。
ザーッ
丁度、先輩との無線が復活した。
「結城ザク郎、無事か！」
「はい、アーサーもいます」
「そうか、よかった。こちらも無事だ。猿山は精神的に弱っているが、怪我はない」
「そうですか」
「プリンセスはまだ跳び箱に隠れている。早く行け」
「了解」

無線を切る。
「宇宙船があるなら、何故もっと早く使わないのです」
色々裏切られたような目で、アーサーが俺を見てくる。
「お前のホームプラネットに目つけられるだろ？
あ、もう追放されたのか　笑」
「それはお互い様でしょう……」
アーサーを茶化してはみたが、正直、恥ずかしくて顔向けできない。こいつはチャームの能力を克服したばかりか、あの状況でアッシュが偽物だと瞬時に見抜いた。かっこいいとこ見せやがって。さすがは元親衛隊隊長というべきか。
かたや俺は……

屁でイノシシ殺すわ、お姫さまの力でタコ倒すわ、ひったくりに身ぐるみ剥がされるわ子どもに遊ばれるわで……
最低だ。今回カッコ悪過ぎる。え、いつも？ほっといてください。

俺はふらつきながらアクセロック号に乗り込んだ。
「ザク郎どの、どこへ？」

「ちょっと体育倉庫に突っ込んでくる」
「はぁ!!?」
ドン引きするアーサーを横目に、アックスのコクピットに向き合う。
「目標、南南東Ｈ６６地点。彩南高校体育倉庫」
「Ｙｅｓ，ｃｏｍｍａｎｄｅｒ．」
セクシーな姉ちゃんの声でＡＩが答える。ジャンク屋で拾った割には、結構高性能な宇宙船です。
あれ、なんかボーっとする……。
やべ、アルコール回ってたんだった

どこの世界に、酒気帯び運転しながらトラックで体育倉庫に突っ込

む主人公がいるでしょうか。

「もう……
どうにでも、なっちゃえ」

ヒィィイイン
ゴウッ!!!!
俺は宇宙船を発進させた。

０．００秒
０．５７秒

ドガアアアン！
「ギャーッ！」
到着しました。薄暗い体育倉庫、だったのは数秒前までのことで、今ではただの穴ですｗｗｗ
風圧で飛ばされた男子生徒たちが転がっている。物理的には当ててませんよ、流石にね。
宇宙船を降り、早急に自宅の車庫までワープさせる。こんなとこ九条先輩に見つかったら大変です。これ以上デビルークに目つけられるのもあれですしね。

ごろん
跳び箱がひっくり返り、
ネクタイ、ワイシャツ、パ、パンティー姿の……

「ザック……ピョンピョンワープくん改だと思ったのに、間違えて初期の使っちゃって……行き先指定出来なかった」
（いや、問題はそこじゃねーだろ）
アッシュの悩ましい姿をチラ見しながら心で突っ込む。
「ど、どこに指定するつもりだったんすか？」

「……
おまえのとこに決まってんじゃん」
上目遣い。光る生脚。はだけたワイシャツから僅かに覗く、ピンクの……
もう酔いなんて大気圏外まで吹っ飛びました。
やばい。もしこんな状況じゃなかったら……
もしここが薄暗くて、じめじめしてて、狭くて誰もいないあの体育倉庫のままだったら……
俺は耐えられないだろう。他に忘れられない人がいながら、このプリンセスに手を出してしまうかもしれない。俺には親父みたいな鋼の精神力ありません。
でも俺はついさっき、偽物とはいえお袋とアイツの顔見てきたばかりってのもあって踏み止まれた。不本意ですが、助かりましたよ。

校庭から、西連寺や古手川たちの怒号が聞こえる。

「アッシュ、これを」
俺はアッシュに、万一の為にアクセルに積んどいた簡易ペケバッジを渡した。
「あ、ペケバッジ……ありがとう」
アッシュの体が輝き、気合いの入った白いジャージに変わる。そのファッション、俺の影響だったのかよ……だいぶおかしな方向にかぶれたな。
「さっさと終わらせてしまいましょう。
２人でね」
「うん！」
俺たちは、は振り返りもせずに校庭へ突っ走った。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｄ

第９話「ブラックホール　ｖｓ　メテオ」

「俺が西連寺と古手川をやります！アッシュはサポートを！」
「やるんじゃなくて、とめるんだろ？」
「はいはい」
　黒い調理服と白いジャージが校庭を爆走する。ペケで修復はバッチリです。俺たちは西連寺軍と古手川軍がぶつかる、粉塵の境目に突っ込んだ。
「アッシュ、飛んで!!」
「おりゃあーーっ!!」
　金切り声とともに、ピンクの頭が空高く飛び、拳を構える。
「せりゃっ！」
　ドガッ
　ガァーーンン!!
　時間差でクレーターが出現。早くも数十人が空中でリタイアする。
「ザック！ちょっと力が戻ったみたい！」
　小さな拳でガッツポーズするプリンセス。デビルーク人にしては非力だと思ってましたが、そんなことはありませんでしたね。
「アシュラさん！」
「アシュラァッ！」
　中央で西連寺と古手川が距離を取り、身構える。
　だがアッシュは作戦通り、俺の背中に隠れた。
「やぁっ！」
　アッシュが雑兵を蹴散らし、周囲にに円形のフィールドを作る。
「俺が相手だ、西連寺、古手川。正気に戻るまで、王女には指一本触れさせねぇっ」
「結城君、ついに勝負の時が来たな！」
「テメェ、世話役だからって調子乗んじゃねぇぞ！」
　西連寺がテニスラケットを引き抜き、
　一気に後ろに下がった！
「受けてみろっ！」

パァアン!!
「念力集中ッ！」
念の込められた豪速球サーブが迫る。
俺は素早くフライパンでガードした。
バガン！
（嘘だろっ!?）
オリハルコン製のフライパンが凹みやがったっ!!
「オラァァァッ！」
左前方から、古手川の蹴りが飛んでくる。
ガキィッ
膝で受け流し、包丁の峰を振り落とす。
ガシッ
だが古手川は、俺の腕を掴んだ。
「校内に包丁を持ち込むのは……」
グルンッ
（ったっ!?）
肘の関節を回された！
「校、則、違反だろうがアッ!!」
ドグム
「ぐあっ」
横っ腹に古手川の後ろ蹴りが炸裂し、思わずよろめく。
ゴゥッ
再び迫る西連寺のテニスボールッ！
俺は素早くフライパンを構え……
「念力拡散ッ!!」
ズァァッ
（何ッ!?）
ボールが五つに増えたぁっ!?
「ッシャァッ!!」
ズバババババッ
包丁に持ち替え、全てのボールを真っ二つに斬り裂く。

ゴォッ

１０個のボールが流星の様に俺を横切り、

ズァァアン！

体育館を破壊した。

……あいつ、自分が地球人ってこと忘れてるだろ。

「ハアァッ!!」

一瞬の隙を突き、古手川がラッシュをかけてきた。

ゼロ距離。突きを撃つ暇もない。肘、膝が幾度となくぶつかり合う。

ドガガガガガガガガガガガガガガ

これが古手川龍！（星）人種の違いをものともしない格闘センスと根性は、手負いとはいえこの俺を確実に後退させていく！

だが、

これで終わりだッ

ゴォッ

ジェットブーツの力で、右足を跳ね上げる

古手川の脳天に

ドゴッ

かかと落とし！

これで気絶しない奴など地球人には

「……だいたいお前はよぉ……」

っ……！

倒れもしねぇっ!?

「あんなハレンチな家出娘をかくまってるなんて、ひじょおおおーーしきだろおがああっ！」

ボゴォン

古手川のボディブローー！

「ガハァっ!?」

今までで一番効いた。

防弾調理服の上からなのに、俺は思わず膝をつきかけた。こんなの地球人のパワーじゃねぇっ！

「フー、フー」

古手川の頭は真っ赤になって、血管が浮き出ている。

何かおかしいぞこいつ。

「種明かししやがれっ！」

俺は古手川の股座に潜り、死なない程度に急所へ二の腕をぶつけた！

ゴン！

「いっってえッ!?」

叫んだのは俺です。

古手川のブツが、鋼鉄の如く固まっている！

ぶつけた腕がジンジン痛い。もはや武器です。とても風紀委員が持っていていいブツではない。

いや、それより

今、もっとやばいもんが、古手川のブレザーから地面に落ちた。

これは……花？

（アドレナの花か！）

そういうことか。

あの匂いを嗅げば、アドレナリンが大量に分泌されて正気を失い、痛みも感じなくなる。宇宙規模でもアッシュのチャーム能力の次くらいに効きます。古手川はこいつを嗅いだみたいです。嗅がされたのかもしれない。

ケンジャの花を嗅がせれば、坊さんなみに落ち着かせることが出来るのですが……

今持ってたかな

俺はさっき宇宙船から持ってきたナップサックをいじり始めた。色んなもん運んでるからもしかしたら……

「よそ見してんじゃねぇぞオラァッ！」
ドカッ
「ガッ！」
思い切り頭蹴飛ばされました。そりゃ格闘中に鞄あさってたらそうなります。
残念ながら、ケンジャの花は持ってませんでした。俺はチャームの能力が効かないから高を括ってたんでしょうね。まさかこんな日が来るとは。
かといって、アドレナの花で暴走してる奴は、正攻法では倒せない。
仕方ねぇ。
相手がラリってんなら、こっちもラリろう！
俺はナップサックにある空間歪曲ポケットから、デビルークハーブをぶっこ抜き、
近くにあったパイロンに詰め込んだ。
ボウッ
パイロンの穴から発火させ、ハーブを蒸す。

「外道には、外道だ」
ボワッ
パイロンの中で、炙られるハーブたち。
煙が立ち上ってきた。
「お前、まさか……」

ガボォッ！

俺はパイロンを

頭から被った。

すーーーうううううーーっ

はあああああー

「っぱぁーーっ!!」

余りの気持ち良さに俺は叫んだ。

ドグム

古手川の蹴りが胴に当たる。

だが今の俺は痛覚が麻痺していた。

「効かんッ!!」

そのまま古手川の胴を持ち上げ、

「スープレックスッ!!」

ドゴン!!

古手川の頭を、グラウンドに叩きつける。

古手川はさすがにピクリとも動かなくなった。

「こっ、古手川さんッ!!」

「畜生、結城、テメェッ」

古手川を再起不能にした俺に、避難の目が向けられる。

だが、俺は何の躊躇いも感じなかった。

ハーブの快楽は薄れ、次第に暴走する自我だけが残り始める。

ボゥッ!!

俺の周囲に、円形の炎が走り、

男子生徒たちは、戦慄して退いた。

「俺に……近くんじゃねぇよ」

ふいにこんな言葉が、俺の口から吐かれた。

……何だ、これは?

まるで俺の中で、俺じゃない奴が喋ってるみたいだ。

「地球人ごときが、……アッシュを何だと思ってやがる。ただの女の子じゃねぇんだぞ!!」
「ザック……」
遠くの方から、アッシュの怯えた声が聞こえる。
「どうせてめえらも、手に負えなくなればすぐに手放すんだろう！地球人は。
犬も、猫も、子どもさえも！
愛すると決めたものを、自分の都合で捨てる……そういう民族だもんなあ、人間はなあ!!
なぁ……？
霧崎　玄凰」
……誰だ。
「人間はみんなそうだ。お前らなんかに、アッシュを守らせてたまるか」
俺は人間が大好きなはずなのに……
「アッシュは……」
俺は……
「「俺のものだ!!」」
だ、れ、だ？
『私の下僕になれ、

結城ザク郎』

『素敵っすねぇ、マスター！』

どす黒い炎が、体から滲み出る。

「あああああああーーーっ!!!」

俺の中に、何かがいる。

「ああああああああーーーーーっ!!!!」

ドオオオオーーンッ!!

「な、何!?ザック」

「結城君！」

「……」

「ザク郎殿!!」

「西連寺、古手川！彼を止めるぞ！」

「あなたは……九条先輩!?」

「なんだよおまえら……ザック、どうなっちゃったんだよ!?知ってんのか!?」

「申し訳ありませんが、プリンセス。詳しくは……我々が生き延びた後に」

「あれはもう結城ザク郎ではない。あれは……」

雑魚共が群がる。

「俺は……まだ諦めない」

そう言い、西連寺が九条先輩を押しのけた。
「西連寺、いつまでそんなことを」
「俺が結城君を倒す！結城君を倒して、そして、アシュラさんと結婚するんだ！」
西連寺が、両手でラケットを握る。
「テメェじゃねぇよ西連寺……アシュラと結婚して、銀河の覇者になるのはこの、俺だ……」
古手川がそう言ってボールを握り、身をかがめた。
「こ、こいつら、完全に王子たちに操られているッ！」
九条先輩の額から冷や汗が流れた。
「……ふーーーーっ、
オラァッ!!!」
ビュン！
テニスボールが、空高く放たれる。
ヒューーーン……
ボールが落下する中、西連寺は念力を溜め始めた。
ドンッ!!
西連寺の念力で、テニスボールが静止する。
不気味な静寂。
西連寺が、両手でラケットを突き出した。
「念力……集中ッ！」
ギュワアアアンッ
テニスボールがさらに収縮し、

やがて、どす黒い物質と化す。
（……ブラックホールか）
ラケットが振りかぶられ、
「念・力・拡散ッ!!」
振り下ろされた。
ドゥンン!!
ブラックホールが、あらゆるものを飲み込みながら、俺に接近してくる。
「ザックーーッ!!」
柱に掴まったアッシュが、必死で叫んでいる。今にも吸い込まれそうだ。
あのブラックホールに飲み込まれれば、一瞬で消滅するだろう。
永遠に。
ブラックホールの先、西連寺や古手川を操る王子たちの下劣な笑いが、見えた気がした。
「ふーん。
そこまでするんだ」
俺は覚悟を決めた。
もう、学校が潰れてもいい。
例え俺が二度と地球にいれなくなったとしても構わない。
だが俺は、
「アッシュを護る」
そして、「友達」として、

絶対に西連寺と古手川を殺さない。

「ザッ……ク……」

アッシュの両手が、柱から離れ、

ブラックホールに、吸い寄せられていく。

俺は、

転がっていた、サッカーボールを蹴り上げ、

「トランス、

『彗星』」

ゴォッ

オーバーヘッドキックを、ブラックホールに撃ち込んだ。

キィィイッ!!

サッカーボールが、ブラックホールを貫き、

フッ

ブラックホールが消滅する。

「なんでもかんでもぉーーーっ、

燃、や、し、て、

解決じゃあああああああーーーーーッ!!!」

ドッッ
ガアアアアーーーーーーン!!!
サッカーボールはそのまま、校舎をぶち抜いた。
ガラガラガラガラガラガラガラアッ
「こ、校舎が!?」
「崩れるッ!」
「逃げろ!逃げ続けろっ!!
ここからだ!」
粉砕された校舎の瓦礫が、空中で炎を纏い……
ドカン!ドガン!ドガンドガンドガドガドガドガドガドガドガドガーーーンドガドガドガドガドガドガ……
絶え間無い爆発。
「聞いたことがある、ザク郎殿、いや、
『霧崎玄凰』の能力。
『撃つもの全て』を『爆発エネルギーに変える』……」
「それだけじゃない。ぶつけて崩れたり、弾かれたものも全部「霧崎が撃ったもの」と見なされる。
破片も、人間も、接触して宙に浮いたものは全て爆弾だ。
止める術は一つ」

「……分かってるよ……」

ザッ……

アーサーと九条先輩が武器を構える。
アッシュも、万能ツールを柔らかそうなバットに変えて身構えた。
３人とも剣士か。

（クエストみてぇだな）
さしずめ俺はモンスター、
いや、ラスボスか。

「みんな、ゲームオーバーになっちゃってくださーい！」
そう叫んで、俺の意識は飛んだ。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｄ

第１０話「爆熱少女リターンズ」

てれってーー

……

どうも、アッシュです。

ただいま、誰もいない部屋で、１０年前の特撮番組を流してます。

『なんでもかんでも

燃やして解決っ！』

「……解決してねぇだろ、バーカ」

私はテレビのヒロインに向かって、リモコンを投げつけた。

「放火の刑罰が、何かわかってんのかよ」

ああ、

ザック……

あの日、彩南高が全焼した。

３日で建ったけどね。そして全員軽傷。そんな世界です　笑

でもザックは、日本の監獄にいる。

あの後どっかから、すごく優しくて、綺麗な、光の雨が　降ってきて、火はおさまった。気を失ったザックは警察に連れていかれた。

私も、兵士も、警察も、「お友達」たちも、最後まで、誰もザックを止められなかった。

あの雨はなんだったんだろう。デビルークがあんなこと出来るはずがない。なんだか温かくて、少し懐かしい気がしたな……。

でも、ザックがやったことは変わらない

いや、

あれはザックなんかじゃなかった

『アッシュは

俺のものだ!!』

（アイツがあんなこと、言うわけないもんな……）

わかってるんだ。

アイツの胸には、私じゃない、忘れられない人が生きている。

ザックみたいに過酷な世界を生きてきた人に、私みたいな温室育ちが、釣り合うわけない。

ずっと気づいてた筈なのに、家出までして……

やっぱりなにも変わらなかった。

「馬鹿だな、あたし……」

トントントン

ガチャ

「……アシュラ様」

「アーサー、おはよう。傷は治ったのか？」

「はい、おかげさまで大分……」

「そうか、そりゃよかった」

「マスクをお持ちしました」

「ああ、そうだったな。お前にいらなくなったから、忘れてたよ」

私は忌々しいマスクをつけた。すでに制服に着替えている。手続き上入学してるから、なんか登校しなきゃいけない。面白くもない。

「アシュラ様」

「ん？」

玄関に立った私を、忠臣が真っ直ぐ見つめる。

「私がこのようにあなたを見ることが出来たのも、全てザク郎殿のおかげです」

「……そうか」

「私は、私は諦めません。ザク郎殿は、必ず……アシュラ様の」

「もういいよ、アーサー」

私は制服姿のアーサーに言った。今は彼も、私の「先輩」だ。学校では会わないようにしてる。こいつに敬語で喋ってたら吹き出しそうになるから。そうでなくても敬語なんてわからないのに。

「お前は剣なんか捨てて、自分の好きなことやれよ」
「アシュラ様……」
「あ、でも、
次、私と智子ネタにしたエロ漫画描いたら殺すから」
「うえーーん、同人s」
ドガアァッ
ドアに挟まった変態の顔を無視して、私は学校へ向かった。朝飯にダークマター入れてやったこと、後悔しなくてよさそうだ。
ただ描くだけならともかく、あいつコミックマーケットで売ってたからな。信じられねぇ。
あんな本が売れるなんて、この国の法はどうなってんだよ、まったく。

（……どうせ描くなら、私とザックにしろよな）

「おはよう！アッシュ」
馬鹿なことを考えてる間に、友人たちに囲まれていた。
「おお……相変わらずお美しい！」
「皆の衆に見せられないのが、もったいないすなぁ～」
「いいから離れろよ、うっとうしい」
妻村と指野。こいつらだけじゃなく、季虎や龍ともちょっと仲良くなれた。みんな、素顔を見せられる希少な男子だ。皮肉なことだけど、ザックの一件以来、私はこの惑星に馴染んできている。
「きいたかアッシュ、また転校生が来るってよ」
「ふーん」
「なんだよ、全然興味なさそうだな」
「すっげぇイケメンらしいよ」
「……そんなもん、ザックに比べたら大したことねぇだろ」
「熱いっすねぇ！」
「俺らも応援してるぜ！」
「ていうか、あいつもさっさと脱獄してこいよ。あいつなら余裕だろ」

妻村が明るく言う。
「はは……」
だが指野は、空虚な笑いを漏らしただけだった。
さすが情報屋。知ってるんだ。
危険星人種隔離獄連。
抜け出せた者は、過去にはいない。
そして、囚人はみんな……
「……先、行ってて。
ちょっと忘れ物したから」
「あ、ああ。
んじゃ、後でな」
私は2人と別れて、河川敷に下りた。
ー河川敷ー
いい場所だ
ここでは、いろんなことがあったらしい。
ママが、パパにプロポーズしたのも、このあたりじゃなかったかな
……
そんなことしなきゃよかったのに。
「ガッコ、行くか」
道に戻った時だった。
「ごめんね、ちょっといいかな?」
甘ったるい男の声に振り返る。
「僕、こういう者なんだけど……」

男はそう言って、名刺（っていうの？）を出してきた。

『キラキラ芸能』

（……知ってる）

「君、アイドルとか興味ない？」

マスクをしている私に、男はそんなことを言ってきた。

「……なに考えてんだよ、あんた。私顔隠してんじゃねぇか」

「いやいや、分かるよ～、溢れ出るオーラ！超売れっ子で顔隠してる子もいるし、君なら絶対人気出るよ。どうかな」

うさんくさい。

「興味ねぇよ。帰ってくれ」

「残念だなぁ、気が変わったらいつでも来てね」

「そん時はもっと気を付けろよ。地球人の瞳孔は1つだけだ。

この異星人め」

「ッ……」

「弟たちによろしく」

微かな殺気を背に受けながら、私は足早に学校へ向かった。

ー教室ー

「ラしゃん……アシュラしゃん」

ん？

「大丈夫でしゅかぁ……」

あぁ、もう朝礼か。

いや、あんたの方こそ大丈夫かと問いたくなるような骨川先生の声で、私は目を覚ました。

「えーー今日も転校生を紹介します」

そういえばそんなこと言ってましたね。

「ホーレン君、入りなさい」

ん、ホーレン？

どっかで聞いたような……。

ガラガラッ

ホーレン君
そんな名前に反して教室に入ってきたのは、
エメラルドグリーンの髪をした美少女だった。

「どうもーーっ！みんな大好き、ホリー・エルシ・ジュエリアこと、☆Ｈｏｌｌｙ☆でーすっ！」
髪を揺らして、そいつは大げさにお辞儀した。
「ホリーちゃん!!」
そう叫んで、クラスの男子がいっせいに立ち上がる。
「あ、あれぇ、ホーレン君？だ、男子だったはずてわ」
「骨川先生、やっぱりもう退職されたほうが……」
「うっそだろ！おい実、ガセ流してんじゃねぇよー」
「おかしいな、俺の情報に間違いなど」
「どうして彩南に来たの？ホリーちゃん！」
「お仕事大変!?」
「後で写メとらせてよ」
「やめろ！ホリーさんが困ってるだろ！」
「朝礼中に騒ぐんじゃねえ、ぶっ殺すぞ!!」
なんなんだこいつら笑
でも、盛り上がるのはわかる。
彼女は地球でいう大人気アイドルだ。
そして、こいつの正体はメモルゼ星人。
それだけならいいけど……
「で、でわホリーしゃん、あそこの席に」
「あ、私、ザッくんの隣がいいなーー」

ピキーーーンン……

「ってゆーか、そこじゃなきゃダメ、って感じ？えへへ」

ホリーの発言に、教室の空気が凍りつく。

あーあ。

「え、えーーと、結城君なら」

「パクられたよ」

私は骨川先生の代わりに、この顔見知りに言ってやった。

「ぶってねぇで、さっさと奥の席に座んな」

「はぁ？なにあんたその言い方！ホリーちゃんに失礼でしょ」

「そーだよてめぇ、マスクで顔隠してるくせに、嫉妬してんじゃねぇよ。どうせブスなんだろ！」

「うぅ、ホリーちゃん、ザックなんかのこと……」

「おいお前ら、アシュラさんに言い過ぎだよ！」

「……ボソッ（今アッシュのこと貶した奴、許さねぇっ）

……」

「やめなよ」

智子の一声で、教室が静まった。

「アッシュ、ホリーちゃんと友達なの？」

智子が私に、冷静に問いかける。

私は黙ったまま、ホリーを睨んだ。

「うん！大　親　友　なの！　猿山さんもよろしくね」

ホリーが満面の笑みで答える。

「じゃあホリーしゃんはとりあえず、アシュラしゃんの隣……結城君の席に。

では、授業を始めましゅ。えー黄金の精神とは……」

クラスメートの視線が集まる中、ホリーが私の隣に座った。

「……可愛いマスクだね」

にたつきながら、ホリーはそう言った。

一言も頭に入らないまま、授業が終わる。

ホリーの人だかりを確認して、私はそっと立ち上がった。

だが、奴は見逃さなかった。

「あ、みんなごめんね！ちょっとアシュラちゃんと話してくる」

皆んなの前で、ホリーが腕を絡めてくる。

「トイレ行こっ」

「便所ぐらい1人で行きやがれ」

「いいじゃん」

廊下に出る。人通りがなくなるやいなや、ホリーはスカートから、手榴弾の様なモノを取り出し、私に見せつけてきた。

「着衣消滅ガス。銀河通販で買っちゃった。

ねぇアシュラちゃん、今から私の言うことに答えなかったら、コイツを使っちゃうよ。

私は逃げれるけど……マスクが消えたアシュラちゃんは、どうなるかなぁ？」

「やってみろ。女子更衣室のど真ん中でコショウぶっかけてやる」

こいつは、くしゃみをすると「男」になる。二重人格とかじゃない、独立した全くの別人にだ。

こいつはそのことを隠して、地球でアイドル活動をしてるはず。こんなとこでそれがバレたら、こいつのアイドル生命の危機だ。

だから、私の「チャームの能力」に見合う脅しだと思ってた。

だがホリーは、誇らしげに笑って言った。

「残念でした――！

もう分離してまーーすっ」

えっ

「昨日入学手続き終わった直後に、第三次成長が来たの！てへっ」

私は、焦りを抑えきれなかった。
こいつが、もう男にならない……
こいつの弱みは、もう無くなったの……？
「アシュラちゃん、焦ってるでしょ？」
鬼の首を取ったような顔で、アイドルが覗き込んで来る。
「性格悪過ぎー。私のハンデに安心して、ザッくんにアピールするなんて。
でも、もう終わりだよ。私はもう、男子と入れ替わったりはしない。
ねぇ、ザッくんはどこにいるの？答えなさいよ、
アシュラ」
声を低め、ホリーが本題に入る。
「あいつならもういない」
私は動揺しながら、本当のことを答えた。
「え？」
「……私を護って、地球の警察に捕まった」
嫌味をいったつもりじゃない。こいつがどう思うかは勝手だけど。
「……あんた、ほんとにサイテー」
ホリーが私を突き放し、睨みつける。少しだけ低い目線から、威圧をこめて。
「いいこと教えてあげる。「かわいすぎる」お姫さま。
あなたは一生、王子さまを幸せには出来ないわ」
……ッ！

私はただ、拳を握ることしか出来なかった。

「「普通にかわいい」私なら、いくらでもザックくんを幸せにできる。アイドルとして、ザックくんの好きな地球でお仕事も出来る。

でもあんたは？顔を隠して、しかも危険な婚約者候補たちを抱えたまま、何が出来るの？害しかないじゃん。何か言ってみなさいよ」

……

「アシュラちゃん昔からそうだったもん。迷惑しかかけてこなかった。地球でも一緒だよ」

……

「ザックくんのことが本当に好きなら、さっさとデビルークに帰って。

これ以上、私たちに迷惑かけないで」

黄緑の髪を揺らし、ホリーが踵を返す。

上履きの音が遠ざかるまで、私は俯いていた。

初めて、マスクと、長い髪に感謝した。

だって今の私は

「泣いてるの？」

背後の声に振り返る。

「智子……」

「ご飯たべよ？私も泣きたいから」

弁当箱を上げた智子が、優しく笑った。

ー屋上ー

「……でね、私あの時、変な宇宙人に脅されて、言いなりになってたの」

「放送室で？」

「うん……だから、あんな嘘言わされて、アッシュやザックたちを危ない目に合わせちゃった……」

「智子は大丈夫だったのか？」

「うん、多分。でも、凄く怖かった。心の底まで、あの冷たい、銀色の手で、鷲掴みにされたみたいに……

ごめんね、私。弱くて」
「何言ってんだよ……」
猿山　智子
私たちの、もう一人のクラス委員だ。
いつも明るく振舞っているが、本当は凄く繊細で、人の本当の人格とか、隠した気持ちを見抜く力がある。面倒見もいい。（ちょっと私に似てるかな？　なんてな）
そんなクラス一の人気者が、私を「親友」だと言ってくれる。これははぐれ者の私にとって、大きな救いだ。
そして……
「こんなんじゃ、まだまだ季虎に振り向いてもらえないかなぁーっ！」
1番好きな人には振り向かれないところも、似てる。
チラッと、私をみる。
「アッシュは、
まだ、ザックのこと好き？」
「え!?
あ、うん」
「よかったぁー」
智子が両手を上げて、屋上の床に寝そべる。手に持った空の弁当箱に、太陽が反射する。
「じゃあ、まだ負けらんないね」
西連寺　季虎。
あいつが、私のことを……
あんなにでかい騒動が起こったんだ。流石に私も、あいつの気持ちに気づいている。
そんな、恋敵とも言える私を、智子は慰めてくれるんだ。
「みんな、強いな……」
「みんな？」
「智子も、ホリーも、西連寺も。私の周りは、諦めない奴ばっかりだ」
「ホリー？
さっき、喧嘩してたみたいだけど」

「大したことじゃねぇよ。あいつはああやって、いっつもつっかかってくんだ。ザックのことで」
「強がり！アッシュ泣かされてたじゃん」
「あっ、智子のいじわるっ！誰にも言うんじゃねぇぞ」
　転げて笑いあう。ドアが開き、清掃のおばさんが通りすぎる。私たちは声を潜めた。
「あいつ……ホリーとは腐れ縁でさ。
　確かに嫌な奴だけど、むちゃくちゃ根性あるんだ」
「根性？」
「あいつも、私の腹違いの妹で、別の星の王女やってんだけど、
　ちょっと前まで、別人と入れ替わる体質で」
「ええ！」
「しかも男」
「えええ!?」
「びっくりだろ？　」
「う、宇宙って……」
「今はもう「分離した」らしいけどな」
　ハンパない。智子は両手で口を覆い、仰け反った。
「それで、あいつ、ちょっとうちのデビルーク星で暮らしてた時期があったんだけど、そんな身体だし、男の方も女っぽい性格だったから、けっこうからかわれてたんだ。うちの星、けっこう体育会系だしさ。友達は……私くらいだったかな。
　だから私が、いっつも泣きついてくるホリーとか、ホーレン、男の方ね、王宮に連れ込んで、いっしょに遊んでた。
　でも……」
「でも？」
「ホリーが、その……
　ザックに、一目惚れしちゃって」
「お、おーー」
　展開を楽しむように、智子が目を見開く。
「あの人は誰!?って私に聞いてきて、私は、

『え？私の王子さま！』
って答えたんだけど、それが許せなかったみたいで……
もう、それっきり」
私は両手を上げた。
「それからはもう、事あるごとに、私とザックの邪魔してきて、大変だった。私がザックにかけた迷惑も、半分くらいはあいつのせい、うん。
私が我慢してなかったら、デビルーク対メモルゼで戦争になってたよ！多分」
「ち、地球ではやめてね」
智子が、冗談ともつかない口調で懇願してくる。私は話を続けた。
「それで、ザックがいなくなってから、どこで知ったのか、あいつ、私より先に、ザックが地球にいるって突き止めたんだ。
『私、地球でアイドルになってやる！そしてザックを振り向かせてみせる！』って言ってきたから、『勝手にしろよ』って言ってやったんだけど、そのときは私もけっこうホリーに酷いことされてたし、他にも色々病んでたから、内心、そんな身体のくせに、アイドルなんて出来っかよ、って、思ってた。
このざまだ。今やあいつは売れっ子。私は……ザックにも、みんなにも、迷惑かけてばっかり。
負け犬だ」
「負け犬って……」
智子が、不思議そうに首を傾げる。
「ザックは、ホリーちゃんが好きなの？」
「いや、それはない、
はず」
私は首を振った。
「じゃあ、まだ負けてないじゃん」
「でも、私でもなくて……」
智子が立ち上がり、どもる私の肩に手をのせる。
「アッシュも、負けらんないねっ」

それだけ言って、智子は屋上の階段を下りていった。
そうだ。
智子だって、辛いんだよな。
中学生の時から、ずっと季虎が好きで、やっと同じクラスになれたと思ったら、急に私が来て、季虎は私のことを……
でも智子は、私の前でも胸を張ってる。
ホリーの前で、黙り込んじゃった私とは違うんだ。
（ありがとう。智子）
ちょっと勇気が湧いてきた。
ザックが処分を受けるまで、まだ時間がある。
デビルークの権力は大きい。ザックを殺せと命じられれば、地球の代表は逆らえない。
当然、王女の私の頼みなんて聞かれないだろう。
なら、
出来ることは一つ。
私の持つ「武器」を、奴らにちらつかせるだけだ。

立ち上がる。
遠くに見える、温泉の煙突。その上で、
かすかに、
金色の髪がなびいた。

（え!?）
目をこすり、もう一度見る。だがそこには、ただ青い空が広がるだけだ。
（……まさかね）

屋上の柵に近づき、一気によじ登る。

「よし」
ダンッ

青空に、身体を投げ出す。

「ペケ！」

バッ

半重量ウィングが背中から飛び出し、私の身体は、地平線と並行になった。

ホリーの言う通りだ。

私は、迷惑ばかりかけてきた。

きっと、これからも。

だって、存在事態が迷惑なんだから　笑。

だから、

出来るだけ大人しく生きていきます。

でも、

好きな人だけは、

どんな手使ってでも、助け出してみせる。

みんな、覚悟しとけよ。

地球も、デビルークも、

ザック一人に、責任押しつけやがって。

全員巻き込んで、暴れてやる!!

ーキラキラ芸能　事務所ー

「失礼しまーす」

ドアを叩く。

「どうぞ」

通された部屋には、ホスト風の男と、いかつい男が２人。それと、怪訝な顔で私を見る、朝会った異性人のスカウトマン。

「えー、お嬢さんは？」
いかつい男が私に質問する。
「彩南高校から来ました」
「ああ、あの可愛い娘がいっぱいいる」
「でも、マスクされてちゃわかんないなぁ～　笑」
何しに来た？　そう言いたげに、スカウトマンが私を睨む。
「で、どうしたの？」
ホスト風の男が尋ねる。
私はマスクの裏で、とびっきりの笑顔を作って言った。
「アイドルになりたいんですけど」
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第11話「爆熱少女リターンズ　Ⅱ」

ーデビルーク星　宇宙連合本部ー

「デビルーク王は……例によって「不在」か」

俺は、デビルークと書かれた札の席に着く、双子の王子を見た。

（いつまで兄弟喧嘩を続けさせるつもりなんだ。俺たちの親父は）

「なんだよ、クジョー。俺じゃ不満だってのか？」

俺の視線に気付いたのか、デビルーク第一王子ハンニャが噛み付いてくる。

「ハン！仮にも銀河警察の代表だよ。口を慎もうか」

「けっ、ビシャはすぐいい子ぶりやがって……」

第二王子ビシャモにたしなめられ、ハンは口を閉じた。

ゴーン

「これより、会議を始める」

重厚な鐘の音とともに、議長が口を開く。

「地球人！」

「は、はい！」

開始早々、ハンニャに呼ばれて、地球の代表がおずおずと立ち上がった。

「ハン……名前くらい覚えて来い」

「う、うっせーぞビシャ！え、えーと、そうだ！そ、そーりだいじん！」

「はい！」

（ん、総理大臣？）

地球の代表は米大統領じゃないのか？

「首相……今日は我々デビルークに「言いたいこと」があって来たんだよね。

何かな？」

急にビシャの声色が変わる。

やはりこいつは、ハンより脅威になりそうだ。
我が国の首相は、額に汗を滲ませた。
「実はその……そちらのアシュラ王女様が……
我が国日本で、アイドル活動を始めたという情報が」
「なに!?」
誰かが声をあげ、
会場が騒つく。
「デビルークの王女といえば、チャームの能力の」
「あの力によって滅んだ文明がどれだけあるか！」
「地球はただではすまん」
「へ、へぇー。姉上が」
「げ、現在では、まだ人前にも出ておられませんが、なにせアイドルですから、もしアシュラ様が国民の前で素顔を見せられれば」
「それだけじゃない！動画サイトを通じて、世界中がチャームの能力に犯されるぞ」
「地球は滅ぶな……
確実に」
会場がどよめく。辺境とはいえ、今や地球が宇宙に及ぼす影響は小さくない。
「なんでそんなことが許されたんだ!?」
「地球の公安はどうなっている！」
「そ、それは……」
「ソルゲムだな」
俺の言葉に、地球の代表は目を泳がせた。
どうせ「キラキラ芸能」だろう。ここはヤクザと深く関わっていて、俺も何度か聞いたことがある。
（ソルゲムの残党が、地球の暴力団組織と密ルートを築いているのは知っていたが……こんな抜け穴があったとはな）
「ソルゲム……宇宙の密輸集団か」

「確かに、昔から打倒デビルークを掲げていたが」
「奴ら、アシュラ様のお力を利用して、地球を滅ぼすつもりだ！」
「ふ、ふん。でも地球なんか潰したところで、俺たちには関係ねぇだろ。姉上なんか、どうでもいいしな」
「そうだね……むしろお姉さまには、死んでくれた方が好都合だし」
「それは違う」
俺は、デビルークの愚かな王子たちに向き直った。
「デビルーク王……結城リトの血を引くのはあなた達だけではない」
「へぇ、僕たちが地球の兄弟を恐れるとでも？」
九条「先輩」
ビシャが挑発的な視線を向ける。
俺は窓の地球を眺めた。
「そうだな、たとえば

生体兵器」

会場が凍りつく。

「地球が大好きな、宇宙最強の殺し屋がいるな。
そいつの親父は誰だ、ええ？
俺たちと同じ、結城リトだ」
「伝説だ！」
「もうとっくに死んだはず……」
「やめろ！あの、あの小娘の名前を出すのは……やめろ！」
「やめるんだもん!!やめるんだもーーーんんん!!!」
あちこちから、悲鳴の様な声が上がる。
いやガーマ星の代表ビビりすぎだろ。何があったんだ？
「残念だが、目撃情報がある」
俺は無情にも、話を続けた。
「本屋のおじさん、銭湯のおばさん、たい焼き屋のおっちゃん」
「確実にいるじゃねぇか!!」

「しかも地球に来ているとは」
「今の地球は、他のどの惑星よりも危険だ。
もし、奴の心の拠り所を刺激してみろ。
デビルーク星など、簡単に消し飛ぶぞ」
震え上がるハン。
「ソルゲムはそれを狙っているのかもしれん。軽率な行動は慎むべきだ」
だが対称的に、ビシャは腕を組み、見下すように俺を睨んだ。
「殺し屋を盾にして脅しをかけるなんて、銀警も落ちたね」
やはり、こいつは一筋縄ではいかないな。
「我々デビルークは、1人の暗殺者に怯えて行動を制限しない」
「なら関係ない。我々銀河警察が、地球には指一本触れさせない」
「立場をわきまえなよ、九条麟。
あとで消すぞ」
ビシャがそう言い終わらぬ内に、

スパァンッ!!

俺は刀を抜いた。

「ここで斬るぞ」

縮地。
地球人の中でも最も貧弱な民族が編み出した、足捌き。
一瞬で距離を詰め、ビシャの喉笛にブラディクスをかざす。身体能力に甘んじるデビルーク星人には反応出来るはずもなかった。
「お、おまわりさん。会場で武器を抜くのは」
「俺なりの治安維持だ。邪魔をするな」
他代表の忠告を制し、さすがに身を硬ばらせるビシャに顔を近づける。
「よく聴けよ、皇太子どの。

俺は今までの警察とは違う。あんたが支配してきた、どの惑星とも同じじゃない」
そして、俺の母星である地球の代表を睨んだ。
「俺は一つの惑星に媚びはしない。中立の立場で正義を行う」

「俺が宇宙にいる限り、
いつまでも、お前たちの時代が続くと思うな。
デビルーク」

再びデビルークの席に目を移し、俺は言った。
王子たちの視線が刺さる。

「まだ続きがあるのだろう。地球人」
「はい」
議長に呼ばれ、再び日本の首相が立ち上がった。

「この問題を解決するためには、アシュラ王女をとめなければなりません」
「女だけで、デビルークの王女をとめるというのか?」
「うちはお断りだ」
他惑星の代表が騒めく中、首相は続けた。
「はい、我々地球人だけでは、不可能です。
しかし、今の地球には、たった一人、チャームの能力をまったく受けない、しかも強力な異星人がいます。
デビルーク皇太子殿下、
死刑囚、結城ザク郎の釈放を、許可して頂きたい」

……なるほど、そういうことか。
アシュラ様、急に地球でアイドルになるなど、何を考えているのかと思えば、
ご自身を利用して、結城ザク郎を釈放させようとしていたとは。

まったく、とんだプリンセスだ。
「た、確かに彼なら、王女を止められるし、ソルゲムにも負けないだろうが……」
（奴はアシュラのＮｏ．１婚約者候補だぞ。ハンニャたちが一番煙たがっている）
（それをしゃ、釈放させてくれなどと……）
（あいつ、殺される！）
「……クロウ・キリサキ」
議長が、重々しく口を開く。
「素性は不明。幼い頃から、裏社会で有名な運び屋だった。だが「例の事件」をきっかけに失踪。霧崎　玄凰という名で地球に潜伏していたところをデビルーク王室に保護され……結城　ザク郎と名付けられる。
そうだったな？九条君」
「はい、そうです」
「その男が、地球の学校で暴走し、君でも止められなかったそうじゃないか」
「……はい」
俺は反論したい気持ちを抑えた。
「彼が地球でテロを起こすつもりだったという見方もある。
結城ザク郎を解放するのは、それはそれで、あまりに危険なことではないのかな？」
「それは誤解です議長。あれは、
デビルークに操られた彩南の生徒たちを止めるために」
「証拠あんのかよ、クジョー!?」
俺の弁明に対し、待ってましたとばかりにハンが怒鳴る。
「そうだよ、君が弱かっただけだろう。警察のくせに」
便乗するようにビシャも声をあげた。
（……こんな時だけ息合わせやがって）
デビルークは、あの事件の痕跡を全て消し去っている。
俺は何も言えなかった。

「……いずれにしても、この案は通せんな。リスクが高すぎる。
他にはないかね」
議長の問いに、一瞬静寂が訪れる。
だが、
「男らしい僕が行こう」
最高に気色悪い返事とともに、一人の男が立ち上がった。
「……メモルゼ星代表、ホーレン・エルシ・ジュエリア王子」
議長と俺は立ち上がった少年を見た。

ホーレン・エルシ・ジュエリア

メモルゼ星の王族、ジュエリア家の王子。
そして俺と同じ、デビルーク王結城リトの息子。つまり俺やザク郎と変わらない歳だ。一国を担うには幼すぎる。
「アシュラちゃんと結婚するのは、この僕だ！野蛮な地球の男たちに渡す訳にはいかない。もちろん、結城にも」
「どういうことかな？」
「ゲリラ戦は得意だ。数日後にアシュラちゃんの初ライブがある。そこでアシュラちゃんがベールを外し、ファンたちが暴走する瞬間、僕たちメモルゼ軍が、ファンや関係者を殲滅させて、アシュラちゃんを救い出すんだ。キラキラ芸能には片割れの妹が働いてるから、情報も得やすいしね」
（……くだらない、馬鹿げた話だ）
俺は思わず鼻で笑った。
その時だった。
「なるほど……それで被害の拡大を防ぐと」
議長が、深く頷いた。
「まぁ最小限の犠牲は必要かもな」
「それくらいの騒動なら、〝あの〟殺し屋も気にしないだろう」

会場全体が、この王子の謀略に賛成し始めている。

（なんだと、こいつら……）

「では、この件はメモルゼ星に任せるとする。異議はないな？総理大臣殿」

「やむをえません」

地球の代表までもが賛同した。

（命をなんだと思ってやがるっ……！）

「では、決定」

会場を立ち去る、無数の足音が響く。

「お待ち下さい！これでいいのですか、首相！」

俺は、自分の母星の代表に詰め寄った。

「もう決まったことだ」

「そんなことが許されるかっ……」

「九条君」

議長の杖が、俺の前を遮る。

「君は純地球人だから、宇宙の常識を理解出来んのだろうが、

これが最良の判断だ。星を存続させるための、当然の処置だ。

地球人はそれを知らないばかりに、他の惑星に遅れをとっている」

「ホーレン王子は、地球のことなど考えていない！」

「宇宙の平安に関わらなければ、気にすることはない」

「しかし議長！」

「九条君！

自分で言っていただろう。

宇宙の中立を保て」

議長は出て行った。

「よく頑張りましたよ、九条さん」

ビシャが、涼しい顔を向ける。

「あなたさえいなければ、我々が地球を侵略するつもりでしたからね」
「まぁそれか、メモルゼにぶっ潰されてるかもな」
にたつきながら、ハンも会場を立ち去った。

すまん、結城ザク郎。
俺は無力だった。

法の番人でありながら、お前を救えないばかりか、地球の危機さえも止められなかった。
俺はどうすればいい……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ー地球　危険星人種隔離獄連ー
パクられた。
完全にパクられた。しかも死刑囚。そしてここは絶対逃げられない、危険度Sクラス以上の宇宙人専門のブタ箱です。どうすりゃいいんだ。
確かに俺は学校を破壊した。でもそっから先は何も覚えてない。気がついたらしょっ引かれてて、ここにいた。
俺、死刑になるようなことしたっけ？
あの火災で死者は出なかったはずだけどな……。
まぁ、今はとりあえず、逃げる方法を考えてみますか。
作戦としては、ちょびっとの間体が動く死刑執行直前の脱出くらいしかない。それにしたって、武器もブーツも没収されてるから、可能性はほぼ0だ。
はぁ、いつなんだ？殺されるのは。
死を覚悟するのはいいが、焦らされるのは気分が悪い。俺にそういう趣味はない。
「おーい、おまわりさん」
俺は独房の側にもたれている看守を呼んだ。
「なんだ？」

スマホから目も離さずに答えてくる。とても死刑囚に対する態度じゃねぇw
「俺の死刑いつ？」
「知らん」
「ねぇ、教えてくださいよ」
「俺が知ってるわけないだろう。ただの牢番だぞ」
「暇だから九条さん呼んできてよ」
「あの方は連合会議でデビルーク星に行っている」
「じゃああんたでいいから、なんか遊びましょうよ～」
「じゃまするな！
俺は今だいじな、だいっじな瞬間を……」
そこまで言って、ふいに看守の顔に満面の笑みが浮かんだ。

「ふわあああああっ!!!
Ｈｏｌｌｙちゃんだあーーーっ！」

陰気な牢獄に、看守の気色悪い絶叫がこだまする。
Ｈｏｌｌｙってのは、今地球、つか日本で一番人気のあるアイドル歌手です。

ん、
ほりぃ？

ホリー!!アッシュの友達か!?

思い出して、俺はつい顔が熱くなった。
いや、あの子も、アッシュに負けないくらい（他人に言わせれば勝負にならんらしいが）かわいいんだが、そんな子が俺に抱きついて「いつか私、ママみたいなアイドルになって、ざっくんを振り向かせる！」って言ってきたことがあってな……
いやまさか、本当にアイドルになったとは。

でも、今の俺のこと知ってるんだろうか。
思わず物思いにふけっていると、看守のスマホから　懐かしい声が聞こえた。
『こんにちわーーっ。みんな、Ｈｏｌｌｙだよ。聞こえてるーーっ？』
看守が拳を握りしめる。
「うんっ！聞こえてるよ、ぜーんっぶっっ、
聞こえてるよおーーっ!!」
「うるせえええーっ！最期の時くらい静かにさせやがれっ！」
他の死刑囚にキレられる看守。当たり前だ。どんな看守なんだこいつは。
『今もどこかで、な……なんの罪もない人がっ、殺されそうになっています。
でもわたしは、その人のためにも、ぐすん、歌いますっ！』
「そっ、それ俺だっ！おい看守、ファンなんだろ!?ホリーのために俺を出してくれ！」
檻の隙間から顔を出して叫ぶ。
「うんっ！頑張れ、ホリーちゃん！」
「聞けやこらーー!!」
囚人の声などまったく耳に入らない様子で、看守はディスプレイに向かって唾をとばしていた。
看守のスマホからは、依然としてホリーの可愛らしい声が聞こえている。
『そして、なんと今日はっ、
わたしのお友達も来ていまーす（チッ）』
（今、舌打ちしたよね？）
心なしか、ホリーの声色が低くなった気がした。あの娘、ちょっと

怖いとこがあったんですよね。

ところで、
お友達？ホリーの？

アイドル仲間かなんかか……。

不思議に思う俺の耳に、こんな声が飛び込んできた。
『みなさん、こんにちは。
Ａｓｈ！デース』

痛ｗ
この娘は……多分売れないな。
そんなことを思っていた。

『今は、まぁこんな風にマスクで顔隠してますけど。
もうすぐ外しまーす』

……なぬ？

『だから、それまでに……、早く、出てきて下さい』

……

「うんうん、ふぅーんん、ホリーちゃんのお友達かぁ。
わかるよ！ちょっと緊張してるけど、声もきれいだし、お顔もちょ～～かわいいんだろなぁー！
僕きっと死んじゃうよ!!」
「その通りだ、看守。よく聞け、今すぐ俺を解放しろ。取り返しのつかんことになる」

俺は身を乗り出して真剣に訴えた。久しぶりに背筋がひやりとする。
アッシュめ、本当に無茶をなさる。
「うるさいな！さっきから。だいたい俺にそんな権限あるわけないだろ。
そんなことよりさ、最期くらい、お前も一緒にホリーちゃんたち見て癒されようぜ。ほら」
無神経過ぎる看守が、俺にスマホの画面を見せてきた。
ああ、久しぶりぶりだな、ホリー。ちょっと、いやかなりめんどくさい奴だったけど、なんか憎めなかったのも確かだ。
輝いてんなぁ……
そして、そのとなりには、
マスクをしたアッシュがいる。
アッシュ……
まさか、俺を釈放させるためにこんなことを？
いや、いずれにしてもデビルークはそんなに甘くない。仮にアッシュが顔を晒して地球を脅そうが、地球の犠牲など構わずに、確実に俺を処刑させるだろう。
俺が死んだら、アッシュはどうされるんだろか。
地球にも、デビルークにも居場所を失う。生きる場所を求めて、冷たい宇宙を彷徨うのか、あるいは戦うのか、たった1人で……まぁ、アーサーはいるけど。
いつからか、アッシュの隣に俺がいないことが、不自然に思えるようになった。
何でだろう。
畜生、
急に、死ぬのが怖くなってきやがった。
なぁ、ゴウカ。

お前がいなくなってから、俺は、自分のことなんかどうでもよくなったよ。
生きていようが、死んでいようが。
お前がいない世界なんて、なんの価値もなかったから。

それなのに、
今は……
あの鬱陶しい王宮で、
見ず知らずの俺を引き取って、美味い飯を作ってくれた、人間のお袋と、
アホで、わがままで、気分屋で、
でも実は、めっちゃ優しくて、
めちゃくちゃかわいい、あのお姫さまと一緒に暮らした、
あの日常が、
ずっと続いて欲しい、と……

『ずっと、一緒だよ。
ザック』

「な、なんだ、これは!?
俺の拳銃が、勝手にぃッ!!?」
看守の叫びが聞こえる。今までと全く違う、
恐怖。

あ、れ……
「いやだ！結城ザク郎、助けてくれ!!」
意識、が……。
「あ、Ａｓｈちゃんの顔を、この目で見るまでは……」
ア、アッシュを、この手で助け出すまでは……

死んで、

た、ま、る、か、

バン!!!

……

……

……

ここは……

また夢か？

誰もいない。岩だらけの、地球じゃないどこかの惑星。

ドン！ドン！

遠くで、小さな隕石が降り注いでいる。

いや、

違うな、あれは……

殺し合いだ。

距離をつめて、岩山に体を隠す。

ザンッ！ガンッ！

カン！ドシッ！ドゥッ！

誰かまではわからないが、見える。一撃一撃が、星を破壊できるほどの斬撃。それらを一発一発、高速で消し潰す銃撃。

すげぇガンテクニックだ。あんな風に撃ちてぇ。

だがそれより、気がかりなことがある。

殺し合い、なのか？

銃を撃ってる方からは、ほとんど殺気を感じない。

両者の動きが止まる。

（やっべ、見つかったか!?）

『…なぜオレを狙う』

ガンマンの奴が口を開いた。

『オレたちが戦う理由は　もうないはずだ』

……なんだろう、この声。

知ってる。

『お前を〝兵器〟として仕立てあげた組織はオレが潰した』

なんだか、すごく懐かしい。

子どもの時に聞いたような……。

『好きに生きろ…と?』

もう1人が、声を発した。女……まだ子どもの、女の子の声だ。

『戦い以外の生き方なんか』

この声……ゴウカか!?

『私にはわからないのに?』

いや違う。

あれは……

ゴウカのお袋、

ヤミさんだ!

じゃあもう1人の男は、

いったい、、

駆け出した瞬間、地面が崩れる。

ぞぷん……

暗い、銀色の液体が、海のように自分を取り囲んで、体を砕いていく。

ぐあっ、苦し……
……
また景色が変わった。
今度は、血の匂い。
「なんだぁ!?このガキゃあ」
筋肉質な異星人が、俺に大砲を向ける。
「雑魚は消えな!」
ドゥッ
俺は迫り来る砲弾を飛び避け、
ドカッ
そいつを蹴り倒した。
「……なんだ、貴様は」
俺の背後で、無数の異星人たちが一斉に刃を向け始める。
「この新参者に教えてやれ」
眼を見ればわかる。こいつら全員殺し屋だ。
「惑星キルドは、甘くねぇってなぁ」
俺は何故か、ちゃんとジェットブーツを履いていた。
「死ねぇッ!」
ギャギャギャギャギャギャギャーーン
ギャーーーンンン!!!
そして何処からか、ギターの音色が響き始めた!?
「うりゃぁあーーっ!!」

ギュィイーーン！

ドゴォッ

ＢＧＭに合わせて、敵を蹴り飛ばす。肘で刃を弾き、掌底で鎧を叩き割る。バッタバッタ倒れやがって、甘いのはどっちだ！殺意のない俺に負けてるようじゃ、底が知れる。

キュキュキュキューーン

「この程度か？惑星キルドォッ!?」

ズズゥン……

調子づく俺の前に、突如として現れた、巨大な、光の刃。

「なんだ、ありゃ」

あんなもんで斬ったら、この星ごと……

（・思い出したぞ、あれはっ……）

「ヤミさん、やめろーーっ!!」

俺は夢中で止めに走った。

だが、過去は変えられない。

キィーーン！

ヤミ、いや「ダークネス」の右手が、俺の脳天めがけて振り下ろされる。

『プラネットスライサー』

「くっそおぉっ!!」

ドゴォッ
ギャアアーーーンンン……
……
……
……
やっと目が覚める。
俺の頭上には、エレキギターが乗っかっていた。
「いい夢見れましたかぁ？ザク郎先輩」
「……久しぶりだな、タナ。
　お前が俺の処刑人ってわけか」
「そうっすよ」
目の前の顔見知りが答える。
「……わざわざご苦労だな」
「……ふふ」
俺に跨ったまま、そいつはギターを背負った。フードで顔は見えないが、殺気がピリピリと伝わってくる。
黒咲　汰奈。
西連寺たちと同じ、親父の実の息子。でも継承戦争には参加せずに、デビルーク情報局の局長として影でデビルークを操っている。宇宙一凶悪なスパイ。
そして……
俺の忘れられない人の、弟でもある。
もちろん異星人だ。
「つーか、別に地球の警察に任せてもいいけど、それだと僕の怒りがおさまらないって感じ、かな？
あ、でもその前にこれ」
タナが腰まで垂らした真っ赤な三つ編みを揺らし、俺に何かを突きつけてくる。
受け取ると、それはかわいらしく包装された小包だった。
……手紙が貼ってある。俺はその手紙に目を通した。
「えっと……、

『ザックへ。ここにはザックの大好きな鉄砲が入っています。私がこっそり預かっていました。本当は渡したくないです（＞＿＜）だって、こんなアブないもの振り回して、ザックがおかしくなるのは嫌だから……。

でも、もし、本当に身の危険が迫った時は、これを使って下さい。そして生きて帰って来て！その時は、これがあなたを守る武器になることを信じています。アッシュ』

「気の利いたお姫様っすね。アシュラちゃんは」

俺の大好きな……銃。

ハーディスのことだろうか。

運び屋時代に使っていた、愛用の銃。

遂に、俺の手元に戻ってきた……。

（ありがとうございます、アッシュ！）

「よし、これで脱獄できる！」

「待ちなよ、先輩」

そう言って、タナは俺から離れた。

「……使うのは、僕だ」

俺宛の小包を掴み、タナが俺を押さえつける。

「忘れたとは言わせないよ、先輩。

先輩がこの銃を持っていた時、俺の姉貴が、どれだけ君を愛していたか……」

「タナ、離れろ」

「それなのに君はあの日、宇宙の平安を選んだ。姉貴を棄ててな！」

「タナ、違う。俺はあいつを棄ててなんかない。もう、あいつに何も傷つけて欲しくなかったんだ」

ギチィッ

タナの指が、俺の首を絞めつける。

「……クロウ・キリサキ。お前も運び屋だったじゃねぇかよ。そんな生温い嘘で姉貴を裏切ったのか、ええ!?」

「……本心だ、タナ。どんな奴でも、変われるチャンスが」
「ねぇよ！いま夢で見てきただろ！俺たちは、親の代から兵器なんだぞ！俺も、姉貴も、マスターも、皆んな同じだ！半分くらい人間の血が混じったところで変わりはしねぇ。死ぬまで屑なんだよ。一生な」
……
やっぱり、アイツと似たようなこと言いやがる。
「……先輩、どうしてあの時、姉さんと一緒に燃えてくれなかったんですか？」
……
「恋人より、パートナーより、地球の方が大事なんですか？」
……
「……まぁいいや。ここでこんな話してても仕方ない。
先輩、
今回は、あんたを逃しに来たんですよ」
「……え？」
今までの怒りは何処へやら、タナは急にいつも通りの、艶かしい声に戻った。
フードを外し、あどけない顔を俺の耳元に近づけてくる。
「ちょっ、離れろ」
「メモルゼ軍が来ます」
なに？
タナはそれだけ言うと、俺の小包を破り始めた。
「でも、助けてあげるには条件があるよ」
男のくせに、短いパンツを履いた脚で、俺の体を固定する。
「本当なら、先輩の目の前でアシュラちゃんを犯してやってもいいんだけど……ねぇ、先輩」
小包から取り出された銃口が、俺のこめかみに当てられた。
「どうしても姉さんと結婚出来ないなら……あんなメスガキじゃなくて、僕を貰って下さいよ」
男とは思えない華奢な腕を、俺の首に回し始める。
「僕、ずっと尊敬してたんすよ、先輩のこと……」

ヤバい。こいつは顔とか体格とか、ぶっちゃけただの美少女にしか見えない。
それでも俺は男とは……。
「は、離れろ、タナ」
「ふふ、ここで僕を抱くか、それとも地球ごと滅ぼされるか……。迷うわけないっすよね、素敵！」
タナの顔に、母親譲りの狂気的な笑みが浮かんだ。

だが……
だがそんなことより、気になることがある。

それハーディスじゃなくね？

「……タナ、嫌な予感がする。撃とうとしてるだろ？」
「うん、足くらいなら死なないでしょ？」
「頼む、それを撃つな。それだけはやめてくれ」
「だーーめ」
「やめろおぉーーっ！」
俺の抵抗も虚しく、引き金に手がかかった。

バチチッ！
「……」
……

「ちっ、何だよそれ。つまんないの」
興ざめしたように、タナが立ち上がる。
「仕方ない。今回はみのがしてあげるよ、先輩。
「お友達ごっこ」の相手に報告しなきゃならないし、
「女」には興味ないっすから」
じゃぁねーー。

そう言い、タナは姿を消した。
俺はタナが捨てていった銃をひろった。

うん、見れば見るほどハーディスじゃない。デビルークのマークがついてるし、第一ハーディスは光線銃じゃない。
そう、こ、これは……

どう見ても、ころころダンジョくんです。

ころころダンジョくん

名前の雰囲気でわかったかもしれませんが、アッシュのお袋、ララ様のメカです。
これで撃たれると、強制的に性別が変わります。

これを大好きだった覚えがねぇ!!アッシュ、何考えてんだ!?
いやでも、これに助けられたのは確かだ。

ん?
足元に、血が流れてる……

「看守!!」

俺は檻の前に倒れている看守に駆け寄った。
「看守、おい、しっかりしろ!」
いや、駄目だ。
自分で頭を撃ち抜いている。タナに操られたんだ。
……地球人の死体を見るのは、これが初めてだな。
畜生、ちょっと面白い奴だったのに。
「……あの野郎……」
なぜか怒りが込み上げてくる。ちょっとの付き合いだが、大事な友

人を失った気がした。
（でも、とりあえずどかさねぇとな）
看守の死体を抱える。
「重てぇっ!?」
看守を持ち上げた俺は、腕力が落ちているのと、声が甲高くなってることに気付いた。
あーそうだ、
今、
俺は女体化してるんだったw

仕方ねぇ。
こうなったら、このまま脱獄してやるぜ。

俺は看守の服を着て、破られた牢屋を後にした。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第12話「爆熱少女リターンズ　Ⅲ」

ーメモルゼ星　陸軍基地ー

「その陣形だ！貴様たちが、その包囲を維持する中で……、
　この僕が、男らしく登場ッ……」
　ギャーンギャッギャッギャッギャギャギャーーンン……
「誰だ！訓練中にギターを弾いている奴は」
「初めまして、ホーレン先輩」
「お、お前はデビルークの……」
「地球に戦争仕掛けるんすか？」
「戦争をするつもりはない。アシュラちゃんの脅威となる地球人を一部排除するだけだ」
「なるほど、奇襲か……。でもホーレン先輩、
　結城ザク郎、逃げちゃったみたい」
「な……何ぃ!?」
「どうします？奇襲程度の兵力じゃ、みんなが人間と戦ってる間に、アシュラ先輩、ザク郎にとられちゃいますよ」
「そ、そんな、そんなことになったら……」
「数週間ぶりの再会っすから、
　盛り上がるでしょうねぇーっ!!」
　ギャーン!!
「ギターを鳴らすなぁ!!」
「あっはは！おもしれー、素敵っ」
「……ぐすん」
「ホーレン先輩」
「……」
「漢、見せたいんでしょ？」
「……アシュラちゃん、僕はこんなにも君を愛しているのに……」
「だったら潰して奪い取るのみっすよ。
　地球ごとね」
「……許さんぞ結城、許さんぞ地球人ッ……！」

「どうします？」
「……よし、貴様たち、

戦争だぁッ!!」

（こいつ、単純っすね～）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーキラキラ芸能　事務所ー

どうも、ザックです。
あの後、ララ様の発明品で女体化した俺は奇跡的に脱獄に成功しました。
今は「夕崎ザラ」という偽名を使って、とりあえずアッシュたちのいるキラキラ芸能のオフィスビルに潜入しています。
少なくとも、アッシュがステージに上がることだけは何としても阻止しなければならない。
「それでザラちゃん、いつアイドルになろうと思ったの？」
事務所のスタッフが目を輝かせて聞いてくる。俺は今、アイドル志望の女子高生という設定です。
「はい、えーっと、昨日のＴＶで、大人気のＨｏｌｌｙさんとＡｓｈさんを見て、こりゃ私も何とかしなきゃな～、って思いました」
「へー、何とかって？」
「はい、ひと暴れしようと思って！」
「ははは！元気だな～。まぁザラちゃんは可愛いから、すぐにあの２人とステージ立てるよ！」
「ありがとうございます！
あ、私あの部屋入ってみたい」
「今は駄目だよザラちゃん、今は社長がお話し中っ………
てえええハイキッｋ」
ドガァッ
俺はスタッフの顎にハイキックを叩き込んだ。

「悪いな」
目を回して伸びているスタッフを横目に、「応接室」と書かれたドアに近づく。
俺はあえて、応接室の隣の部屋のドアノブに手をかけた。
ジュゥッ
ノブの内側を燃やし、ロックを溶かす。
部屋に入るなり、なんと2つのベッドが目に飛び込んできた。その隣には、
シ、シャワー室だとぉ!?
まるで……ホテルです。
地球の芸能界には「枕営業」なる文化があるってきいてたが、噂は本当だったのか。
（アッシュとホリー、まだ何もされてないだろうな……）
『それで、Ａｓｈちゃんと Ｈｏｌｌｙちゃんは用意できたのかヘア～？』
（ん？）
隣の応接室から、男の話し声が聞こえる。
ジュウッ
俺は監視カメラを溶かし、ドアに耳を当てた。二、三人いるみたいだ。
『はい、若頭殿。まだ誰も手を付けておりません』
『よしよし、優秀ヘア』
『それで若頭殿、明日のことなのだが、うちのＡｓｈの顔出しはもう少し待って頂きたい』
『それはどういうことかヘア～？約束が違うヘア』
カチャ……
鉄で出来た何かが、机に置かれる音がした。
緊迫した空気が、壁を抜けて伝わる。
『そ、それはまだ、今はＨＯＬＬＹをメインに推していきたいというのも当社としてはありますし、それに』

『それに？』
『ＡＳＨの顔を出してしまうと……混乱が起きます』
『ボスはそれをお望みヘア』
（ボスだと？）
ヤクザの組長か何かか？
『社長さん、うちの組はソルゲムさんと長～い付き合いヘア。おたくよりもヘア』
『ソルゲム』
その組織の名を聞いた瞬間、背筋に緊張が走った。
絶対に許さねぇ。俺や、あいつの心をズタズタにした組織。
命に代えてでも潰す。そう誓った唯一の敵だ。
……ってことはこの声は……。
あいつか？
『いいか、ソルゲムさんは、このデビルークが統一した銀河を壊したい思とる。そのために、ぜひデビルークの姫さんの力「チャームの能力」を利用したいゆうわけヘア。
ええか、Ｈｏｌｌｙはおまけや、Ａｓｈをメインにせえ。祭は早い方がいいヘア』
『しかし、チャームの能力はあまりに危険な』
バン!!
唐突に、強く机が叩かれる音が響く。
『誰のおかげで、ここまで儲けさせてもろとる思うヘアアッ!?』
『はぁっ、す、すみません！』
地球人の震え声。
『おたくらに宇宙人の可愛い娘ようけ仕込んだった、ソルゲムさんの恩を忘れんなヘアアッ！』

『は、はい……』
『もし、言うこと聞けへんゆうんやったら……』
『……』
『この事務所のアイドル、全員アフロヘアーにしてやるヘアーーァッ！』
『いやあああーーっ！』
『一生治らんヘアーーッ』
『倒産ーッ!!』
ひでぇｗｗｗ
『とにかく、チャームの能力なんか大したことないゆう事をワシが証明したるから、さっさと二人を呼んでくるヘア』
『い、いくらなんでもそれは』
カチャ
『か、かしこまりました。すぐお呼びいたします』
『シャワー浴びて待ってるヘア～』

会話が終わった。

ドス　ドス
（！）
男が部屋に入って来る。
バチチッ！
俺はベッドの下に隠れ、ダンジョくんでザク郎に戻った。
ガチャ
ドアが開き、大男が入ってきた。
ベッドの下から、顔を確認する。
（やっぱりな）
部屋に入ってきたおっさんは、俺の知ってる奴だった。

モジャック将軍
……昔、マジカルキョーコっていう正義の魔法少女と戦った敵で

す。特徴はアフロ。特技は他人をアフロヘアーにすること。
ザーッ
ガチャ
シャワーを浴びたモジャックが、ベッドに近づく。
「さあ！3Pでイかせまくったるヘアーー！」
「逝くのはてめぇだ、モジャック将軍」
俺はベッドから飛び出し、バスローブ着たおっさんの背中に花瓶を押し付けた。
「ウザースが潰れて、ソルゲムのパシリになったとは聞いてたが、まさか日本のヤクザにまぎれ込んでいたとはな」
「お、お前はクロウ・キリサキ!?パクられてたんと……」
「俺の能力は知ってるな、モジャック」
俺の握る花瓶が、炎を宿し、赤く輝く。
「フン！お前の炎なんか、この消化器で消したる！」
「笑えるぜ。そりゃ番組の設定か？」
「な……」
「燃えろ。この変態が」
ボウンン!!
「ギャアーーーッ！」
モジャックは黒焦げになり、壁までぶっ飛んだ。
「テメェの奥さんと子どもを地球に逃がしてやった、俺の恩を忘れたか？」
床に伸びたおっさんに近づく。
「わ、悪かったヘア。何でもするから、命だけは勘弁ヘア」
そう言って、モジャックは俺に片手を突き出した。
（……チッ）
……まぁこいつもどうしようもない奴だが、屑じゃない。ソルゲムの一員といったって、ただの小間使いだ。おっさんなら性欲に負ける

こともあるだろう。今回は未遂だったしな……。
しゃあねぇ、許してやるか。

「よし、よく聞け」
「な、何だヘア？」
俺は許してやる代わりに、こいつを利用することにした。
「お前が今話してたイベントの日な。
メモルゼ軍が攻めてくる」
「メモルゼ!?な、何でヘア？」
あ、こいつももちろん宇宙人です。
「俺が脱獄したのが知られたらしい。ホーレン王子はアッシュとの結婚と、俺の首を狙ってる。この機会に地球ごと潰しにくる気だ。良くて占領、悪けりゃ殲滅か」
「それで、どうするつもりヘア？」
「迎え撃つには兵隊がいる。
あんたヤクザの幹部なんだろ？組の連中を貸してくれ」
「そ、そんなもの……
お前だけで戦えばいいヘア！お前が原因ヘア!!」
「残念だが、俺も命が惜しくてな。
正面からは戦わねぇ」
「絶対見つかるヘア！」
「絶対見つからねぇよ」

俺は腰からころころダンジョくんを引き抜き、

バチィッ!!

自分のこめかみに、ダンジョくんをぶっ放した。

シュウウウ……
「……お前……キョー、コ？」

女の俺の姿に、モジャックが慄く。俺はビビリまくるおっさんを睨んだ。

「それにもし、地球が無くなったら、
ヤバい奴が来る。お前もわかるだろ」
「ヤ、ヤバい奴……？」
「……金色業火」
その名を聞いた途端、モジャックは我に帰り、首を振った。

「早く行け。それとも、俺と寝るか？若頭」
「え、遠慮しとくヘア」
「二度と従業員に手出すんじゃねぇぞ」
ガタン
モジャックは出て行った。
……
（ヤクザと手を組むなんてな）
俺も外道になったもんだ。
いや、昔に戻ったのかな。
……
（兵器は、変わらない、か）

トントン
「はぁい」
ノックに、反射的に返事をしてしまう。
バァン!!
ドアが開くなり、ピンクと黄緑の頭が……
「ベトベトランチャーくん!!」
「痴漢撃退爆弾!!」
ドガァン!!
「ぐわぁっ」

アッシュとホリーの攻撃に、俺は爆煙と共にふっとばされた。
「来いよアフロ、ぶっ殺してやる!!」
「私の体は、ザッくんだけのものなんだからぁっ！」
なんか心配して損したよ。
いや、そんな場合じゃない。いくら女の姿とはいえ見つかったら面倒だ。特にアッシュには気付かれる可能性が非常に高いッ！
窓から逃げよう！
（おりゃあっ！）
ダダッ
煙の中、覚悟を決めて窓へ突っ走る。その時、窓際に立て掛けられた箒（ほうき）を見つけた。
（これだっ）
箒をひっ掴み、窓を飛び降り様に箒へ跨る。
ボシュウッ！
箒の掃く部分から炎を出し、俺はその推進力で空を飛び上がった。
彩南の上空から、アーサーの住んでるアパートを探す。
「あったあった」
俺はアーサーの部屋に向けて下降した。
……何か話し声が聞こえる。
「天条院、お前はもう本当にデビルークとは関係ないんだな」
「はい、九条殿。私はアシュラ様をお護りするため、ザク郎殿と共に戦います」
「……わかった」
「九条先輩？」
俺はアーサーの部屋に窓から飛び込んだ。
「ザク郎殿、玄関からお入り下さい！」
「お前が言うか！」

「結城……なるほど、そうやって脱獄して来たわけか」
女の俺を見ながら、九条先輩が立ち上がる。
「ヤクザと共闘するらしいな」
「……ああ」
「結城ザク郎。お前は、霧崎玄凰と呼ばれるのを嫌っていたが、今のお前は……」
「ええ、わかってます」
九条先輩が、口から煙草を離し、火を揉み消す。
「お前にも事情があるだろうが、俺は警察だ。反社会勢力と組んだ以上、お前には一切協力出来ない
これが最後だ」
ダン！
そう言って、机に資料を叩きつけた。あれは、メモルゼ軍の戦力データか！
「……すいませんッ」
九条先輩の背中に頭を下げる。無意味なことだが、それでも謝らずにはいられなかった。
「死ぬんじゃねぇぞ」
そう言い残し、九条先輩は、窓から出て行った。

「……だから玄関から出て行けｔ」
「アーサー」
「はい！」
「地球守るぞ」
「わかっております」
「クロウ・キリサキ！
兵隊連れてきたヘア～！」
モジャックと共に、窓から大量のヤクザなだれ込んできた！
「ああっ、わ、私の、私の描きかけの原稿がぁっ！」
アーサーがデスクから溢れた原稿をかき集める。
そうか、こいつは漫画家目指してたんだっけ。

（どんな漫画描いてんだろ）
俺は床に散らばった原稿から1枚を拾い、ひっくり返した。

……
女になった俺が、５人くらいのおっさんに犯されてる。

「ザク郎殿。「金色業火」の存在を配慮して、穏便に済ませるとのことでしたが、これはもう無理ではありませんか」
俺にエロ漫画を見られたとも知らず、アーサーが真剣な表情で聞いてきた。こいつ……後でぶん殴ってやるからな。
「……ちゃっちゃと終わらせるしかねぇ」
俺はそう言って、アーサーのデスクからエロ漫画を一掃し、九条先輩が置いてった敵の戦力データを叩きつけた。

●侵略軍
兵力　メモルゼ兵　約４０００人
戦艦　1隻
突入艦　２隻
・戦闘艇　８隻
・攻撃艇　６隻
・輸送艇　１２隻
・上陸艇　２隻
・戦車　４両
・自走砲　６両
・装甲車　１６両
・運搬車　４０両
「こちらが、現在地球に侵攻している戦力です」
「なるほど、こんなもんか」
「宇宙空間で待機する戦艦には２０００人が乗りますので、実際に地球に侵略してくるのは半数ほどでしょう」
「そのうち歩兵が、輸送艇から降ってくる１００人、上陸艇からあがっ

てくる４００人くらい、後はみんな乗り物に乗ってると」
「その通りです」
　アーサーが分かりやすく説明する。さすが元親衛隊隊長。俺も運び屋だったから、兵器にはちょっと詳しい。
「その宇宙の乗り物について詳しく教えてくれますかい、お二方」
　ヤクザの１人が質問する。
「この突入艦というのは、大気圏に突入出来る船という意味です。今回侵略軍はこの二隻に乗ってきます。ここから、以下の小さな乗り物が飛び出して、本格的に日本国土を進攻するわけです」
「艇ってのはまぁ、ヘリコプター見たいなもんだ」
「装備について、地球と同じレベルで考えないことです」
　ヤクザたちがざわつき始める。
「こ、これはわしらにはどうにもならんやろ」
「自衛隊は動かんのか!?」
「動かないよ」
　ヤクザの中で、１人、白衣を着た奴が答えた。
「このメモルゼ軍の侵攻は、日本の首相が同意しているからね。下手すりゃ、叩かれるのは俺たちだ」
　へぇ、そりゃ知らなかったな。
　やけに裏側の事情に詳しい。あいつ何者だ？
「そ、それで、お前はなんでそんなに余裕でいられるヘア？」
　モジャック将軍が不安げな表情を浮かべる。
「……勝算があるんだよ」
　俺はガキの頃ゴウカにもらった、続・銀河珍種大図鑑を見ながら言った。
「モジャック将軍、とりあえず、こっちの戦力も見せてくれ」

○地球連合（仮）
兵力　・三代目ウザース会（東京支部）構成員　約４００名
　　・ゴクショー・プリューマ（ロシア）、
　　ガチ・ムーチョ・カルテル（メキシコ）　計１

００名
装備　・攻撃ヘリ　数機
・対空砲　数十門
・防弾車両　数十台
・各種銃火器　多数
「て、適当ですね……」
「人員もうちょっとよこせねぇのか」
「これが限界ヘア。これ以上はボスが怖いヘア」
「ソルゲムの協力は……」
「ある。でも戦闘には参加しないヘア。かわりに……彼を派遣してくれたヘア」
さっきの白衣の奴が立ち、頭を下げる。

……やっぱり、ソルゲムの奴か。
それもモジャックなんか比じゃない、相当上の幹部だろう。眼を見りゃわかる。人間の眼じゃねぇ。

俺は再び、地球側の、データとも言えないずさんな資料に目を落とした。
「……しかたねぇ、これでいくか」
２０００対５００、ってことは、だいたい　１人で４人倒せばいいわけだな。
「ザク郎殿、先程の勝算というのは」
「ああ、みんな聞いてくれ。
メモルゼ星人の特徴を知ってるな」
「男女変換能力や」
「そうだ。そして何と地球では、奴らは自分のくしゃみで入れ替わっちまう。本人の意思とは関係なしにな。俺の知り合いもその母親もそうだったから、間違いねぇ」
「……それがどうしたヘア？」
「これは王宮の歴史の先生から聞いたんだが……

メモルゼ軍は、宗教上の理由で、女性が戦っちゃいけないらしい」
「なに！本当かヘア？」
「確かに、聞いたことがあります」
「メモルゼ星人は、成人前の第三次成長を経て、男女が分離する」
「ほうほう」
「だがメモルゼ星には、成人前の兵役がある。敵の大将、ホーレン王子も、軍に入隊した時はまだ男女分離していなかった。
つまり……
侵略軍は全員男だが、まだ分離前の奴が少なくないはず」
「なるほど、それなら」
「コショウかなんかぶっかけて、無理やりくしゃみさせれば、奴らは女になる」
「そうなると奴らは戦えないのか！」
「戦意が相当下がるな」
「それだけで敵の兵力を削れるヘア」
「それが出来れば、全然違うぞ」
「では、すでに分離している兵については……」
「これがあるじゃねぇか」
俺はアーサーに、ころころダンジョくんをチラつかせた。
「こいつで強制的に女体化させてやればいい」

「それは名案だね」
不意に、白衣の奴が口を開く。
「分離済みの兵士は女体化して士気を落とす。それに……
その銃で撃たれた相手が、仮にまだ分離前であった場合」
「分離前であった場合……？」

「対象は　崩　壊　する」

残忍な笑みとともに、白衣が言い放った。
「分離直後のメモルゼ星人にとっては、ただでさえ精神的にも不安定

な時期だ。今まですぐ隣にいた人格がなくなるんだからね。
そんな状態で、外部から勝手に性を操られて、制御不能に陥るストレスは……わかるだろう？」

その場にいるいかつい野郎共全員が、この白衣に気圧されている。
「その銃が沢山あれば、君たちなら1人の犠牲も出さずに勝利出来るかもしれない。
ねえ結城君、その銃をサンプルとして、俺たち「ソルゲム」に貸してくれないか。そうしてくれれば、明日の朝までに５００丁製造するよ」
……
「そ、それはいいヘア、クロウ・キリサキ。それを彼に渡すヘア」
俺は白衣の、眼鏡の不敵な眼を睨んだ。
「いや、それについては、ちょっと後で話す……。まずこれは、銃じゃねえ。アッシュが作ったおもちゃだからな。俺がどうこう出来るもんじゃねえ」
「……ザク郎殿？」
急に態度が変わった俺に、アーサーがそっと声をかける。
「……とにかく、侵略軍はこれでなんとかなる。ホーレン王子はまだ新米だ。予想外に苦戦させられれば、それだけで気を削げるだろう。向こうから撤退してくれるなら、それに越したことはないからな」
俺の発言に、白衣の眼が鈍く光った。
「それより、一番怖いのは……

デビルークの援軍だ」
「ないとも限りませんからね。ザク郎殿の脱獄をホーレン王子に密告したのも、おそらく」
「タナだ」
アーサーの言葉に答える。黒咲汰奈、あいつだけはマジで何考えてるのかわからん。

「アーサー。勿論お前にも戦ってもらうが、その前にやってほしいことがある。
　これがホーレン王子の勝手な侵略行為であることを、なんとかして日本の首相に納得させてくれ。万一の時は、自衛隊が出動出来るようにな」
「わかりました。やってみます」
　……まとめるか。
「まず、アッシュが彩南ステージに現れるのは午前１０：００。どのタイミングで顔を出すのかは知らないが、メモルゼ軍はこの時間に現れる」
「言い切れるのかヘア？」
「絶対だ。あいつ……ホーレンは昔から、アッシュに「男らしい」ところを見せたいっつー単純な思考だけで動いてるからな。アッシュの目の前で観客を殲滅しなきゃ、あいつにとって意味ないんだよ」
「それまでに、アッシュの顔はなんとしても隠さないかんな」
「動画にあげられれば終わりますからね」
「そうだ。観客やステージが混乱してる間に、俺がステージに潜入してアッシュを保護する。
　そしたら、後はドンパチやるだけだ」
「周囲のビルやタワーに狙撃兵を配置しましょう。狙撃が出来る者は？」
「ロシア人は全員スナイパーヘア」
「では、彼らにそう伝えて頂きたい」
「装甲車は至近から運転席を狙うしかねぇ。ドライブバイの腕を磨いとけ」
「了解ヘア」
「とりあえずこれで作戦会議は終わりだ。演習なんてしようがないからな。明日、ぶっつけ本番で行く。よろしく、暴れましょう」
　オォッ!!
　箒をひっ掴み、ドアに向かう。
「クロウ・キリサキ。わしらの組に入らんかヘア？」

「……人身売買やめたら考えてやるよ。クソ野郎」
俺はアーサーの部屋を後にした。

箒で飛んで帰っても良かったんだが、なんか無性に階段を降りたくなって、俺は非常階段の踊り場に向かった。
「結城君」
振り返ると、さっきの白衣がいた。
「そのおもちゃ、ころころダンジョくんだっけ、渡してくれるかな」
「お断りだ」
俺は即答した。
「どうせこのコピーを、メモルゼ星の敵対勢力に売り捌くんだろ？」
「関係ないだろう？」
「お前、名前はなんだ」
「聞いたら後悔するよ」
「……何の後悔だ」

「この宇宙に生まれてきたことさ」

俺は殺気を込めて白衣を睨んだ。

「おい白衣、俺はな、今回、アッシュを助けるためにテメェらを利用してるだけだ。テメェらには一切協力しないし、テメェらが他で何をしようが、批難するつもりもない。俺だって屑だからな。
でもな、何の罪もない女の子をさらって、勝手に兵器にしやがったテメェらソルゲムを、俺は絶対に許さねぇ。蘇ったんなら何度でも潰してやる。
もう二度と、ゴウカみたいなガキは作らせねぇ」
「ククッ」
「何がおかしいッ!!!」
「何の罪もない、だって……」

怒り狂う俺の前で、白衣が眼鏡を外す。

そして、

「それは

俺も同じだ」

憎悪を込めた眼光を放った。

「もう二度と同胞を殺させない。

クロウ・キリサキ。

俺は、お前の親父を許さない」

白衣が翻る。

「その親父の息子もな」

俺は振り向きもせずに、階段を降りた。

「俺の名前を聞いてたな、クロウ」

俺の背中に、白衣の声が突き刺さる。

「俺は、ドクター・スメラギだ。

次に会った時、

お前を殺す」

――――――――――――――――――――

ガチャ

玄関の鍵を開け、自宅に入る。

シャワーを浴びてベッドに倒れ込んだ。

……そういや最近、ちゃんと飯作ってねぇな。

作るか?

いや、もう面倒くさい。寝よう。

さて、

明日は暴れるか。

…………

……

俺は、女の体のままオナッて寝た。

吐きそうになった。

to be continued

第13話「対メモルゼ防衛戦線」

ー西連寺宅ー

「はぁ……アシュラさん」

「思い悩んでいるようじゃな、季虎」

「うわぁっ！む、村雨師匠」

「念力は使いこなせるようになったか？」

「はい、少しずつではありますが」

「そうか。ならば明日、実戦で使ってみるといい」

「はぁ、師匠、明日ですか？」

「この惑星に危機が迫っておる。その発端は……宇宙の姫君じゃ」

（！アシュラさん……）

「お主の母親には、わしの娘も仲良くしてもらったからのぅ。お主が行くなら、わしも協力する。明日の朝、彩南町の中心部に行くのじゃ

いいか季虎。いかなることが起ころうとも、心を落ちつけ。念力を暴走させるようなことは」

ばうっ！

「ひぃっ！い、犬ぅ!!」

ピシッ

ドカーン！

「し、師匠、家を壊さないでぇーーっ！」

ー古手川宅ー

カリカリカリカリ……。

「昨日はアイドル活動で遅刻。一昨日は急用で早退。その前は居眠り。その前はジャージで登校……、

ったく、校則をなんだと思ってやがんだ。あいつ！ムカつくぜ。た、確かに俺のせいで、結城が逮捕されたのは悪かったが……、そ、それも、お前の顔がハレンチすぎるからだぞ！アッシュ、お前が悪いっ!!こんなに俺を悩ませやがって。だいたいあいつのせいで風紀が乱

れまくって、勉強にも集中できやしねぇ。この間なんか、アホの妻村と補習まで受けるはめになった。屈辱だ。こりゃ制裁が必要だな……。

『おい、アシュラ。お前のせいで試験に落ちたぞ』

『そ、そうなのかよ龍。じゃあ今日、私の家に来なよ。一緒に勉強しよう』

『え、い、いいのか』

『大丈夫。もうザックの奴も、家にいないしな……』

『……アシュラ？』

『なぁ、龍。私、寂しいよ』

『アシュラ……』

『今日だけじゃなくて……（上目遣いで）毎日、来てくれる？』

『アシュラっ!!』

『龍っ!!私、やっと気づいたぁっ！うわぁっ、はぁあっ！あっ！』

はぁああっ!!すあっ、はんん！あっ！ほぁあっああ！」

「まうまうーーっ!!」

「うわっ、エルメス！」

「まうー」

「どうした、ラーメンが不味かったのか？俺に何でも言っていいぞ」

まう！まうまう。

「メモルゼ星？インベーダー？どういう……」

まーう！まうまうっ。

「何！彩南に、別の婚約者候補が!?」

うまー。

「ア、アシュラが、連れ去られるのかよ……」

まうっ！

「くっそおおおっ！アシュラ！これは、べ、べつにお前のためじゃねぇぞ！クラスメートの危機を見逃すわけにはいかねぇからな、それだけなんだからな！ちくしょーー！」

ー翌日ー

天気は快晴。侵略軍にとっては最高の日和です。くそったれ。
午前９時３０分。俺は彩南ステージに徒歩で到着した。箒を担いで、殺気をみなぎらせながら町を歩く俺の姿は異様だっただろう。
でも、それも仕方がない。今日初めて、地球が戦場になる。
ザーーッ
無線が繋がる。
ガチャ
「……俺だ」
『ザク郎殿。あと一駅で国会議事堂に着きます』
「よし、自衛隊の要請頼んだぞアーサー。敵メモルゼの救援は間違いなく来る」
『お任せください。それでは、ご健闘を』
「ああ」
『……あ、あれぇ？ここ国家議事堂前じゃ……あ、路線間違えた。ここどこ』
ブツッ
ツー
……。
あいつ、大丈夫か？
ザーッ
ガチャ
『配置に着いたヘア』
『……了解』

おい！もうすぐ開演だぞ！
Ｈｏｌｌｙちゃーん！
いやそれより、ついにＡｓｈちゃんの顔が見れる！
あれ、なんか空が暗くなった？

客がざわつき始める。
すでに、敵艦は迫っているようだ。

俺は足早に舞台へ向かった。今は男の姿だ。
「みなさん！こんにちはーー。Ｈｏｌｌｙだよーっ！」
Ｈｏｌｌｙちゃーーん!!
ステージに姿を現したホリーの姿に、観客が沸き立つ。
「そしてぇーーっ（チッ！チッ！）
私のお友達、Ａｓｈちゃんでーーす」
新人を迎える、派手な演出が始まった。
うおーー！Ａｓｈちゃーーん！
早くベール外してぇーっ！
どけよてめぇ、見えねえだろっ！
結婚してくれーー！
（ベール？）
なるほど、アッシュは今日、いつものマスクじゃなくてベールで顔隠してるのか。
急がないと、時間がないっ
「すみません。警備の方っすか？」
「なんだこんな時に！」
「俺アルバイトで舞台の掃除頼まれてんすけど、従業員通路って」
「あっちだ、早く行け」
「どうも」
よし、完璧だ。
これで間に合うッ!!
ダダダダ
裏口から舞台へ駆け上がる。
タン！
午前１０：００。
見えた！
暗い舞台の隅、今まさに準備を終え、大衆の前に進み出んとするアッシュの背中……よし、まだベールは外してねぇっ！
「アッシュッ！」
ベールをしたプリンセスが、ゆっくりと振り返る。

「……ザッ……ク？」
「アッシュ！」

「ざっくん!!」
どしっ
予想外のタックルを死角から受け、俺はあと一歩のところで転げた。
「ホ、ホリー？」
「ざっくん、嬉しいっ!!私のこと、見に来てくれたんだ!!」
「いや、違う。とにかく今は離れ……」
ハッ！
アッシュが、通夜見たいな顔して俺を見ているッ!!
「……ザック……」
「いや違うんだアッシュ、これは」
その時、

ピシィィイーーンン……
ドゴォーーーン!!!

空が裂け、極太の光線が大地を抉ぐる。
来た！
メモルゼ戦艦の砲撃か!!
ギャーーーッ
何じゃこりゃあーっ
助けてぇーっ
客席はもう、ステージどころじゃなかった。

ヒュンッ！
さらにもう一つの影が、
「アシュラちゃん!!」
ダンッ！

ステージに降り立つ。
「お前……ホーレンちゃん？」
アッシュが、驚いたように呟く。
「ああ、アシュラちゃん」
ばっ！
そいつ……ホーレンは、急にアッシュのベールを剥ぎ取り、顔を近づけた。突然のことに怯えるアッシュ。
俺はそれを見て、なぜだろう。初めて、こいつを本気で殺してやりたいと思った。
「ふふ……やっぱり君は、いつ見ても美しい！僕の天使だ!!
さあ、僕の船へおいで。一緒に宇宙へ旅立とう！」
「ちょっ、勝手に……、
ザック！助けて!!」
「アッシューーッ」
ガバァッ
「だめだよ!!ざっくん」
再び、ホリーが抱きついてくる。
「アシュラちゃんなんかほっといて、私と話そうよぉ～っ」
「ははは、さらばだ結城ィッ！」
「待てこのやろぉーーっ！」
身動き出来ないまま、ホリーの下から叫ぶ。だがホーレンはアッシュを抱き上げたまま、ジェットボードで宙に消えた。
やっべぇ……
ホーレンに先越されちまった。
「ねぇ……ざっくん。なに考えてるの？」
何も知らないホリーが、俺の腕を掴み、顔を覗き込んでくる。
「せっかく私に会えたのに……まさか、
アシュラなんかが気になるのぉ??」
腕を握る指に力が入る。彼女の袖口から、傷跡のある手首が見えた。
くそっ。こんなことしてる場合じゃないのに。

「ざっくん……忘れてないよね。ざっくんが、私のお城で迷子になった時、私が助けてあげたこと」
「あ、ああ……」
「そしてその時に、私と……
結婚してくれるって、言ってくれたこと」
「え、えぇ、そんなことあったかな」
「言ったよね。私がざっくんにずっと耳元でプロポーズしてたら、２８６３回目によだれ垂らしながら「うん！結婚するぅっ！」って」
あああ思い出したくねぇえ！
あれはまさに地獄だった。二度とこいつの城には行かないと誓ったッ！
「それなのに……、
ねぇ、まだアシュラと住んでるの？」
ホリーが、焦点の定まらない目で俺を見つめ、そして、
なぜか、俺の服を探り始めた。

「……今日は、包丁持ってないんだね」

いやだ死にたくねぇ！
「じゃあ、やっぱりこれだね」
そう言って、ホリーは俺の上で手榴弾を取り出し、
ピンを引っこ抜いた。
「ばっ！お前なにやって」
「へへ、抜いちゃった」
ホリーはさも当たり前のように、その爆弾を俺の腹の上に乗せ、そしてその上に、自分の腹を密着させ、爆弾を挟み込んだ。
「力緩めたら……爆発しちゃうね」
んんっ……
吐息とともに、ホリーが腰をくねらせ、体を擦りつける。
「ねぇざっくんっ……死にたくなかったら、もっと私とくっつくしか

ないよ……、そう、「ひとつ」になっちゃうくらいねぇっ、んああっ！」
心なしか、ホリーの下着が少し、ずれてる気がする。
く、くそっ、こいつ本気か!?
「あはぁっ！こんなにみんなの人がっ！私目当ての人がいっぱい来てる前でっ、私、ざっくんにこんなことしてるの見られちゃうっ！」
一筋の雫が、ホリーの太ももを伝う。
や、やばいっ！俺まで変な気分に……
「いいよ。私、ざっくんになら、どんなに、は、恥ずかしいことでも、出来るからっ。ずっと、それを待ってたんだからぁっ！ざっくん、お願い！ざっくぅん!!」
うわぁ、駄目だぁっ！
何が駄目なのかもよくわからなかったが、俺は限界を迎えていた。
その時、

「こらぁっ！ステージで何してやがんだっ!!」
スタッフらしき者の声に、俺たちは驚き、つい、
腰を離してしまった。

カチッ……
「あっ」
ボウンッ!!!
「うわっ！」
スタッフの悲鳴が、煙ごしに聞こえる。
「ホリー、俺たちは死んだのか？」
「ううん、着衣消滅ガスと間違えた」

チャンス！
俺は全裸のまま煙から飛び出した。
「待て！不審者め」
スタッフを振り切り、舞台裏に飛び込む。
バチチッ！
俺は慣れた手つきで、自分のこめかみにダンジョくんをぶっ放した。
全身が変貌し、夕崎ザラになる。
でも裸じゃ話にならない。
「確かポケットに……」
よし、あった！
簡易ペケバッジ！
「ちょっと借りるぜ、アッシュ」
あいつのことだから、「あの」コスチュームも入ってるはず……！
「不審者め、どこにいる、出てこい！」
「不審者なら爆殺しちゃいましたぁ～っ！」
俺はアッシュのペケバッジに実装されていた、マジカルキョーコの衣装を着て、スタッフの前に出た。
「き、きみは確か、夕崎ザラちゃん？」
「なんでもかんでもっ、
燃やして解決！」
一時期は二度と言わないと誓った言葉が、保身のためにいとも簡単に出て来る。
俺も、もう戻れないのかな。
「な、なんでいきなりこんなところに」
「サプライズ出演ですよ。聞いてませんでしたぁ？」
「そ、そうなんだ」

「それじゃあっ」
俺は舞台裏にかけられた「ブルーメタリア」と書かれている衣装をひっ掴み、裸のホリーの元に走った。
「ホリーちゃん！」
「あ、あなたは……？」
「始めまして、私は……、
ミラクルクロー！」
我ながら適当だな……。
「とりあえず、これを着て！」
「え？あ、これ、ママが着てた……」
「ブルーメタリアだよ！今日のステージは、あなたのお兄さんにアッシュがさらわれて、私たち2人で助けに行くって設定なの！」
「そ、そうなの？」
「そう！この爆発とかも演出！もうすぐメモルゼ星の戦艦も来るよ」
「ほ、本格的だね……」
「私たちは本当は宿敵だけど、今日は協力して！」
「う、うん。わかった。
ねぇ、いまアシュラちゃんのこと、アッシュ、って言った気がするけど」
ギクゥッ！
「その呼び方って、ざっくんだよね？ねぇ、何でざっくんのこと知ってるの？はっ、そういえばざっくん」
「さぁ、早く行こうっ！」
「うわぁ、ま、待ってよぉーっ！」
ステージを飛び出し、箒でホバリング待機する。
「さあホリー、早く後ろに乗って！」
「え、こ、これに乗るの？」
ホリーが戸惑いながらも、俺の後ろに跨る。
これ、アッシュに見られたら嫌だな……。
まぁ今は「女同士」だし！非常事態だし不問だろ！
「いくよっ」

ドシュッ！
「キャァッ！」
箒からフレアをぶっ放し、俺たちは大混乱の観客の頭上を飛び上がった。

「ザラちゃん、私、ジェットコースターとか苦手で……」
ギュウッ
箒の後ろに乗せたホリーが、俺の背中にしがみついてくる。
（うぉっ、ホリーの胸が背中にいっ!!）
ははは、自転車の２ケツで舞い上がってる地球のリア充どもめ！見ろ、俺の勝ちだ！
「イヤーー！ザラ、前っ！」
「えっ？」
ガツン
「うわーーっ！」
調子に乗っているところで鉄塔に肩をぶつけ、箒から振り落とされる。
ボシュウー
急いでジェットブーツで鉄塔を蹴り、空の箒を掴む。
「もう！びっくりするよぉーー」
「すまん」
いかん、馬鹿なことしてる場合じゃなかった。
ザーッ
俺は無線をモジャックに繋いだ。
ガチャ
「なんだヘア？」
「すまん、失敗だ。アッシュがホーレンにさらわれた」
「なにやってるんだヘア！お前が先を越されたら」
「作戦変更だ。俺は今からホリーと一緒に戦艦へ乗り込む」
「ひ、１人でヘアか!?２０００人がいる戦艦の中へ」
「だからメモルゼの王女を盾にすんだよ。さすがに相手も手が出しに

くいだろ」
「兵士じゃない、しかも女ヘア。戦いに巻き込んで、危険とは思わんのかヘア」
「死なしゃしねぇ。それに、相手も王女をさらってんだ、これで平等だろ。これが闘いってもんだ」
「……やっぱりお前は、異星人ヘア」
「……どういうことだ。お前もじゃねぇか」
「そうヘア。お前は結城リトの子どもの中で唯一、人間の血が通っていない。見た目は地球人でも、考え方は根本的に違う……残忍で、イかれた異星人ヘア。わしよりも」
「嬉しそうに言ってんじゃねぇよ」
「当たり前ヘア！まずこっちに救援に来いヘアー!!」
「了解」
ブチッ
「ホリー！聞いてた？」
俺はホリーに振り返った。
「風の音しか聞こえないよーー」
「よかった！ねぇ、まだ爆弾持ってる？」
「いっぱいあるよ」
「よし、２人で盛り上げよう！」
俺たちは、モジャック将軍たちのもとへ飛び立った。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第１４話「対メモルゼ防衛戦線　ＩＩ」

ー彩南警察署ー
「町はどうなっている」
「大混乱です」
「負傷者５８名、死者７名。これが番組の撮影だと!?」
「何かの衝撃でステージがえぐられ、地盤沈下が起きた。科学班の調査によれば、レーザー砲とのことだ」
「異星人……メモルゼ軍の侵略に間違いない！」
「メモルゼ、やっかいな惑星だ」
「しかもデビルークと同盟を組んでいます」
「援軍でも来られたら……」
「我が国では到底太刀打ち出来ないだろうな」
「たった今情報が入った！
　国会が、自衛隊の出動を決定した」
「我々も向かうぞ」
「しかし、我々だけではとてもーー」
　ピルルルルル
「電話だ」
　ガチャ
「もしもし」
『宇座亜須会のモジャック将軍ヘア』
「……何の用だ」
『これからそっちで戦争おっぱじめるから注意するヘア』
「何だと！なぜこんな時に」
『お前ら地球の警察だけじゃ足りないから、そっちも救援を呼ぶヘア。例えば……銀河警察とかヘア』
　ガチャ
「奴に乗せられる様で癪だが、それしかない。銀警に繋げ」
「士官クラスに1人、地球人がいる。優秀だそうだ。彼にかわってもらえ」

ピルルルルル

ガチャ

『はい。銀河警察です』

「こちら太陽系第３惑星、彩南警察署です。我々の生活が脅かされています。救援を」

「申し訳ないが、我々はこの一件には関与できない」

「地球の危機なのです！あなたも……地球人でしょう？」

「………」

「お願いします！」

「私が呼ばれたのは、あくまで、暴力団の抗争によって生活が脅かされている市民を守るための「警備」としてだ。今後何が起こっても、それは揺るがない。私が何をしても、あなた方が誰に、何を聞かれても、そう答えられますか」

「約束します」

「わかりました。それでは、ただちに向かいます。もっとも今はデビルーク星にいるので、すぐには到着しませんが」

「ご協力感謝致します」

ガチャ

「……えらいことになった」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー彩南町上空ー

ボシュゥッ！

ヒューーン

ドカァン

「ハッ」

右手を突き出し、敵攻撃艇から放たれるミサイルに爆炎をぶつける。左手は、またがってる箒を握ってるから、バランスが取りづらい。これはなかなか難しいな。

ガガガガガ　ガガガガガガガガッ

攻撃艇はミサイルが当たらないとみるや、今度は機銃を撃ってきた。

「また急降下するよ、ホリー」
「もう慣れたよ」
ギュン！
弾幕を掻い潜り、船の前方に捻り込む。
ババババババ
俺は弾の嵐の中、さっき取ってきた包丁を振り抜いた。
「ッシャアアッ!!」
バッキィン！
コックピットが真っ二つに避け、驚く2人の操縦士の顔が露わになる。
「ちょっと失礼」
俺は彼らに向けて、ころころダンジョくんを構えた。
バチチチッ！
「う、うわぁっ！」
叫ぶメモルゼのパイロットたち。そして……
「え、え！俺なんで女に……!?」
「待てよ！今は俺の番……ってえ、これ俺？どっち？どうなって……うわぁあああ!!」
「俺はこの間分離したのに！」
「駄目だ！女じゃ戦えない！」
「もう降参するぅっ!!」
敵艇は半壊のまま反転し、空に消えていった。これで4機目だ。
よし、これでいい。パイロットになるほどの兵士だ。ドクター・スメラギの言うような精神崩壊にまでは至らないだろう。
そろそろ来るか。
「ザラちゃん！向こうからいっぱい来てる！」
「よし、来たか」
敵戦闘艇の編隊。揚陸艇を着陸させるための護衛だろう、ざっと7、8機はいる。あいつらと箒で格闘するのはちょっときつい。後ろにホリーもいるしな。
俺は箒の上からマフィアたちに指示を出すため、慣れないパソコン

を広げた。
「狙撃班は射撃体制に入れ！ヘリコプター隊、コブラを第1、2、3ビルの間に待機、一帯を囲め。敵編隊は近いぞ、作戦開始だ」
「飛ばすよ」
ギュオッ
指示を終えるなり、俺は大編隊に向かって箒をぶっ飛ばした。
「ホリー！爆弾一個貸して！」
「はい、ザラちゃん」
ブゥンッ！
俺はホリーから受け取った爆弾を、編隊の奥にいる揚陸艦まで投げた。
バァアン……
戦闘艇の編隊が、一斉にこちらを向き、追いかけてきた！命中こそしなかったが、敵の注意は充分引くことが出来たようだ。
ゴォオオ
「ザラちゃん！凄い追っかけてきてるよ」
「へへ、計画通り」
敵編隊を引き連れ、マフィアたちを待機させたビル街に飛び込む。
今だ！
「ホリー！つかまってっ」
ギューーン！
俺はビルとビルの間を猛スピードですり抜けた。
ビルを抜け、箒を反転させて空中停止し、再びパソコンを開く。目前にビルに囲まれた敵戦闘艇が見える。
「撃て！」
俺はパソコンに向かって叫んだ。
バン！バンバン！
ビルの屋上から、狙撃班の銃が火を吹き、
バギィン！
戦闘艇の風防が破れる音がする。
「全機、グレネード弾発射！」

ドシュッ!ドシュドシュッ!!
「メモルゼ星人どもを女に変えてやれ!」
風防が割れ、露わになったコクピットへ、攻撃ヘリのグレネード弾が的確に命中していく。
パン!パンパン!
「「ふぇーーっくち!!!!」」
メモルゼ兵たちのくしゃみがこだまする。
どうだ、俺たちの手作り爆弾は!
……まぁ、
コショウが入ってるだけなんだけどな。
「なんだ!これは」
「おい!おまえ女になってるぞ!操縦桿離せ!」
「おまえもなってるよ!」
「うそだろ!?くしゃみで!?」
「もぅ戦えないっ」
「やられた!」
「くそぉっ、こんなところで……」
次々と堕ちていく、メモルゼ戦闘艇。高度はそれほどないから、死にはしないだろう。
「ザラちゃん、凄い……アクションの練習、相当したんだね」
「そりゃあもうね、長いこと」
空はひとまず終わったか。
俺は箒を下げ、ヤクザの黒い車がうじゃうじゃいる交差点へ急降下した。
「モジャックの車は……あれか」
パトカーに追いかけられてる、ひときわデカいベンツを追いかけ、窓を叩く。
ウィーーン
「生きてたかヘア」
「空は一掃して来たぜ。箒だけにな」
「でかしたヘア。揚陸艇は仕方なくこの付近に強行着陸したヘア。こ

こなら地の利で善戦出来るヘア」
「よし。俺……私ももう少し協力する！」
危ねぇ、ホリーのこと忘れてた。
「頭ァッ！メモルゼの装甲車が来やがりましたぁっ！」
「よっし、ぶっ潰すヘア!!」
プップーー！
ブゥーンン！
ライフルやらランチャーやらを担いだ刺青共を乗せ、黒ベンツやトラックが次々と横切って行く。
「ザラちゃん……あんな怖い人たちと関わってるの？」
「ホリーだって関わってるよ。気づいてないだけでね」
俺たちも行くか。
ビュン！
狂ったように照り散らすサイレンを抜け、道路を低空で飛び続けると、見えた！敵車両。
ダダダダダッ
ビュオッ！
弾幕を避け、素早く装甲車の横腹に滑り込む。
「ホリー、よろしく！」
「オッケー！」
さっき言っておいたとおり、箒を傾けざまにホリーが手榴弾を投げる。
バガン！
どでかいタイヤに命中！装甲車は傾いた瞬間、猛スピードでスピンし、崩れたビルに突っ込んだ。
ダァーーン！
背後に煙が上がる。
「いいね、ホリー！」
「えへへ、負けてらんないよ」
さすがアクションもこなすアイドル！なにが凄いって、まだこれを撮影だと思ってるのが一番凄い。

「また来たよ！」
ガタガタガタガタ
ん？この音は……、
戦車だ！
ドン!!
砲弾を紙一重でかわす。
後ろのビルが吹っ飛んだ。
「ザラちゃん！」
「ホリー、キャタピラ狙って！」
バン！
だめだ。銀河通販の爆弾じゃ、戦車のキャタピラに傷もつけられない。
ダダダダダッ
チッ、左右から装甲車まで来やがった。
ドウッ
「ザラちゃん！」
砲弾が目の前に迫る。よけきれな……、
「念力集中ッ!!」
ズドンッ！
砲弾が、俺の目の前で地面に落ちた。
（西連寺ッ!?）
ここに来てるのか？
とにかくチャンスだ！
俺は戦車の屋根まで急接近した。
「ホリー！ハッチを狙って！」
シュッ！
バァン！
ホリーの爆弾が命中し、戦車のハッチが破れる。
「うらあああーーーっ!!」

バチチ！バチバチバチッ！
俺は空いた穴に向かって、ダンジョくんを撃ちまくった！
「うわぁーーっ！女にっ！」
戦車から叫び声が上がり、
ガァーン！
方向舵を失った戦車は、左右の装甲車を巻き込んで瓦礫と化した。
「西連寺ッ！」
俺は、念力でアシストしてくれた友の方へ向かう。
「結城く……あれ、あなたは？」
っとそうだった。
「ああ、私は夕崎ザラ。ザク郎から君のことは聞いてるよ」
「そ、そうなんだ。
あの、結城君は……」
「無事だよ。君にも、早く会いたいって」
「そっか、それはよかった。この前は、僕のせいで取り返しのつかないことに……」
「そ、それは」
「それは西連寺さんのせいじゃないよ！」
えっ。
背後の言葉に、俺たちは呆気に取られた。
意外だ。ホリーがこんなことを言うとは。
やっぱり根はいい奴なんじゃ、
「悪いのは、全っ部デビルークなんだから！」
ああ、それが言いたかったのね。
まあ間違っちゃいないが。
「そのデビルークが、もうすぐ来るかもしんねぇぜ」
メモルゼ兵を2人、放り投げながら、古手川が姿を現した。
「落とし前はここでつける。結城はアシュラを助けに行ってんだろ。ザラさんとやら」
「あぁ、うん。そうだよ」
「ふん。べ、別に俺がかわりに助けてやってもいいけどよ。今回は

譲ってやる。この間は、本当に申し訳ないことしちまったからな。
地上は俺たちに任せろと、あいつに伝えてくれ」
「わかった。ありがとう、みんな」
「さあ早く、宇宙へ行けヘア！」
俺は箒を空に向け、高く、高く飛び上がった。
地上の人々が小さくなっていく。
モジャックのアフロも、小さく、小さくなっていった。
「ねえ、ザラちゃん。ざっくんがアシュラちゃんを助けに行ってるって、どういうこと？」
わずかに声を震わせて、ホリーが尋ねる。
「ん？んん、何でだろうね。わかんないや」
本当にわかんないんだよな。なんで俺は、アッシュ助けるためにここまでやってんだろう。
プライドとか、責任感とか、そんなんじゃ説明出来ない。
「アシュラの奴ぅ～っ、絶対ざっくんに色仕掛けしたなぁーっ！許さない！
ザラちゃん！一緒に、アシュラを護ってる奴ら、みんなやっつけようね！ホーレンにも、容赦しなくていいから！」
「もちろん。容赦する気はないよ」
俺たちは妙な殺気をみなぎらせながら、空中に停めたアクセローク号に入った。箒じゃ大気圏外に出られませんからね。
「よし！アックス、突破！」
アックスは火を吹き、地球を離れて行った。

ー地上ー
「よし、あいつら、行ったヘア」
モジャック将軍、と呼ばれる人物は、夕崎ザラさんたちを見送って言った。
僕の人生で、まさかこんな人たちと一緒に戦う時が来るとは思いもしなかった。親には絶対に言えないな。
本物の銃なんて、今まで見たことも、触ったこともない。本当に、僕

の念力で対抗出来るのだろうか。まぁさっきは、なんとか砲弾を止めれたけど。
いや、だめだだめだ。
自信を持て、季虎！
「商店街方面から装甲車が接近中！」
「よし行くヘア。西連寺、一緒に乗るヘア！」
「は、はい！」
「古手川はこっちや！」
そうだ。僕たちの星を守らなきゃ。
僕が右の後部座席に乗るやいなや、モジャックさんはベンツを猛スピードで走らせ始めた。
ブゥウーーンン！
「わはは！みーんなアフロヘアーにしてやるヘアー！」
ついでに道行く人の髪を勝手に爆発させている。酷い、酷すぎる。
ギューーンン
「右手に装甲車ッ！」
バンッ
ギャーーーアアアアッ！
装甲車の屋根から、巨大なチェーンソーが向かってきた！
「西連寺ッ」
言われるより早く、空いた窓から右手を出す。
「念力拡散！」
ガチャン！
チェーンソーの繋ぎを外し、道路に落とす。
「念力集中！」
間髪入れず、装甲車の運転席に人差し指を向けた。
ビシィッ！
「うわぁっ！」
装甲車がふらつく。
「今ヘア！」
ドシュウッ

後ろのトランクに乗った男が、ＲＰＧを放った。
ドガアアアン！
命中。車体は横転し、やがて爆発する。メモルゼ製の装甲車も、流石に至近距離では無力だ。
「よくやったヘア、西連寺」
「お前ら、根性あんなぁー」
うらあああああっ！
反対車線では、古手川君が敵のトラックに乗り込んで暴れている。確かにメモルゼ星人の身体能力は地球人と大差ないけど、それにしたって軍人相手に凄い男だ。
「頭上に巨大な機影発見。あれは……輸送艇!?」
「空挺部隊だ！」
「しまった、囲まれたヘアか！」
「大丈夫です。自分が行きます」
僕は車を飛び出した。それと同時に、古手川君もトラックを飛び降りてくる。
「古手川君！」
「行くぞ西連寺！」
僕も、結城君に負けるわけにはいかない。
今は到底、アシュラさんには届かなくても、
届かない場所でしか、頑張れないこともある。
そして、いつか……、
「うおおおおおっ！」
僕たちは、迫り来る敵空挺部隊に向かって走りだした。

バチィッ!!!
服が避け、後ろへ吹き飛ぶ。
自分の身体から、焦げた匂いがする。
「けっ！メモルゼ星人のオカマどもめ。地球ごときも制圧できねぇの

か」
「6人は少な過ぎたか？」
輸送艇から降りて来たのは、
メモルゼ星人なんかじゃなかった。
「サイナン……俺たちの王家を狂わせた街だ」
「我々で浄化しよう」
腰に尻尾を生やした、悪魔。
「平和ボケした連中に叩きこんでやれ。
誰が「銀河の覇者」なのかをな」
宇宙最強の種族、
デビルーク星人。
「あいつら、アシュラや天条院先輩とは違う。こんなこといっちゃなんだけどよ、人間の血が混じってねぇ、純粋なデビルーク人だ。
俺らが知ってる奴らとは次元が違う」
僕の前に立ち上がりながら、古手川君が呟く。
ババババババ
「西連寺、古手川、大丈夫かヘア!?」
「自衛隊がきたぞーーっ！」
背後から、本来頼もしい筈の、自衛隊の轟音が近づいて来る。天条院さんが呼んでくれたんだ。でも……、
……また、悪い癖が出て来た。
自衛隊もろとも、壊滅されそうな……。
「西連寺、いけるか!?」
「う、うん。大丈夫！」
そうだ。ここで頑張らなきゃ！

「天条院アーサー殿は？」
「道に迷ってるヘア」
大丈夫かな……。
to be continued

第15話「対メモルゼ防衛戦線Ⅲ」

ー地上ー
煙を上げて堕ちる、日の丸の機体。
悲鳴を上げる地上部隊。
空を舞う、黒いベンツ。10式戦車。

「念力……集中っ！」
「効かねーよ雑魚」
バチッ
念力がかき消され。尻尾から放たれる電流が体に走る。
僕は声も出ないまま、地面に崩れ落ちた。
「西連寺ッ！」
「クッソォッ」
バシィッ！
古手川君の拳が、女兵士に虚しく止められる。
「無駄だと言ってるのに」
ブゥン！
紙切れのように古手川君の体が宙を飛び、
ガシャアアアン！
瓦礫に突っ込み、動かなくなる。
「せ、せめて髪型だけでもアフロに……」
「やめて下さい！逆上させるだけです！」

僕たちは、たった6人のデビルーク星人に、壊滅寸前まで追い込まれていた。
「こんなもんかよっ、地球人！」
バチィッ！
ドゥンン……
1人の尻尾から放たれたビームに、東京タワーが崩される。

「ま、まさか本当に……」
世界の、終わり……？
「西連寺、古手川、生きてるか？」
後ろで、聞いたことのある声がする。
「先輩の前だぞ、シャキッとしろ。
お前たちしか、奴らは倒せない」
僕と古手川君は、声のする方へ振り返った。
「九条……さん」
「行くぞ。奴らに星を潰された種族がいくつもある。東京のシンボルが壊されたくらい問題ない。
指揮官殿!!」
九条さんの声に、自衛隊の指揮官が反応する。
「我々が敵の3人に集中して攻撃します。そちらも、同じ3人を集中的に爆撃していただきたい」
「了解」
「行くぞ、西連寺、お前はあのデカいオールバック、古手川、お前はあの女兵士だ。俺は奥の覆面を狙う。
いいか、尻尾「だけ」だ。
何が起こっても、尻尾だけを狙っていけ！」
そう言うなり、九条さんが懐から何かを取り出し、
シュン！
デビルーク兵めがけて、目にも留まらぬ速さで投げつける。
ガチィッ
それはドーナツのようになって、1人のデビルーク兵の尻尾に挟まった。
あれは、もしかして……
バイブ!!!
「ああ？何だ、これは……」
カチッ

ブゥゥゥン!!
「はあっ!?
ダメだ、やめろぉっ!ち、力が抜ける……」
「ぬうううん!!!」
ズバァアアン!!
瞬間、数十メートルもの距離を詰め、
九条さんが、刀を縦に一閃した。
「ぐわ、嘘だ……俺が、地球人ごとき、に……」
血しぶきをあげて、デビルークの兵士が倒れる。

『グヘヘ、マジかよ!デビルークの血なんて何年ぶりだァ!?最高だぜ、地球人』
「……黙ってろっ」
右腕を抑え、九条さんが刀に話しかける。何してるんだろう……
「危ない!」
「死ねぇっ」
覆面の兵士が跳躍し、九条さんの頭上に剣を振り下ろす!
「ハァッ!」
ガキィン!
強烈ななぎ払いで、九条さんが距離を取った。振り回される度に、まるで悦ぶように赤黒く光る、九条さんの刀。あれは何なんだろう。なんか、あれはあれで危ない気がする。
「信じらんねぇ、九条さん。あのデビルークと互角って、どうなってやがんだ」
こんな時だと言うのに、僕も、古手川君も、九条さんの闘いに目を奪われていた。
「何をやってる!さっき伝えただろ。自分の敵に集中しろ」
僕は我に帰り、右側にいる巨体の兵士めがけて駆け出した。
ダダン!ダン!ダン!
自衛隊の援護射撃が、デビルーク兵の全身に突き刺さる。
「調子に乗るなよ、地球人め」

バチィッ
またビームを喰らい、僕は後ろへ飛ばされてしまった。
「怖ぇえのは長髪の奴だけだ！あいつを潰せ！」
巨体の声に、残りの２人の兵士が、同時に九条さんに飛びかかる。
ああ、また仲間に迷惑を……。
ドガッ　バキッ　ザンッ
「よっしゃあっ！」
古手川君の声に、左を見る。
そこには、激闘の末、女兵士の尻尾を掴むことに成功した古手川君の姿があった。
「ああっ、あんっ！は、離せ、汚らわしい、んんうっ」
戦場に似つかわしくない、悩ましい声が上がる。
「な、なんだよその声……」
古手川君が後ずさりながら、せっかく掴んでいた尻尾を離した。
「……な、なんのつもり？尻尾を離して、バカじゃ」
「お前、こんな声、尻尾さわられたくらいでそんな……
破廉恥かぁっ!!」
バチーーン！
「ぶほぉっ!?」
ビ、ビンタ!?
さっきまでの美しい闘いぶりはどこへやら、古手川君が隙だらけの動きで女兵士の顔をひっ叩く。まるでプロレスだ。
「くっ、この」
ドガッ
女兵士の反撃が、古手川君の腹を直撃した！
死ぬ！
バチコーーン！
だが古手川君はびくともせず前進し、女兵士の顔に平手を浴びせ続ける。
「べぶっ!?そんな、こ、攻撃が効かないっ！なんでぇっ!?」
「はぁー、指導！指導が必要だなぁ」

駄目だ、こうなった古手川君はもう誰にも止められない。
ベチ！ベチィン!!
「もうやめ、い、息がっ」
「こ、の、
変態ぃぃぃーーっ!!」
バッチコーーーーンン!!!
古手川君の渾身のビンタを喰らい、女兵士はきりもみしながら地面にめり込み、動かなくなった。
……なんか可哀想になってきたな。
いや、敵に同情してる場合じゃない！
「こっちだ！」
２人を相手に立ち回る九条さんへ、なおも襲いかかろうとする３人目の敵兵に、僕は念力をかけた。
「邪魔をするなぁっ！」
３人目とともに、僕の相手である巨体のオールバックが再び接近してくる。狙い通りだ！
「セイッ！」
迫り来る敵を足刀蹴りで突き放し、
「ふん！」
ズン……
オールバックの振り下ろす大剣を、空手の型で受ける。
「お前の念力じゃ、俺のパワーは防げねぇよ」
ギリギリギリッ
ぼ、僕だって……
尻尾を掴むことぐらいはっ……！
「潰れろぉっ！」
キキキーーッ！
潰されそうになる寸前、僕の視界に黒ベンツが飛び込んでくる。
「負けんなヘアーーッ!!」
ドシュウッ
組員から発射されるロケット弾！

バガンッ
オールバックの足に命中！
「この野郎っ！」
（ありがとう、モジャック将軍！）
敵の足が僅かにぐらつく。
今だ！
ガシッ！
「っあっ!!」
僕に尻尾を掴まれ、オールバックがその巨体を無様にくねらせる。
「終わりだっ！」
体制を取り直し、再び迫り来るもう1人の敵を僕は見逃さなかった。
バシッ！
僕は白刃どりの要領で、2人の尻尾を頭上でくっつけた。
「念力集中ッ！」
ビシィッ！
「ッツ!?」
僕の手から、敏感な尻尾に直接流される念に耐えられず、2人の体が宙に浮く。
とどめだ。
「念力拡散ッ!!」
僕は全ての念力を右足に集中させ、
「セイヤーーッ!!」
渾身の後ろ回し蹴りを放った。

ブォオッ！
周囲に竜巻が起こり、
「ウワァーーッ！」
2人の敵兵は宙高くまで吹き飛んでいった。

中央には、既に2人目を屠り、最後の1人を圧倒している、九条さ

ん。
「ば、馬鹿な。自衛隊の援護があるとはいえ……たった3人の地球人に……」
恐怖に顔を歪め、後ずさるデビルーク兵。そして、
「う、うわぁーーっ！」
脇目も振らずに逃げ出した。
「待ちやがれヘアーっ」
追いかけようとするモジャックさん。自衛隊員も銃口を向け、僕と古手川君も、かろうじて首を向ける。
だが、九条さんだけは下を向いたまま動かない。
「……を、よこせ……」
右腕を抑えて、何かを呟いている。
バァン！
銃声。
ドサッ
逃げていたデビルーク兵が倒れる。
「敵前逃亡は軍規違反だ。恥さらしめ」
急に姿をあらわす、新たなデビルーク兵。
（そんな、どこから！）

ジジ……
空が揺れ、
ブォン
突如、輸送艇が出現した。
あのマーク……メモルゼの舟じゃない。
デビルークだ！
「九条家……乱世において、弱小貴族、天城院家を護り続けた、最強の武闘派士族」
すぐそばで、艶めかしい声が響く。
「その末裔が、生体兵器に侵食されちゃったら……どうなるのかなぁっ！

素敵ッ！」
ギャーギャギャギャギャギャギャギャーーンン!!
強烈なギターの音と共に、
赤い髪を垂らした、女？が、楽しそうに現れた。
そして、その後に続く様に、
ザッ
２……３０人はいる、デビルークの軍勢。
「う、嘘だろ……」
古手川君が、そう漏らす。
しかも……
「お、お前らっ、俺から離れろ……」
「九条さん、その刀離すへアッ！」
「もう遅いっすよモジャおさん」
「モ、モジャおぉ？」
「いま九条さんから刀が離れたら、心がくだけちゃう」
赤毛の異星人が、その赤い髪を伸ばし、触手のように九条さんに纏わらせる。
「僕が侵食を手伝ってあげよう」
何者なんだろう、尻尾は生えていないからデビルーク星人じゃない。
「そうだよね、九条先輩。この宇宙で地球人を守るには、生体兵器に頼るしかないもん。仕方ないっすよ」
「あ、あああ」
力なく呻く九条さんに、なおも赤毛が近寄る。
「でも、もう我慢しなくていいよ。
心の赴くまま、暴れちゃって……斬って斬って、斬りまくって、僕と一緒に、ここにいる地球人たちの血を、吸い尽くそうよ……一滴たりとも残さずにね。
いい？」
赤毛が、九条さんの肩に手をかける。
「今の先輩は、もう警察じゃない。

生体兵器、ブラディクス」
「あああああああああーーーーっ!!!!」
ザンンッ！

粉塵の舞う中、黒い髪を逆立たせ、唸る刀を構える姿は、もう、僕たちの知ってる九条さんじゃなかった。
握られたブラディクスが、僕らをあざ笑うように、赤黒く光る。
「終わった……」
誰からともなく、そんな声が上がり、
ギュィィイーーーン!!
ジャーーーン!!!
悪魔たちの蹂躙が始まった。
轟音とともに崩れるビル。
逃げ惑う人々。
自衛官たちも、瓦礫に伏せたまま、なすすべもなくしている。
僕の念力をかき消す尻尾ビームに、古手川君を圧倒するパワー、しかも光線銃を持った相手が数十人なんて、もう勝ち目がない。
たとえいま天城院先輩が来ても、或いは結城君やアシュラさんが戻って来たって、きっと何も変わらない。
ぞぷん！
「ッ！」
「念力使ってたのって、あんただよね、西連寺先輩」
あたり一帯が、急にどす黒く変色し、僕の目の前に赤毛の異星人が現れる。
「精神侵入（サイコダイブ）……」
「へえ、知ってるんだ」
村雨師匠から聞いたことがある。僕が使う念力の原動力「思念体」を、科学的に行う技術。宇宙のどこか、闇の組織が開発して、ある生体兵器に実装させた。それが第2世代変身兵器。またの名を……メア。
「あ、あなたはもしかして、メアさんの……」

「始めまして、「兄貴」」
ズズ……
古手川くんと同じ、僕と血の繋がった弟が、僕の首を刈る大鎌へとギターを変身させる。
「僕のことは「タナちゃん」でいいですよ。まあ、もう呼ぶこともないだろうけど、
九条先輩はあんなだし、ハレンチ先輩は九条先輩が抹殺するし、もう邪魔な人間は西連寺先輩だけなんすよ。
だから、悪いけど……」
ズァアッ
「ぐ、がああっ！」
（僕の思念体が……飲み込まれるっ!?）
「じっとしてて下さいね」
僕の体に紅い鎌が振り降ろされ、

世界は再び修羅に戻る。
精神を抜かれた僕は、
遠く、赤毛の死神が掻き鳴らすギターの音の中で、
壊れゆく町を前に、座り込んでしまった。

「がぁっ、くそ……」
左腕を押さえた古手川君が、僕の左側に叩きつけられる。腕が折れているようだ。
「血を……よこせ」
九条さん、いやブラディクスが、古手川君の頭に振り下ろされる。
「ヤッ」
ピシッ
最後の力を振り絞り、僕は念力で刀の軌道を変えた。
ズズゥン
裂ける道路。
「西連寺ッ……」

ブラディクスは僕を確認するなり、一、二、三歩下がり、刀を鞘に収め、そして腰を落とした。
居合だ。
「西連寺……お前だけでも逃げろっ」
「はは、僕ももう、力が出ないや」
僕たちは地にへたり込んだまま、死を覚悟した。

ブシューーッ！
突如、九条先輩の足元から、白い霧が勢いよく噴き上がる。煙に視界を遮られ、ブラディクスは不愉快そうに半歩下がった。
これは、
消化器!?
「お前ら！わしの宇宙船を持ってきたヘアッ。
ここはわしに任せて、宇宙に逃げるヘア」
「モジャックさん！」
背後に浮遊する小型ロケットから、モジャックさんが降りてくる。
火炎放射器を持って。
「でも、どうやって……」
モジャックさんは、覚悟を決めたように、ゆっくりと口を開いた。

「今わしのアフロには、特殊なワックスが塗られているヘア。これでこのアフロは、一度燃え始めれば、例えわしが死んだ後でも、２時間以上は燃え続けるヘア。範囲は小さいが……、
その炎は、どんな鋼鉄も、あのオリハルコンすら溶かし尽くすというヘア」
「でも、そ……そんなことしたら、モジャックさんが死んじまう」
声を荒げる古手川君。そんな彼をモジャックさんは極道とは思えないほど優しい目で見下ろし、次に僕に目を向けた。
「……地球人の若者よ、わしはな、お前たちと同じくらいの時、一度だけ、たった一度だけ、ストレートパーマをかけようとしたことがあったヘア」

「モジャックさん……」
「でも、駄目だったヘア。あらゆる矯正器具も、わしのアフロの反発には耐えられず、ぐにゃぐにゃになった。5時間、8時間、一週間たっても、わしの髪はまったくまっすぐにならなかった。しまいには床屋が精神崩壊を起こし、わしは床屋を出て行ったヘア。
くやしかった。思春期まっさかりの時ヘア。なんでわしだけアフロなんだ。なんでみんなは髪をいじり、女と並んで歩いているというのに、なんでわしには出来ないんだ……そう思った時、わしに恐ろしい力が宿ったヘア。
そうだ！全宇宙人をアフロにしてしまえば、わしはもう惨めじゃなくなる！
楽しかったヘア。わしの攻撃でアフロにかわり、泣き叫ぶリア充たちを見るたび、ざまぁみろと思った。苦しめ、もっと苦しめと……。わしは闇に染まって行ったヘア。
そんな時、
奴に出会った」
奴……？

モジャックさんがそこまで話した時、消化器の霧が弱まり、再びブラディクスが姿を現した。
モジャックさんはもう喋らない。目を瞑り、下を向いている。
その時、不思議なことが起きた。
モジャックさんの言葉が、思念体を通して、僕の精神に流れてきたのだ。
まるで、止まった時の中、僕の感覚だけが、モジャックさんの思い出を泳いでいるみたいだった。

（わしはそいつをよく知っていたヘア。そいつの母親とは、昔、地球のテレビ番組で共演したことがあったから、一目でわかったヘア。ああ、あの女の息子だと。
なんでこんなとこにいる？こんな宇宙の掃き溜めの、汚れた仕事場

に、どうして人気アイドルの息子が？
そう思ったが、奴はその時、わしのボスが求めていたものを運んでいたから、わしはすぐさま奴に杖を向けたヘア。
『止まれヘア！将来イケメンになりそうな顔しやがって、ムカつくヘア。その荷物を頂くついでに、貴様の髪もアフロにしてやるヘアーー！』
するとそいつは、それだけで5人は殺せそうな睨みをきかせて、わしに殺気を放ってきた。情け無いが、わしはちびりかけたヘア。
そしたら奴は、ふいにわしの後ろの部下たちに目をやったかと思えば、急に子どもっぽく笑って、こう言ったヘア。
『あんた、あの女の人、好きなんだろ』
わしは顔が熱くなった。図星だったヘア。
『さっさと告白しとけ。
殺される前にな』
そう言って、奴は俺に銃口を向けたヘア。
『……そんなこと、出来ないヘア』
『何で』
『こ、こんなダサい髪型で、恋愛なんて出来るわけないヘア！ずっと、ずっとそうだったヘア！生まれつき……』

ドゥッ！

わしは全身から煙を上げて、後ろへ吹き飛んだ。
奴の銃口から煙が上がる。
だが、わしは無事だったヘア。ただひとつ、どんなに切ろうとしても、伸ばそうとしても駄目だったわしのアフロヘアーだけが、綺麗になくなってスキンヘッドになっていたヘア。
『将軍！』
駆け寄ってくる部下の中で、わしが好きな女は泣いていたヘア。わしはうれしかった。
その時、

奴はこう言ったヘア。

『なんでもかんでも、
燃やして解決だ』

しばらくして、わしは勇気をだしてその人に告白したヘア。そして、わしに家族が出来たんだヘア。妻はアフロの時からわしが好きだったんだと、言ってくれたヘア。

わしは気付いたヘア。逃げていたのはわしヘア！決して変えられないハンデがあっても、幸せは掴めるのだと。それを、まだ幼い運び屋に教えられたんだヘア。

それからというもの、わしはもう他人の髪をアフロに変えることはなくなったヘア）

（いや、さっきやってましたよね……）

（その後も、これは後でわかったことだが、組織が摘発されて、わしが銀警に捕まったとき、奴はわしの家族を地球に送ってくれたヘア。

わしはずっとわからなかったヘア。なんで奴は、わしをここまで助けてくれたのか。

そして、

「燃やして解決」って、
どういう意味ヘア……？）

再び、世界が戻る。

「でも、今わかったヘア」

口を開くモジャックさん。

僕もわかった気がする。

「奴」は知ってるんだ。

なにもかもが燃えて、
最後に燃え残るものが、
きっと、
一番大事なものなんだ。
だから、
「わしも、
燃やして解決ヘア」
ボゥッ
火炎放射が、モジャックさんを包み、
誇り高きアフロが、真っ赤に燃え上がった。
「わしが燃えても、地球が焼けても、お前たちが生き残れば……、
人間の血は、宇宙のどこかで燃え残るヘア」
「モ、モジャック、さん……」
涙を流し、古手川君が這いずる。
でも、もう止めることは出来ないだろう。
「最後に、奴……、クロウ、いや、結城ザク郎に、
ありがとうと、伝えて欲しいヘァアッ！」
「モジャックさん!!」

九条さんが踏み込む。
それより早く、モジャックさんが、頭をかがめて突進した。

「なんでも、かんでも、
燃やして、
解決じゃーーーーーっ!!!」

「モジャックさーーーんんんん!!!」

真っ赤な炎が渦巻き、

ズパァン！

九条さんが、こちらに姿を現した。

モジャックさんの姿はない。

「そん、な……」

斬られた、のか……。

九条さんが、怪訝そうな顔で刀を見る。

「血……血ガ、ナイ」

「おい、

あれ、見ろよ」

古手川君が頭上を指差す。

空に、翼を生やした、モジャックさんが浮いている。

（いや、あれはモジャックさんから生えてるんじゃない）

後ろに誰かいる……!?

「駄目だよ。

誰も燃えてはいけないの」

空から、声が聞こえる。

ボゥ……

ふいに、青い炎が燃え上がり、モジャックさんがゆっくりと地に落ちた。アフロを燃やしていた火は、すでに消えている。

ズァアッ……

青い炎は、キラキラと輝きながら固まり、
青白い服を着た、小さな金髪の少女に変わった。

「燃やすのは、クロウ。
燃やされるのは、私。
他の誰でもないよ」

「コ……金色、業火……」

ブラディクスが、怯えるように声を上げる。

「姉貴」
タナが、ギターを弾く指を止めた。
「金色業火！死んだと聞いていたが、やはり生きていたんだな」
「我等が銀河の平和を脅かす殺し屋め」
「生体兵器など、もう必要ない」
「姉貴……なんで、なんでそんな奴のこと、助けたりするんだよ！
くそ……くそ、くそ！やっぱりあいつのせいで!!」

破壊に興じていたデビルーク兵たちが、反重力ウィングを出現させ、一斉に少女に襲いかかる。
ビュゥン！
彼方から、機械的な翼を生やしたタナが、猛スピードで飛来してきた。

ビルの上に立つ金髪の少女が、腕を交差し、下を向く。彼女の両手両足から、水晶のような刃が出現した。
「変身（トランス）。
シルフィード」

彼女がそう呟いた瞬間、フッと体から色が抜け、青空が透き通った。シルクのカーテンのように、微かに彼女の輪郭がなびいている。
彼女は、ビルを蹴った。そしてデビルークの軍勢の中、まるでバレリーナが舞台を舞うように、1人、儚げに舞った。
戦場であんな動き、地球人にはあり得ない戦い方だ。でも僕も古手川君も、格闘技をやっているからわかる。あの小さな少女が、兵士たちとの間にとっている、完璧な間合い。
あれが彼女、金色業火の闘い方なんだ。
数十人のデビルーク兵たちは、音も、形も無く、そよ風が吹き抜けるように全滅した。

「変身ッ、ガトリング！」
ガガガガガッ
唯一逃れたタナが、血だらけの両腕を機銃に変え、乱射する。
「変身。ノーミーデス」
一瞬、空に少女の姿が映る。だがそれはすぐに、醜い岩塊に姿を変えた。
ドガァン！
さっきとは真逆の荒々しい突撃に、タナは声も出ないまま、遥か彼方へと消えた。
「も、もう敵が……」
「いや、まだだぜ。九条さんがいる」
「モジャック殿ーー！只今戻りましたーー！」
やっと、天条院さんが戻ってきた。遅すぎる……。でも皮肉なことに、グッドタイミングでもあった。
「九条殿!?その姿は……」
「血ヲ……ヨコセ……」
「ブラディクス……九条殿から離れろぉっ!!」
ガキィンン!!
後方で、ブラディクスとイマジンソードが激しくぶつかり合う。

そんな中、空から、あの少女が僕と古手川君の前に降りてきた。
「あなたたちが……クロウの、オトモダチ」
燃えるような赤い目で、僕たちを見つめる。
こ、殺されるのか……？
すると彼女は、今まで見たこともない、優しい笑顔で言った。
「私にも話して。
地球での、クロウのこと」
……なんてきれいなんだろう。
なんだか、胸が痛くなる。アシュラさんが人を虜にしてしまう美しさなら、この子のは、決して触れてはいけないような、触れば壊れてしまいそうな……そんな美しさだと思った。
この子が殺し屋なんて、信じられない。たった今デビルーク兵を抹殺した事実も忘れるほどに、僕は彼女の笑顔に魅入ってしまった。
「……どうせ俺ら、もう使いもんにならねぇしな。話してやろうぜ」
古手川君が腕を押さえ、僕に提案する。
「……そうだね、九条さんは、天条院さんしか止められないし」
「じゃあ、ま、話すか。俺はまだあいつとちょっとしか関わってねぇけどよ」
「君のことは、ゴウカちゃんでいいかな」
僕たちは、ゴウカちゃんに向き合った。
「あいつは地球じゃザックて呼ばれて……あ、それは知ってんの？」
「人気もので、皆んなに慕われてて……」
「なんでも出来るのに、すげぇぬけてんだよな」
「そうそう！この前なんか……」
「でも、絶対諦めねぇ。根性ある奴だ」

「彼とは、ずっと前から一緒にいた気がするよ……」
半壊した街で、僕たちは結城君の話を続けた。ゴウカはあまり話さなかったし、返事も、耳をすませないと聞こえないくらいだったけど、楽しそうにしてるのが伝わってきたから、話は弾んだ。なんとなく、アシュラさんの話はしなかった。
ずっと、この時間が続いて欲しい。スキンヘッドのモジャックさんに見守られながら、僕はそう思った。結局モジャックさんのアフロは、二時間どころか、一秒も燃え残っていなかった。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第16話「悪魔　vs　天使」

ーメモルゼ戦艦ー

『キャー！』

『なんだこいつの銃……オンナにっ!?』

『た、助けて！』

『ホーレンさま～！』

ついさっきまで男しかいなかった戦艦が、女の悲鳴で埋め尽くされている。

「どうなっているんだ！たった2人の侵入者になにを手こずっている。しかも両方女だろ」

『それがホーレン王子、1人の女が謎の光線銃を持っていて、それに撃たれるとお、女の身体に……』

『しかももう1人は着衣消滅ガス弾を投げてきますから、あっ、キャッ！見られちゃうぅっ！』

『もう戦えなーい！』

「助けにいってやれよ、ホーレンちゃん。部下なんだろ」

「そういう訳にはいかないよ、アシュラちゃん。あの銃に撃たれれば、僕まで女になってしまう。

君は新郎のそんな姿を見たいかい？」

「呆れるぜ。女の体になってでも戦い続けんのが男だろ」

「そ、そんなことは神が許さない！」

「……天使の掟はわかんねぇな」

私はウェディングドレスを着せられて、モニターの前に座らされている。横には慌てふためく、タキシードを着たホーレンちゃん。男らしくなったとか言ってるけど、昔のまんまだ。まぁ無理やり私を奪いにきた根性は認めてもいい、こんな卑怯な手段じゃなけりゃね。

っていうか、撃たれたら女になる銃って、他にもあったんだな。昔ママに教えてもらって、同じものを造ったことがある。名前は確か……そうそう、ころころダンジョくん！よく遊んだなー。あれどうしたっけ……。

そうだ。鉄砲みたいな形だから、もしもの時は、1番鉄砲が上手いザックに使って貰おうと思って、箱に隠しておいたんだ。
はぁ、
（ザック……）
「ん？」
私はモニターに映る、2人の侵入者を見た。
あれって……、
「マジカルキョーコとブルーメタリアじゃん!!」
うそ、なんでこんなとこに!?キョーコは火使ってるし、本物だ!!
「ねぇ、ホーレンちゃん！私あの2人に会いに行きたい！」
「な、なんでそんなこと」
「だってマジカルキョーコだよ！大好きなんだよ私。ブルーメタリアはお前のママも演じてたし、知ってるだろ？」
「そ、そんなの現実に存在するわけ」
「お願いっ、行かせて！じゃあ一緒に行こうよ！」
「駄目だアシュラちゃん。君を危険な目に合わせるわけには……」
はぁ。
かわいそうだけど、仕方がない。
ブチッ
私はドレスのファスナーから、隠していた万能ツールを取り出し、椅子に括られた両手の縄を解いた。
「ホーレンちゃん、ごめんな。お前かっこいいし、私よりいい女見つけられるよ。
だから私は、ザックと結婚する！」
椅子を蹴っ飛ばし、万能ツールを剣に変えて、ドアを斬り裂き、脱出する。
「アシュラちゃん！」
ホーレンちゃんの叫びを背に、わたしは艦内を走り抜けた。
タッタッタッタッ
（確かこの角を曲がった先に……）
私が角を曲がろうとした時だった。

「いい感じだね！ザラちゃん」
「うん、ここを曲がれば艦長室……」
ダッ
……
探していた2人と、鉢合わせる。
「……アシュラちゃん」
そう言ったブルーメタリアは、私のよく知ってる奴だった。
「ホリー。なんでブルーメタリアの格好を？」
「そういう設定なのよ！私がこのザラちゃんと一緒に、あんたを助けに来たの」
私はホリーの隣にいる、マジカルキョーコらしき女の子を見た。
「私、夕崎ザラです。よろしくね」
黒髪で、真面目そうな顔の子が頭を下げる。
「あ、うん、はじめまして。助けに来てくれてありがとう」
私が人見知りなのは仕方ないとして、ザラも随分動揺している。隣のホリーに、何か隠していることでもあるのだろうか。それとも私に？
確かにキョーコに似てるけど、やっぱり違う。どうしてだろう、初めて会ったはずなのに、私この子のこと、よく知ってるような……。
でも私の思い巡らしは、ここで途切れた。
「アッシュちゃん。なんでウェディングドレスなんか着てるの？あーもしかして、本当にホーレンと結婚するんだ!!仲良かったもんねーー」
ホリーのこの一言で、完全にブチ切れたから。
「は？私はザックと結婚するし。知ってるだろ」
私も負けじと言い返す。右肩に、学校の屋上で智子に触れられた感触が蘇る。
ホリーの眉が、ピクリと動いた。
「じゃあ、これで終わりね。ザックも脱獄出来たみたいだし、私も今日でアイドル辞めるから。

ザラ、一緒に帰ろ」
「う、うん。ザク郎も、アシュラに会いたがってたよ」
私に気を利かせたのだろう、ザラのこの言葉が、最悪の展開を招いた。
ホリーが鬼の形相で、隣のザラの首を絞め上げる。
「ねぇザラちゃん……何言ってるの？何でそんなこと言う資格あるの？何でアシュラの味方なの？ねぇ!?あなたざっくんの何を知ってるのよ!!」
かわいそうなザラは、恐怖に顔を歪めている。
「離せよホリー。八つ当たりすんじゃねぇよ。
余裕ないからって」
悪い癖で、私もムキになってくる。頭に血が上って、まともな判断が出来なくなってきた。
「へぇ、ザラ、ザックの知り合いなんだ。なんか似てるし、親戚かなんかか？」
「う、うん、まあそんな感じ」
「うるっさいわね！あんたざっくんのことなんて何も知らなくていいのよ！」
「あ？」
「てかなにそのドレス、ぜんっぜん似合ってないし。あんたいつものジャージでいいじゃん？結婚式も。ウェディングジャージｗｗｗ」
プッツン
「……言ってくれんじゃねぇかこの糞ビッチ……。私だって着たくてこんなもん着てんじゃねぇよ!!
ペケ!!」
ポケットから簡易ペケバッジを引っ張り出し、首にかける。
「チェンジ!!ジャージ形態（フォーム）!!」
私は目の前のホリーをボコボコにするため、いつものジャージにフォームチェンジしようとした。
だが、
『……システム……故障中……』

最近使いすぎたのか、ペケが不調を訴え、停止する。
ブウン
そして、
私の体を覆ったのは、ジャージじゃなくて……
いつの日か、私がザックにだけ見せるために、こっそりデータに入れといた、

高級なランジェリーだった。
「……ッ／／／」
女しかいないとはいえ、羞恥心で前が見えなくなる。ベールをしていないことを後悔した。
「あ、あなた、こんなとこでなんて格好っ……」
ホリーが顔を真っ赤にさせ、口を押さえる。
てかザラ……なんで女のくせに鼻血出してぶっ倒れてんだよ。やめて、死ぬほど恥ずかしい……。
私は頭に血が上って、もうわけがわからなくなって、開き直ることにした。
「そ、そうだよ。見せつけてやってんだよ！私はこれを自分で選んだんだ。ザックに見てもらうために」
「は、はぁ？なに言って」
「お前のその服は何だよ？ママのコスプレ？そうだよな、最近「男」と分離したばっかだし、私みたいにスタイル良くないから、こんなオトナっぽいの着れるわけないよな！」
「……言わせておけば……」
ホリーがブルーメタリアの衣装を脱ぎ捨て、どこに持ってたのか、瞬時にフリルのついたキャミソールに着替えた。ふ、ふん。アイドルだけあって、まあまあかわいい体型してんじゃん。お人形さんみたいだな。
待ってろ、すぐ木偶人形に変えてやる。
「おい、ザラ」
私たち二人は、目を回してふらついてるザラに向き直った。

「お前、ザックのこと知ってんだろ？」
「ざっくんと、私か、アシュラ」
「「どっちがお似合いかな？」」

私を助けるために、わざわざここまで来てくれた子に対して、私たちは怒りにまかせて超個人的な選択を押し付けた。

「うーん……」

沈黙の中、
困り果てたザラが、ゆっくり自分を指差す。

「……私、かな？」

「……」
「……」
「えへ？」

「……ふーん」
「ふざけるんだ……」

「燃やして解決ッ!!」
ドゥン!!
ザラは炎とともに姿を消した。

「……なにも解決してないんですけど？」
「その場しのぎはよくねぇなぁ」
後できっちり教えてやらなきゃな。
でもその前に……、
「お前だ」
目の前の、因縁の相手を睨みつける。

「お前とはいつか、殴り合わなきゃいけないと思ってた」
「私はずっと、その機会をうかがっていたよ」
そう言い捨て、ホリーが腕を上げて構える。ああ、はいはい、ムエタイね。最近アイドルの間で流行ってんな、スタイル良くなるとか言って。お前がやったところで怖くもなんともねぇよ……。
私は左足を前に出し、すべてを拳にかけるボクシングの構えを取った。
「馬鹿ね。私のキックに耐えれると思ってんの？」
「テメェの短足なんか当たんねーんだよ、この糞ビッチ」
「……くたばれこのゴリラ女ァーッ!!」
「黙れメンヘラ野郎ーーッ!!」
ドゥッ!!
互いの距離が縮まる。
「シュッ！」
ホリーが背を向け、バックスピンキックを放ってきた。
（そんなもん当たるかよ！）
バックステップでかわした直後、一気に間合いを詰め、
ドゴッ
相手の肝臓にボディを入れる。
「うぐっ」
バン！バン！
ホリーのガードが下がったところに、私はパンチのラッシュを叩き込んだ。
「ホリー！私たち、前まで仲良かったじゃねぇか。好きな人が被ったからって、いきなり私にひどいこと言ったり、ザックに無理やり迫ったり、そんなっ……」
「仲良かった、って……？」
ガツン！
（ッ！）
こいつ、私のパンチを、肘で止めっ、
「あんたは私を、発明品の実験に使ってただけじゃない!!」

ホリーが言い返し、
ドッ
「っく！」
強烈なフロントキックッ！
私のお腹が弾かれ、一気に間合いが開く。マズい、これはキックの距離……、
「いっつも！」
ズバン！
「いっつもっ！」
ズバン！ズバン！
「私がざっくんと、おままごとするたびに、
あんたの発明品で、私を勝手に男にしたり、動物と入れ替えたりしてっ！
私がお嫁さん役になるの、邪魔したじゃない！
絶対に許さないっ!!」
ズバァン！
ミドル、ハイとキックを喰らい、私はグラつく。相当練習してやがる、凄いキックだ。
だが私も負けてられない。
ビュンッ！
最後のハイをウィービングでくぐり抜け、再び間合いを詰める。
「お前こそ、私が勉強してる前で、これ見よがしにザックとおままごとなんてしやがって……、
お前がお嫁さん役になったら、マジで、あ、あんなこととか、しようとするだろ！
それに」
胸を反らせ、右手を振りかぶる。
「ペットになって喜んでんじゃねーーっ、この変態ぃいっ!!」
ブゥン
私の右腕が風を切り、
ドガッ

ホリーの頭に命中する。手が痛い。でも流石に顔を殴るわけにはいかない。アイドルだしな……

ガスッ

（ッ!?）

……ホリーの拳が、思いきり私の顔面を打ち抜いた。

テンメェ　笑

「それの何が悪いのよ?ざっくんは「私の王子様」なのに……っ。だって、ざっく、ぐすん、ざっくんはぁっ」

言い終わらない内に、急にホリーがベソをかき出す。

「アシュラの、チャームの能力に惑わされてるだけでぇ！本当はあんたのことなんて、なんとも思ってないんだからぁっ！ず、ずるいよ。アッシュは……、何であなたばっかり、私には……」

こいつも何も変わってないな。

「だからっ！私が、あんたの顔をボコボコにして、チャームの能力なんか無くしてやる！ぜったい、絶対ざっくんを、私のものに」

「いい加減にしろーーっ!!」

ドゴォッ！

私はホリーの顎に、全力でアッパーを放った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

……怖い　笑　怖すぎる。

俺はダッシュで道を戻り、角に隠れた。生きた心地がしねぇ。宇宙一かわいいお姫様と大人気アイドルが下着で殴り合ってる光景とか、滅多に、いや絶対に見れるもんじゃないが、今は正直近づきたくない。もうあいつらの前で「夕崎ザラ」にはならないほうがいいな。

でも……2人とも、あんなに俺のことを……。

俺はどうなんだろう。

ホリーは、申し訳ないが、ちょっと好きにはなれないな。推しが強すぎるし、好き嫌いも激しすぎる。そりゃかわいいとは思うし、たまにドキッとすることもある……けど。

意志の弱い俺のことだ。これからどうなるかわからん。
アッシュ……あんたはずるい。ずるいですよ。俺のこと、好きだ、って言うくせに、自分からベタベタしたりはしてこない。結構あっさりしていながら、さりげなく気配りしてくれる。そんな風にされたらこっちが意識してしまいます。
ちょっと見ない間に、ずいぶんしっかりしたもんだな。
学校でも、俺との関係は知り合いとしか言ってないらしい。宇宙の混乱を避けているのか、あるいは、俺の気持ち……俺がまだ、ゴウカを忘れられないことを、配慮しているのか。
俺は下っ端の料理人だ。アッシュの能力と権力なら、俺を無理やり惚れさせて夫にするくらい簡単に出来たのに……。

「いい加減にしろーーっ!!」

廊下から響く、アッシュの怒号。次の瞬間、ホリーの膝が床に着いた音が聞こえる。
出た！あれはデビルーク伝家の宝刀「いい加減にしなさい（しろ）パンチ」ッ！
全盛期のララさんが、数々の婚約者候補をぶっ飛ばした技だ。
やっぱり、アッシュもちょっと怖い……、
「ザックは「もの」じゃねぇよ！」
……え？
「どいつもこいつも、自分の都合でザックを振り回して……、自由にさせろよ!!」
アッシュ……。
「あいつは、ずっと……子どもの時から、悪い大人の道具にされて、デビルークでは、私みたいなガキの世話させられて、
今やっと、やっと自由になれたんだよ。地球で。こんなに遠いところまで、たったひとりで逃げてきて、やっと……」
ホリーに向かって、泣きながら、絞り出すように紡がれるアッシュの言葉に、俺は身動きが取れなくなっていた。

「……そんなこと言って、それじゃあアシュラちゃん、ざっくんと結婚したくないの？」
「……向こうにその気がないんなら、結婚もなにもないよ」
「……なら何のために」
「……私、決めた。
王宮（うち）に帰る」
!?
「ここにいても、今回みたいに、皆んなに迷惑かけるだけだしな」
「な、なな何言ってるの!?あなた、今そんなことしたら殺される」
「構わねぇよ。
ザックが自由に生きれるなら、私はそれが一番いい」

……俺が、自由に生きる。
そんなこと、誰かから言われたのって、久しぶりだな。

「お前の言う通りだよ、ホリー。私はこの顔のおかげで、周りも、自分も不幸にしてきた。
だから初めて、私の顔を真っ直ぐ見てくれたザックと、ずっと一緒にいたいって……私とザックさえ幸せなら、他の人なんてどうでもいいって、最初はそう思ったよ。
でも、違った。
今、ザックには友だちがいて、私にも、心配してくれる友だちがいる。
だから、一人、幸せにしたいと思う人がいるなら、他の誰も不幸にしちゃいけない。地球に来て、私はそれがわかったの」
「……」
「私は、もう誰にも、好きな人の自由を邪魔させない。
それが私自身だっていうなら、私は……」

……。
アッシュの、この言葉を聞いた途端、

俺の中で、何かが燃え上がった。

「……い、いみわかんないことゆうなぁーーっ!!」

「なんでわかんねーんだよこのくそガキーーっ!!」

ドガッ

ボガッ

バガン

（……何でそうなる）

せっかくアッシュがいい事言ったのに、２人がまた喧嘩を始める。

その時、

俺の頭上に巨大なハンマーが振り下ろされた。

ガッ！

すんでのところで腕を上げ、ハンマーを払い、横に避ける。廊下がめり込み、煙を上げる。

「マジカルキョーコ、まさか本当に存在していたとはな」

……やっと出てきたか。

この戦争の首謀者、ホーレンがハンマーを持ち上げる。

「君は地球人じゃないだろう？なのに、なぜ僕の邪魔をする。

君は何者なんだ、答えろ！」

「おぼえてねぇのか、「ホーレン王子」。昔よく遊んだのによ」

「……何？」

「仕方ねぇ、また遊んでやるか」

俺は立ち上がり、自分のこめかみにころころダンジョくんを当てる。

「今度は本気でな」

バチチッ！

結城ザク郎に戻り、ホーレンを睨み上げた。

「……よお、上がって来たぜ。地球から」

「お、お前はっ」

ホーレンが後ずさる。

「久しぶりだな。ちょっとは強くなったのか？」
「き、貴様……」
「こいつは使わねぇ、これは男の闘いだ」
ダンジョくんを廊下に投げ捨て、殺気を放つ。
「俺が相手だホーレン。よくもやってくれたな、俺は今ブチ切れてんぞ。これ以上、お前には地球にも、アッシュにも触れさせねぇ。
さあ、殺り合おうぜ！」
俺はハンマーを踏み折り、ホーレンの顔に殴りかかった。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第17話「ハーディス　vs　ゼウス」

ーメモルゼ戦艦　会堂ー

ガシャーン！

ホーレンの体を壁に叩きつける。勝敗はあっさり着いた。さすがに兵役一年目の奴に負けるほど俺もなまっちゃいない。

「テメェのせいで、たくさんの人が死んだ。地球人も、メモルゼ星人もな。お前に王子の資格はねぇ。冠を脱いで銀警に出頭しろ。

それが嫌なら」

チャッ

「これで終わりだ」

俺は地球の看守が持っていた拳銃を、ホーレンの額に構えた。

「……お前に、何の権利があるんだ。結城」

ホーレンが、薄眼を開けて訴える。

「地球の権力者でもないお前に、僕を裁く権利があるのか？」

（権利……？）

俺は何故、ホーレンにこんなことを聞かれるのかわからなかった。

「……一応アッシュの護衛だからな。地球に侵略しなかったとしても、アッシュをさらった以上、お前を消す権利は十分あるだろ」

「それはアシュラちゃんが勝手に決めたことじゃないか。アシュラちゃんが、お前のことを好きだから、そうなっているだけだ！恵まれた奴め……」

壁に手をつたわせ、ホーレンが必死で立ち上がる。

「僕は、お前がアッシュに出会うずっと前から、あの子のことが好きだった。どの婚約者候補よりも早くから、アシュラちゃんは僕と結婚するはずだったんだ。

もちろん、アシュラちゃんの顔を優しく見つめることまでは出来なかったさ！

でも、それが何だ!?僕は歯を食いしばって欲と闘ったよ！本当に、彼女のことを幸せにしたかったから……それで、上手くいっていた。

アシュラちゃんはまだ、結婚のことはよくわかってなかったけど、

いつか僕を、本当の王子さまだって認めてくれる日を信じて、僕は……生きてきた。
そしたら、
お前が来た」
ホーレンが、憎悪を込めた目で俺を睨む。
「チャームの能力が効かない。それだけの理由で、アシュラちゃんは、お前に恋に落ちた。
なんて不平等な世界だろう。
お前は僕から、無垢なお姫様を奪った。はじめにアシュラを奪ったのはお前の方だ!!」
「……勝手な奴だ」
「黙れ!僕はアシュラちゃんがいないと生きていけないんだよ。彼女がいるから、僕は……男らしく、生きていけるッ」
膝を震わせながらも、ホーレンはしっかり立ち上がり、俺に指を突きつけた。
「僕はアシュラちゃんの婚約者候補として、当たり前のことをしただけだ。もし、もしもお前と僕の立場が逆だったら、お前も僕と同じことをしていただろう」
「何?」
「愛する人が、自分のものにならなかったら、力づくで奪うしかない。お前もそうしていたはずだ」
「そんなこと……」
「いいや!絶対そうしたな、お前なら……僕は知っているぞ、結城ザク郎。
いや、
クロウ・キリサキ」
ホーレンが不敵に笑う。
「お前はそういう奴だ。そうだろ、運び屋め」
ガタ……
体に布をかけたアッシュが、同じように布を被せたホリーを抱え、会議室に入ってくる。

「……ザック……っ！」
こちらを見るなり、アッシュは目に涙を浮かべた。
……嫌なタイミングだな。
「アシュラちゃん、やっぱり、まだ結城のこと……。
くそっ！
ゲムー伯爵！」
怒り狂ったホーレンが部下の名を呼ぶ。すると奥から、燕尾服を着て、ステッキを持った紳士が登場した。
ゲムー伯爵。こいつもよく知ってる。モジャック将軍と同じ組織にいた奴だ。見た目は人間と変わらない。
顔がディスプレイになっていること以外は。
「さぁ、ゲムー伯爵。結城ザク郎に、
この宇宙を滅ぼす、ラスボスを見せてやれ！」
「了解」
ホーレンが命じるなり、ゲムー伯爵の顔に砂嵐が走り、
パッ
地球が映し出される。
半壊の彩南町。その中で座る、西連寺、古手川、そしてその前に……、
「見よ！これがこの宇宙のラスボス……、
金色業火だ！」

画面に、懐かしい少女の姿が映る。

「ゴウカ……」

俺は思わず、その名前を呼んでいた。
「……ゴウカちゃん、この子が……」
アッシュが、微かな声で呟く。
気配を感じたのか、画面の向こうから、チラと、ゴウカがこちらに顔を向け、

あどけない顔で、微かに笑った。
見えてるのか？
「この子がお前の「忘れられない」人だろう。
この子のせいで、アシュラちゃんがどれほど悲しんでいるか……」
「……なんでテメエがそんなこと知ってる」
「調べたんだよ。軍に入隊した後、僕はお前を倒すために、必死で重要機密書類を漁った。お前のことを知るためにね。そしてわかった……結城ザク郎の正体」
！
「僕とホリーの母さん、ルン・エルシ・ジュエリアの友人に、地球でアイドル活動をしていた「霧崎恭子」という人物がいた。
地球人とフレイム星人のハーフ、つまり「炎を操る」人物だ」
「!?……マジカルキョーコ……まさか……」
アッシュの体が、小さく震える。追い討ちをかけるように、ホーレンが話し続ける。
「その人物に、1人、
子どもがいるという情報があった。
お前だ。クロウ・キリサキ。お前は偉大なるデビルーク王であり、我らが父、結城リトと、彼のハーレムの1人、霧崎恭子の間に生まれたんだ」
アッシュが、怪訝そうに眉をひそめる。
俺は何も言わず、こいつの話を聞くことにした。
「お前はどういうわけか生まれたと同時に捨てられ、宇宙の密輸組織に利用された。運び屋としてな。
その時、お前は初めて、ゴウカ……いや、「エリス」と出会った。
まだ兵器になる前の「商品」としてのだ。
彼女を忘れられないのは、贖罪のつもりか？」
「……」
「その後、デビルーク王室で、結城美柑に養子として迎えられ、そこで料理を学んだそうだが……。その炎、料理をする前は、なんのために使ってたのかな。

お前は犯罪者だ、クロウ・キリサキ。闇に生きるべき存在だ。お前なんかに、アシュラちゃんを渡してたまるか」
「そんなの、お前が決めることじゃない。ザックは……」
アッシュがホーレンに言い返す。
「そう言うけどね、アシュラちゃん。結城ザク郎が君のことを好きじゃなかったら、どうしようもないよ」
「っ……！」
「言ってたよね、アシュラちゃん。結城が君のことを好きじゃなかったら、デビルーク星に帰るって。
だからその時は、
僕が護ってあげる」
「……お前がデビルークの奴にかなうわけが」
「約束しろッ!!」
ガチャン！
ホーレンが、真っ白に装飾されたアサルトライフルの銃口を、アッシュに向けた。
「……ッテンメェエッ!!」
俺は思わず叫び出しそうになる。
「もし結城が君と結婚する気がなかったら、僕のお姫様になるんだ。アシュラちゃん。
子どもの頃、約束しただろう？」
「……おぼえてねぇよ」
「さあ結城ザク郎」
今度は俺に銃を向け、ホーレンが声高に叫ぶ。
「今、この場で答えろ！
お前は、アシュラちゃんのことが好きなのか!?
言え!!」

アッシュが、力なくこちらに顔を向ける。
ゴウカは何も言わず、ゲムー伯爵の画面からじっとこちらを見つめていた。

ホリーも、微かに目を開けている。
俺がＹｅｓと言えば、ゴウカによって、地球が燃える。
俺がＮｏと言えば、アッシュはホーレンと結婚する。

……そういうつもりだったんだろうな。

「言う必要ねぇよ」
俺はホーレンに向かって答えた。
「……何？」
「言う必要はねぇ。お前に脅されねぇでも、俺は好きになった人と、結婚したい時に結婚する。地球人がやってるのとおんなじだ」
「そんなことを言って……」
ホーレンが銃を下げ、二、三歩近く。
「そんな風に煮え切らないから、皆んなが悲しむんだ。お前は地球人じゃない。異星人、しかもデビルークの王女に愛された男だ。宇宙の命運を背負う覚悟がいるだろう！
お前は僕らの父、結城リトのように、皆んなを愛せるのか!?またハーレムをつくるのか!?そしてこんな争いをまた繰り返すつもりなのか!!?」
「パパを否定するなっ……」
小さな声で、アッシュが訴える。

「俺は結城リトの子どもじゃねぇ」
俺は、勘違いしているホーレンに言った。
「……なんだと？」
「さっきのお前の情報な、だいたいあってるぞ。俺のお袋のことも、俺がなんの罪もない女の子を闇の組織に運んでって、それが金色業火になったってのもな。
贖罪？ふざけんな、そんな甘いもんじゃ済まねぇよ。今でもまともに眠れねぇんだよ、こっちは。
死ぬまで許されるつもりもねぇ。

でもな、二つ抜けてる。一つは、何で俺が捨てられたのか。これは俺も知らねぇ。お前が知ってるかと思ったんだが、期待外れだな。
そしてもう一つが、
俺の親父だ」
「……」
「俺に結城リトの血は通ってねぇよ、ホーレン。俺はお前ら兄弟と何の関係もねぇ。どこで暮らそうが、誰を愛そうが、
俺は自由に生きる」
もう、隠しはしない。
慄くホーレンに「黒い装飾銃」を構える。
「そ、その銃は、まさかっ……！」
あのドクター・スメラギに出会ったときからつっかかっていたものが、晴れた気がした。

「よう、ジュエリア王子。
不吉を届けに来たぜ」

―――――――――――――――――――――――――――――

「クロ……お前が、あの伝説の殺し屋の、息子……」
ホーレンが後ずさりながら、そう呟く。
バリィン！
「グッ」
ゴウカちゃんが映っていたゲムー伯爵の画面が真っ二つに割れ、真っ黒になった。

ザックが、殺し屋の息子。
噂は本当だったんだ。

ザックの両眼から、猛烈な殺気が放たれている。学校の校庭で暴走していた時とは違う。自分の意思で、闘いを覚悟している眼だ。
「くっ」
バリバリバリバリバリッ！

ホーレンちゃんが、白い小銃を撃ちまくる。プラズマみたいな弾丸が、柱を壊す。あの銃は「ゼウス」と言うらしい。アダマンという金属で出来ていて、ザックの「ハーディス」に対応して作られたそうだ。さっきホーレンちゃんから聞いた。

でも、いくら銃が強くたって……。

ドウッ、ドウッ！

柱に身を隠していたザックが、二発、炎の弾丸を放つ。

「フンッ」

ホーレンは回転してかわし、

バリッ！バリバリバリバリッ！

壇に隠れて稲妻を連射した。

その瞬間、

「シャッ！」

ザックが飛び出し様に包丁を振り抜き、

バチッ

ドガァーン！

雷を弾いた。

会堂の壁に、痛々しい穴が空く。

「くそぉぉぉーーっ!!!」

ホーレンが歯を食いしばり、銃剣を取り付け、突撃する。

ハーディスと包丁をクロスさせたザックが、今まで見たこともないスピードで交わった。

ダン！

ホーレンは、真っ二つに折れたゼウスとともに、ゆっくりと宙を舞い、

ドスン

地に落ちた。

ゴウッ

「……燃やして、解決だ」

ザックはそう言って、ゼウスの残骸を燃やした。

「ザック……」
「……遅くなってすいません、アッシュ」
寂しく笑いながら、愛しい人が答える。
「それと……ごめん。今まで黙ってて。
アッシュ、俺は悪い人間です」
「でも、誰も殺してない。今も、学校でも、ザックは」
「偶然ですよ。俺は殺し屋の」

私はザックにかけ寄り、
そっと、頬に唇を押し当てた。

「……私こそ、ごめん、ザック。　お前のこと、何にも知らなかった」
「アッシュ……」

「あ、あのさ。本当に、私なんか邪魔かもしんないけど、やっぱり……
ほら、お前、私の家臣だしさ！一応ね」

ああーっ！
なんでこんな馬鹿なこと言うんだよ。

「私のこと、まだ好きにならなくていいけどさ。
もうちょっと、一緒にいていい？」

上目遣いで、恐る恐る、ザックの顔を見上げる。

「は、はい！俺なんかでよければ」
ちょっと慌ててたけど、やっぱりザックは優しい笑顔で、そう言ってくれた。
「じゃあ行き先は……」

「もちろん、地球に帰ろうぜ」
「ホリーも連れてこう。ホーレンは自分で帰れるだろ。
えっと……」
「抱えてやってくれよ。寝てるし、気づかねぇよ」
ホリーを抱えて出口へ歩く、ザックの背中を追う。

ゴウカちゃん。

あの子が、画面に出てきた時の……、
ザックのあんな顔、初めてみた。

胸が締め付けられる。

聞いてみようかな。

（やっぱり、ゴウカちゃんが好きなの？）

言えない。それだけは絶対に……。

「あ……あれ？」
目の前がかすむ。
（なんで、なんでだよ？
ちくしょう……止まれよっ）
後ろを向き、涙を拭う。払っても払っても、涙は止まってくれない。
「アッシュ、大丈夫ですか？」
ザックの呼ぶ声が聞こえる。
「な、何でもないよっ！」

どうしよう……。
そうだ！忘れてた。
私はベールを付け、かけ出した。

「ごめんごめん。行こうぜ」
やっぱり私には、これが似合って……
「それ、いらないいっすよ」
「え？」
ザックが、私のベールを一気に剥がす。
「うわっ!?」
びっくりして、かかとを滑らす。後ろにこけそうになった時、私の背中を、ザックの左手が支えた。
すぐ上に、大好きな人の顔がある。
私の泣き顔も、きっとまっ赤になってる顔も、全部見られちゃってる。

せっかく隠してたのに……。

「俺は他の奴とは違います。だから、俺の前では、それ、付けないで下さい」
少し吃りながら、それだけ言って、ザックはまた歩き出した。
再び、でも、さっきとちょっと違う涙が溢れてくる。
もう隠すものはない。
「おりゃーーっ！」
私はザックに飛びかかり、両目をふさいでやった。
「いててて っ！何するんすかっ!?」
涙を流して、笑いながら、必死でザックの頭にしがみつく私の顔は、きっとものすごく不細工だろう。ザック以外の、チャームの能力なんかにやられる全宇宙の男たちに、この顔を見てもらいたいと思った。
――――――――――――――――
複雑な思いで操縦桿を握る。
大気圏を抜けたら、もう彩南町上空だ。
（ゴウカ……まだいるのかな）

さっきはアッシュに、凄いことしちまった。
アッシュが泣いてるのに、耐えられなかったから。
（俺も勝手だよな）
ホーレンの問いを振り返る。
（俺は、アッシュが好きだ）
自分の中に、はっきり断言出来る自分がいる。
でも、さっき久しぶりにゴウカを見た時、心が揺らいだ。昔を思い出してしまった。
（直接会ったら、また抜け出せなくなんのかな）
それが怖くて、ゴウカがいるのか、不安だった。

地上に着く。
俺と、ホリーと、ベールをしたアッシュが、アックスを降りる。
「お帰り！結城君、アシュラさん、ホリーさん。無事だったんだね」
「あんなとこから3人で抜け出してくるなんて、や、やるじゃねぇか」
「お前らこそ、生きててよかった。悪いな。巻き込んじまって」
西連寺と古手川が迎えてくれる。
「……え、えっと、なんか金髪の女の子、いなかったか」
俺は辺りを見渡し、恐る恐る聞いた。
「ああ、ゴウカちゃん！」
西連寺からその呼び方を聞いてドキッとする。
「もう、どっかいったぜ。しばらくいたんだけど、急に空を見上げて、何も言わなくなったと思ったら、また青い火になって消えちまった」
「ずっと結城君の話してたんだよ」
俺は安心したような、残念なような思いで、二人の話を聞いていた。
だが、
「そうだ、アーサーは？あいつはどうした!?」
急に他の仲間を思い出し、背中に冷や汗が流れる。
西連寺と古手川が、苦しそうに俯く。
（嘘だろ、アーサーッ！）
俺は瓦礫の山を駆け上がった。

「アーサーッ!!」
　瓦礫の向こうに、跪いたアーサーが見える。
「アーサー、大丈夫か!?」
「……ザク郎殿……」
　アーサーの悔し涙が、膝に落ちる。そこには、俺のよく知ってる人が、目を堅く閉じて横たわっていた。

「……九条……先輩……」

「彼は精神が砕けちまったヘア」
　隣で、モジャック将軍が呟く。
「お前が行った後、デビルークの援軍が来たヘア」
「!……やっぱり来たか……」
「そいつらに対抗するために、わしらは戦った。この九条さんが一番頑張ってくれたヘア。だが……あの「赤い死神」が、九条さんの精神を刀に侵食させて、暴走させたヘア。止められるのは、この天条院さんしかいなかったヘア」
　デビルークと戦って、よく生き残れたな……。
「申し訳ないッ……、九条殿……」
　確かに、先輩は息をしている。
「そうか、よく止めてくれたな。大丈夫だ。この人はそんなヤワじゃない、絶対復活する。とりあえず銀河病院に連れてってくれ」

……参ったな。
　地球人唯一の銀河警察官がいなくなったら、

　今回、いやそれ以上の動乱が増えるだろう。
　しかも……、
（「変身兵器」）
　ゴウカも、タナも動き出したんなら、もう一人、「あいつ」が出てこないはずがない。

もう、逃げ場はねぇな。

アッシュが、瓦礫を登って来る。
「これからどうするんだヘア」
モジャック将軍が口を開く。なんでこいつスキンヘッドなんだ？
「地球に残る」
「そうか。わしは髪が伸びるまで、宇宙に帰るヘア。このままじゃ、家族に顔見せ出来んヘア……」
「達者でな。モジャック」
「ありがとう」
「早く行け。お前らのサラサラした髪を見てると、アフロにしたくなってくるヘア……」
「じゃあなアーサー、また学校でな」
「西連寺、古手川、みんな、本当に迷惑かけたな」
「いいよアシュラさん。無事で良かった」
「ふん、お前ら、俺のいねぇとこでハレンチなことしてたらぶっ殺ぉす!!」
「し、してねーよ！」
俺たちは無理やり笑い合いながら、それぞれの家に帰っていった。

ー翌日ー

目覚まし時計の音で、目を覚ます。
微かな日差しが、顔を照らす。
「ああ、終わったんだな」
たった1日の出来事とは思えないほど、疲労が溜まっている。
今日は……、
「よっしゃあああっ!!日曜日ッ！」
テンションのおもむくままに、俺は右手でガッツポーズを……、

ビクンッ！

……えっ？

布団が跳ねたんだが。

俺はゆっくり、握りしめた右手を見た。

（……尻尾ぉ？）

「アッシュぅっ！」

布団を剥ぐ。その瞬間、俺はまた鼻血を出しそうになった。

「ザック……私、怖かったから、ちょっとザックの隣で寝ようと思ったら、眠っちゃって……」

「ななな、とにかく服を着て……」

コロコロッ

床に、黒くて楕円形な物体が転がってくる。

「これ……爆弾？」

ドガン！

壁が崩れ、

「アシュラ……さっっそく、ざっくんたぶらかしてるじゃない。許さないっ！」

ホリーが現れた。

「ホ、ホリー！勝手に入ってくんなよ！」

「なんで？私はただ忘れ物を届けに来ただけだよ」

「わ、忘れ物？」

「バーン」

ホリーは腰をくねらせ、西部劇のガンマンのようなポーズで「ころころダンジョくん」を取り出した。

「そっ、それは」

「えいっ！」

バチチッ！

２人の前で、俺は「夕崎ザラ」になる。
「やっぱりねー！」
「あ！う、うそ、お前、ザック……」

ヤバい。

「ねぇアシュラちゃん？私ざっくんと空飛んだんだよ！ロマンチックでしょー？」
「く、なんだよ！ザックは私を助けにきてくれただけだろ！」
「えーそうかなぁ？」
「おい、ザラ！」
「は、はい？」
俺は無抵抗のまま、甲高い声で答えた。
「忘れてないよね？ザラちゃん」
「もう逃げんじゃねぇぞ」
二人の顔が、俺の目の前に迫る。

「ザックと、私か、ホリー」

「「どっちがお似合いかな？」」

俺はどこにいても、動乱に巻き込まれるようです。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

＊登場人物紹介・宇宙編＊

○霧崎　玄凰（クロウ・キリサキ）
かつて宇宙に名を馳せた凄腕の運び屋。「黒い装飾銃」を愛用し、精神エネルギーを爆裂弾に変える能力を持つ（弾かれたものも弾丸と見なされる）。ある事件をきっかけに失踪していたが、現在は「結城ザク郎」として地球で暮らしている。

○金色業火
通称ゴウカ。天使の笑顔を持つ、宇宙一の暗殺者。自然に由来する変身攻撃を行う。「争いの女神」と呼ばれる生体兵器であり、全宇宙に戦火をもたらす、はずが何故か地球で普通に生活している。

○ハンニャ・アスタ・デビルーク
通称ハン。デビルーク第一王子。動物と対話する能力を持つ、精神年齢が低すぎる脳筋戦士。

○ビシャモ・ベリア・デビルーク
通称ビシャ。デビルーク第二王子。植物と対話する能力を持つ、道徳観念が破綻したポンコツ策士。

○黒咲　汰奈
通称タナ。「死神」の異名を持つ、デビルーク情報局の工作員。機械的な次世代変身能力を有する生体兵器でもある。感情的で捉えどころのない危険な「男」。

○ニュクス
ニュートリノで構成された擬似生命体の実験兵器。強者に寄生し、破壊を楽しむジャイアニストな戦闘狂。「ニューくん」というあだ名を気に入っているが、下僕のタナにしか流行っていない。

○皇　零士（ドクター・スメラギ）
宇宙最高の闇医者兼科学者。一度壊滅したソルゲムを再結成させた。クロウに対し、銀河を巻き込む壮大な復讐を企てる異星人。

●デビルーク
デビルーク王家が統治する巨大星間連合国家。先代デビルーク王

ギドの時代に、史上初の銀河統一を成し遂げた。
　デビルーク星は地球より質量が大きく、より強い重力が働いているが、そんな環境下でヒト型の生命が活動出来る理由にデビルーク星人特有の尻尾が関係している。これは単独でも強力な武器になる他、身体にかかる負荷を制御する働きを持ち、これによりデビルーク星人はその体格に関わらず、重力に囚われない優れた運動能力を発揮する。しかし以上の重要な役割を果たす故に、尻尾には多くの神経や器官が集中するため、非常に敏感である。たとえ僅かな刺激でも、尻尾への接触はデビルーク星人の身体機能を大幅に低下させてしまい、これは同種族の数少ない弱点の一つとなっている。
　そしてもう一つ、力を使い果たすと身体が小さくなってしまうという致命的な弱点が存在する。この性質のため、交戦中も、デビルーク星人は実力をセーブして戦う必要があり、この点で常に限界以上の力を強いられる他星人に精神面で劣るという指摘もある。銀河統一戦争を終結させたのも、リミッターを解除したギドの戦闘の功績が大きく、あれが無ければデビルークが勝利することはなかった、つまり通常のデビルーク星人は決して無敵ではないという風潮が広まり、ギドが退位した現在、銀河に再び不穏な空気が高まり始めている。

●銀河警察

　銀河の治安維持を務める行政機関。銀警とも。捜査官にはかなり強い権限が与えられており、逮捕や諜報、場合によっては殺人まで許可されている。現在の本部はデビルーク星にあるが、情勢を考慮し、地球に近い火星へ移転させる計画である。
　公平な立場を掲げているが、実際は銀河のパワーバランスに左右されることが多く、近年は専らデビルークの主張に従っていた。しかし、デビルークにおけるギドの退位やリトの即位に伴い、銀河の均衡が不安定になったこと、また弱小種族である地球人が捜査官に任命されたことなどから、現在は銀警本来の理念を取り戻しつつある。
　銀河最速の宇宙船を保有しており、あらゆる星間を短時間で移動する。

●ソルゲム

宇宙最大のマフィア組織。デビルーク王室と敵対しており、銀河に再び戦乱を起こすことを目的として活動している。武器、麻薬等の密輸、密入国、人身売買、臓器提供、違法賭博、廃棄物処理、売春、殺人請け負い等幅広く活動し、各惑星の暴力団組織に加え、政治家や少数民族、民間企業にも渡る広大なネットワークを有している。

以前、殺し屋「クロ」によって壊滅させられたが、ドクター・スメラギ等の手によって再結成された。彼の加入により、事実上最先端の宇宙科学技術を有し、銀河最大の脅威となっている。

第18話「炎の臨海学校」

―午前6時　結城宅―

「ザック～！」
アッシュの声に目を覚ます。
部屋の外から、アッシュが俺を呼ぶ声が聞こえる。これは「さっさと出てこい」の暗黙の合図です。
「ザッ、クーー！」
わがままにもほどがあるが、さすがは王女、本人に悪気がないとこが凄い。
（おかしいな。いつも俺より起きるの遅いのに）
「おーい！早く来いよぉ」
「はいっ、ただいま」
俺も長年世話役をやってたせいで、自動的に部屋から飛び出した。
「おはよう！ザック」
眩しい笑顔とともにアッシュが振り返る。左手にはでかいバッグを握っています。
「……なんすか？それ」
「は!?」
俺の問いに、アッシュがキョトンとした表情を見せた。
「……臨海学校」
少し首を傾げてアッシュが答える。可愛らしいけど、なんか無言の圧力がこめられています。
「……いや、俺はコックなんで学校行事は……」
「私の世話役だろ？」
「…………」
「お願い。
来て？」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――

プップーー

という訳で、俺は今バスに乗っています。
教員を説得するのも面倒なので、臨海学校なんて行くつもりありませんでしたが……アッシュにあんな風に頼まれたら、断る訳にもいきません。

案の定学校側からは、お前を連れて行ったら危険だとか、もっともなことを言われました。
なんか指野が、生徒指導部の鳴岩の秘密を握ったとかで、俺は同行出来るようになったそうです。
（はぁ）
最近、やたらアッシュに乗せられることが多い気がする。

俺は、桜色の髪をなびかせて楽しそうに笑うアッシュを眺めた。マスクはしてるけど、とりあえず幸せそうだ。

確かにあんなこともあったし、もうアッシュから離れる訳にはいかないな。
片時も。

……あれ？
俺、マジでアッシュのこと……

（やべぇな、こりゃ）
結城ザク郎、高校生にして全宇宙を敵に回すか？

「ザック、この弁当うめぇぞ！」
妻村の声に我に帰る。
「ほんとだ、うめぇ！」

妻村の弁当をもらいながら、俺は大げさに叫んだ。
……これでいい。

俺がもし、本当にアッシュと結婚するなら、確実にデビルークとの全面戦争になるだろう。
そうなったら、地球も巻き込まれて、こいつらの未来が消える。
（そんなことできねぇ）
俺が逃げてきたばっかりに、地球が燃えてしまうような、そんなことは許されない。

それに、俺には……
「ゴウカ」
思わず、好きな人の名を呼んだ時だった。

「呼んだ？」

透き通る声に振り返る。

後ろの席に、淡い金色の髪をした美少女が、彩南の制服を着て立っていた。

「ゴウカ……！」

俺は口を開けたまま動けなかった。俺の周りにいる奴らも固まっている。
無意識の内に、アッシュに目がいった。気づいていないみたいだ。
何故か胸を撫で下ろす。
「お、お前なんで、フツーに臨海学校来てんだよ！？」
感動、あるいは罪悪感とか、色んな思いが溢れるはずの再会なのに、俺はこんなツッコミしか出来なかった。
突然すぎるし。

「あなたが死にそうだから」
ゴウカは嬉しそうにそう言い、
「クロウ、
気をつけてね」
蝋燭の火が消える様に、ふっ、と姿をけした。
「い、今の娘、2年じゃねぇよな」
「あんな可愛い娘はじめて見た」
「天使だ……」
俺の周りがざわつき始める。一方の俺は、呆然と窓の外を見ているしかなかった。
「ザック、もしやあの娘が、噂の……」
指野がそう言ってきた、
その時だった。
ドガァァアン!!
窓ガラスが砕け散る。
「キャーー!!」
誰のものかもわからない悲鳴の中、俺は指野を抱え、床に転がった。
バスは激しく揺れながらも前進する。
「何が起こった!?」
前方の席から、西連寺が険しい顔で立ち上がった。
「車だ!車がぶつかってきた!!」
妻村が興奮して叫ぶ。砕けた窓から身を乗り出すと、後方には確かに白いセダンが、煙を上げて転がっている。

そして、

バガァアン!!

セダンは炎を巻き上げ、大破した。

「……車、横から飛んできたぞ」

ゾッとした表情で妻村が呟く。

こんなの、普通の交通事故なんかじゃねぇ。

「宇宙人だ」

斜め前の席から、古手川が低い声で唸る。

誰か、女子生徒が泣き始めた。

(……っ、臨海学校ってのによ)

……バン!

バスの屋根に、衝撃が走る。

バン!

まるで鉄が凹む音の様だ。

バン!

屋根に目を走らせ、音の出どころを探る。

(くそっ、どこだ!)

バン!!

四度目の音で、それがアッシュの頭上から響いていることに気づいた。

「アッシュ!!」

バァアン!

屋根に穴が空き、

ビュン!!

黒くうねる何かが、アッシュに迫る。

瞬間、俺はハーディスを引き抜いた。

ドゥッ!!

鞭目掛けて発砲する。

「キャーーッ!」

悲鳴の中、ブチッという音とともに、弾丸に黒いものは引きちぎられた。

シュルシュルッ!

だが黒い物体はアッシュを離れると、空中を蛇のように這い、向かいに座る猿山の首に巻きついた。

「ッ!?ぐっ」

「智子!!」

猿山の体が持ち上げられる。

「念力集中ッ!」

バチチッ

素早く西連寺が念力を発動した。

シュウッ

黒い物体は消滅し、猿山の体は椅子に落ちた。

「猿山さん、大丈夫か!?」

「と、季虎……」

「ザック、前!!」

誰かの声に、俺は正面を見た。

フロントガラスの向こう、道路の真ん中に、

黒い鞭を構える、男が立っている。

「ッ！　あの野郎!!」
席を飛び出し、前へ走る。
ガクン！
バスが揺れ、膝をつく。
瞬間、
バシィッ
フロントガラスが破け、
ビュルルッ!!
黒い鞭が、車内に進入した。
「伏せろっ！」
古手川が叫ぶ。
だが鞭は学生には触れず、運転手の首に巻きついた。
「ぐっ!?」
バチッ！
鞭に電撃が走り、運転手が椅子から転がり落ちる。
シュルル……
鞭が、ハンドルに絡みつき、
一気に、右へ回った。

「危ないッ!!」
キキーーーーィィッ!!
バスが激しく揺れ、交差点を右に突っ込む。
「ぎゃ、逆走してりゅうっ!?」
担任の骨川先生の悲鳴。
だが、それだけじゃない。
ブォーオーオー!!
運転席のメーターが振り切れ、
バスは、１２０ｋ／ｈで走り始めた。
「もう俺たち、死ぬのかな……」
誰かの声が聞こえる。

俺は運転席まで走り、ハンドルを掴んだ。
後方、道路の中央に、鞭を掴む男が見える。
（このままバスが真っ直ぐ走れば、鞭が引っ張られてあの男も一緒に引きずられる。殺し屋がそんな間抜けなことをするはずがねぇ）
どっかのタイミングで、あいつは鞭を引くはずだ。
バスの方向を変える為に。
「……根比べだ」
俺は鞭を持つ男の右手首だけに集中した。
「ザック！前からトラックが！」
相手は俺がハンドルを握っていることに気づいていない。
「結城！何してんだよ、早くハンドル切れっ！」
同級生の叫びに反し、俺は逆にアクセルを踏み込み、一瞬バスを加速させた。
ブン！
「キャアッ！結城君、何してるの!!」
トラックが間近に迫る。
その瞬間、
グィッ
遂に、男の右手が動いた！
ハンドルが左に回る。
俺はハンドルを握りしめ、
思い切り右に切り返した。
グン！

ギャァアーーッ

タイヤが焦げる。
トラックが真横を横切る寸前、俺は鞭に銃口を押し当て、
ドゥッ！
エネルギーを撃ち込んだ。
バババババ……

鞭が導火線となり、火花が走る。
そして、
遥か先、男の手元に到達した。
（弾けろッ！）

バガァァアン!!

彼方で、男が吹き飛ぶ。

ギュン
「あぶねぇだろっこらぁっ!!」
トラックが横切る。

その先にはもう、男の姿はない。

「やったか!?」

煙が薄れ、次第にクリアになる景色の中、

炎を巻き上げ、トラックが飛んできた。

「危ないッ！」

『念力拡散!!』

ダァァン!!

西連寺の念力に跳ね返されるトラック。

ダン！
直後、再び頭上に衝撃が走った。

屋根の穴から、男の足が見える。

（……戻って来やがった）

ドウッ

穴に向かってハーディスを撃ち、屋根の上に上がる。

「グッ」

上がった瞬間、突風に煽られ、バスの端まで飛ばされた。

「ザック!!」

かすかに、アッシュの叫び声が聞こえる。珍しく取り乱してるみたいだ。

（そっか。バス１２０km／hで走ってんのか）

落ちれば即死だな。

鞭の野郎は大丈夫なんだろうが。

（不利だな。

いつものことだけど）

弱いって、本当に損っすね　笑

ビュンッ

紫色の電流を纏い、鞭が迫る。

ドウッ

弾丸で鞭を引きちぎる。だが一瞬の間もなく、鞭は生き物の様に再生した。

（ぼやいてても仕方ねぇ）

俺は銃を持ち変え、鞭野郎に殴りかかった。

『黒爪!!』

ガギィンッ！

銃床を、敵の心臓目がけて叩きつける。
ガキィッ
敵が両手首からナイフを取り出し、突きを放つ。だが俺は敵の攻撃より早く銃を振り続けた。
ガンッ
ドガッ
バキィッ
俺の連撃に押され、次第に敵が退き始める。
ブォオッ
「くっ！」
あと一歩のところで風に煽られ、バスの端まで飛ばされた。
「シッ！」
ハーディスを構え、敵の脳天に照準を合わせる。
だが、敵は素早く鞭をバスの穴に垂らし、
「フン」
バチバチバチバチィッ
「キャアアアアーーッ」
電流を、バスの中に放った。
「ッ!?　……クッ」
バス全体を人質にされてしまった。
これじゃあ撃てねぇっ……
そして……
そいつは、なんと、
背中からもう一本、鞭を取り出した。
（もう一本持ってたのかよっ！）
２本目の鞭は大きく弧を描き、
ガンッ

ブルドーザーを掴んだ。

グォオオッ

巨大な重機を掴んだ鞭が、なす術もなく固まる俺に迫ってくる。

……終わり……

いや、助かる方法はある。

確かに炎を使うことはできない。ブルドーザーのガソリンに火が回ればバスごとぶっ飛ぶ。だからオリハルコンの銃床で頭だけ守って、タイミングよく受け身とるしかねぇ。そうすれば、たぶん死にはしねぇ。

問題はその後だ。俺がまだ生きていることが奴にバレれば、奴は必ずバス内のアッシュたちに危害を加えるだろう。

俺が死んだと思わせて、一瞬の隙を与えないと、勝機はない。

俺は覚悟を決めた。

よし、

死んだふりだ。

ードゴンッー

ブルドーザーが、ハーディスにぶつけられる。

全身に衝撃を受け、気が遠くなる。

「っ!!　……ザック!」

バスから投げ出される瞬間、

俺は窓から、悲痛な表情を浮かべるアッシュにウインクした。

（これで何かが伝われば……）
空を舞う中、俺はアッシュにそう願った。
（そんな都合のいいこと、ないか）
そう思った瞬間、
目の前に、何かが飛んできた。
バシィッ
それをキャッチし、
ドゴッ
俺は地面に転がった。

少し遠くで、男を屋根に乗せたバスが、猛スピードで走っていく。
俺は右手に握った物を見た。

（デダイアル！）

あの状況でこんなに素晴らしい判断が出来るとは、さすがデビルーク家の長女。賢い。
俺はデダイアルから「すいすいボードくん」を呼び出し、飛び乗った。

ギュン！

高速で空中を滑り、あっと言う間にバスに追いつく。
鞭野郎はすぐに俺の存在に気づいた。
ビュン！
鞭が投げられ、
俺の右腕に巻きつく。

その時、

「……アゼンダ・Ｊｒ．」

初めて、男がものを言った。
「何？」
「お前を屠る男の名だよ、クロウ・キリサキ」
バチチッ……
右手に巻かれた鞭が電気を帯び始める。

「あの世へ行きなっ！」
バチィッ
鞭に電流が流れた。
「ふん、流すんなら流せ」
右腕に巻かれ、電気を帯びた鞭を見る。奴は気づいていない。これが強力なコイルとなっていることを。
俺はデダイアルから「ぱんぱん花火くん」を呼び出し、鞭が巻かれた右手に握り、
腕を振りかぶった。

「バーストレールガン!!」

ギャァアアッ
電流を纏った右手で、花火くんを敵に投げつけた。
ドガァッ
花火くんが、敵の腹に命中し、空高く舞い上がる。
「あじゃぱあーーーーっ?!」
ヒュルルルル……
パーーン……

奇声をあげ、今度こそ鞭野郎、もといアゼンダ・Ｊｒは空へ散った。

ブァアアーーッ

だがバスは、アッシュたちを乗せたまま、依然として１２０ｋｍ／ｈで暴走し続けている。
（どうするっ!?）
俺はボード君を滑らせ、バスに接近しつつ、デダイアルを確認した。

『すいすいボードくん　（使用中）』
やっぱりこの一個しかねぇか。
『ぴょんぴょんワープくん』
駄目だ！クラスメート全員の腕にはめてる時間なんかあるか！
『うまパカくん　５５機』
やった！これならなんとか……

『＊全機　修理中　（申請者　天条院殿）』

あのボケェーッ!!

（駄目だ！何もねぇっ！）
正面を見る。
すぐそこに、巨大な壁が迫っていた。
（頼む！何か使えそうなものッ……）

『いないいないフープくん』

これは確か……

『ぴょんぴょんワープくんの拡大版です』

これだっ!!

ブンッ
俺はデダイアルからいないいないフープくんを取り出し、

グゥウンッ
バスが通る大きさまで拡大させた。

「キャァアーーッ」
「もう死ぬーーっ」
「ザック！」

「うぉおおおっ!!」
俺はボードくんに片腕を引っ掛け、フープくんを垂らし、
ギュォオッ
バスが通り抜ける瞬間、バスに捕まった。

キィイイン……
パッ

時空が開け、ワープが終わる。

ガタガタガタガタッ

激しい揺れに顔を上げると、

目の前に、果てしない水平線が現れた。
（ワープ成功だッ！）
「う、うわぁぁあーーっ!!」

反動で、屋根の穴からバスに転がり落ちる。

「ザック!?」
「ぐっ!?」
揺れるバスの中、アッシュが抱きついてくる。

ガガガガッ
バスのタイヤが砂浜に取られ、
ザッパーーン!!
クラスメートを乗せたバスは、豪快に海に突っ込んだ。

ザァァァアーーッ
「アッシュ、ご無事でしたか……」
バスに打ち寄せる波の音を聞きながら、目の前の王女に問いかける。
「……無事だよ、ザックのおかげで。
ありがとう」
すぐそばで、アッシュが静かに、そう答えた。

あれは間違いなく、アッシュを殺しにきた刺客だ。きっと他の婚約者候補に雇われたのだろう。
なんだかんだ、俺がいてよかったな……。
そんな事を考えていると、アッシュの体が目に映った。
「っ!!」

肌の上には、洗剤の香りが残る、純白のカッターシャツ。
その他には、何も身につけていない。

ていうか俺もパン一じゃねェか　笑

そうだった。いないいないフープくんは、服まで完全にワープできないんだね。
周りを見渡すと、ほぼみんな全裸だった。奥の方で、三角座りでうずくまる猿山が見える。俺は男子たちに見られない様に、アッシュの身体を寄せた。

スッ

何かを待っている様に、アッシュが俺の目をじっと見つめる。

ザザァン……

波が、浜辺に打ち寄せる。

俺は王女の顔に、そっと自分の顔を近づけた。

「み、みなしゃん、目的地に着きましたぁ～…」

骨川先生が全裸で立ち上がり、俺たちの時間は終わった。

「この向こうが、私たちが泊まる宿舎です」

マジ？

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｄ

第１９話「炎の臨海学校　Ⅱ」

「フフフ……。
みんな、遅かったね」
にたつきながら、白衣を着た「アイツ」が挨拶した。
「臨海学校に同行してくれました、養護教員の皇先生でしゅ」
骨川先生の横で、不敵な笑みを浮かべる。奴は、あからさまに俺を睨んでいる。
ドクター・スメラギ。
さっきの事件は、あいつが絡んでいるのか。それとも何か知っているだけなのか。
「みんな無事だったことだし、海行こうぜ、海!!」
あんなことがあったというのに、妻村始めクラスメートたちはさっさと海へ行っちまった。
ちなみにバスの運転手は助かったらしい。飛んで来た車にも誰も乗ってなかったそうだ。
スメラギの陰気な視線からも逃げたかったし、俺もとっととみんなについて行くことにした。

ー１０：３０ａｍ　海岸ー

水着に着替えて海へ出ると、なにやら浜辺に女子生徒が群がっている。
（何だ、ありゃ）
……気になる。
「行くしかねぇ!」
俺は水着の女子の群れに単独、向かっていった。ある意味敵と戦う

より緊張します　笑
「よぉ、何してんの？」
俺は一番手前にいる、背の高い女子に声をかけた。
俺を見るなり、そいつは満面の笑みを浮かべた。
「おおっ！ヒーローが来たよっ」
「アッシュー、結城君！」
「ほら、恥ずかしがらないで」
「あんたが見せたいって言ったんでしょ！」
女子たちがキャーキャー言いながら輪を広げる。その中心には、恥ずかしそうに顔を下に向けた、水着姿のアッシュがいた。
「おお……」
俺はただただ、感嘆の声を漏らすしかなかった。
こんなに、アッシュの顔以外の部分でドキドキしたのは初めてかもしれない。
「ちょっと～、何とか言ってやりなよ結城ぃ」
「おっ、それともハグしちゃう!?」
「キャーそれやっぱあい!!」
……だんだんウザくなってきた　笑
「……ど、どうかな？
この前、買ったんだけど……」

上目遣いで、アッシュが尋ねてくる。
「は、はぁ」
俺は改めて、アッシュを見た。

水着の縁からは、艶のある肌が日差しを反射している。きわど過ぎるわけじゃない。でも、決めるところはしっかりと強調している。彼女のスタイルを十二分に引き立たせてるデザインだ。
やっぱり水着はいい……。水着にしかない特別な魅力がある。
そりゃ今まで、もっとセクシーな格好を見ちゃったことはあるけど……

（ランジェリーとかな）
ちょっと前の、メモルゼ戦艦での激闘が脳裏によぎる。
あの時はアッシュとホリーが、すげぇ喧嘩してたな……。
アッシュの眩しい姿を見ながら、俺はふと、そんなことを考えていた。
もし、こんなに魅力的なアッシュをホリーが見たら、また嫉妬するんだろう。
（女の闘いは怖い）
俺は思わず、ホリーがこの場にいないか見回した。
（そっか、あいつは撮影会で休んでるんだった）
俺は安心した。そして、

「ホリーは、来てないんだな」

なんと俺は、
この言葉を、声に出して言ってしまっていた。

その場が凍りつく。

「……何で今、そんなこと言うの？」
震える声でアッシュが呟く。
そして、
アッシュの目から、大粒の涙が溢れた。

あ、
……これ、俺やらかしたやつだ。

「何言ってんのこいつ……」

「マジあり得ないんだけど」
女子たちから、刺すような視線を浴びる。
もうアッシュは両手で顔をおさえて、本格的に泣き出してしまった。

やめて！やめてよ、アッシュ。いつもみたいにヤンキーっぽくキレてくれよ！なんでこんな時に限って女の子っぽいの？

女子たちは散々罵倒しながら、アッシュを連れてどっかに消えた。何言ってんのかほとんどわからなかったけど。

「……ホリーが転校して来た時から、アッシュがどれだけ気にしてるか、あんた知ってる？」
ひとり残った猿山が、静かに、冷徹に言葉を投げかけてくる。
「水着だって、本当は恥ずかしいのに、ホリーのグラビアを意識して、勇気出して私と買いに行ったのに。そこまであんたのこと、意識してるのに。
かわいいとも、一言も言わないで……。
最低だよ」
そう言い残し、猿山は去っていった。

「ウーーイ!!」
「どんまい！ザァーック!!」
歓声をあげながら、今度は男子共が飛びついてきた。
「何で泣かせたんだよ？」
目を輝かせて指野が聞いてくる。くそ、こいつに言ったらあっという間に広まるからな……。
まぁ、もう女子たちには知られてるしいっか。
「いや、なんかあいつが、新しく買った水着見せてくれたんだけど、そん時ホリーいねぇなとか思ってたら……それが声に出た」
「馬鹿だろ、お前」

珍しく妻村が憤っている。こえぇ。
「いや、言うつもりなかったんだよ。気づいたら喋ってて」
「はい！言い訳～」
みんなにはやされる。悔しい。でも否定出来ねぇ。
「よし！じゃあ男同士で遊ぼうや!!」
「悪りぃ、今はそんな気分じゃねぇから」
指野の好意はありがたいが、とても遊べるテンションじゃなかったので断った。
男子たちは飛び跳ねながら、遠くの浜辺に消えていった。
……波の打ち寄せる音が聞こえる。
俺一人が、ビーチに残った。
あーーあ。
やっちまったな、俺……。
……
ザザーン　笑
「クロウ？」
波の音に混じって、あの透き通った声が聞こえる。
「ゴウカ……」
俺は振り返らずに、海に向かってその名を呼んだ。
金色の髪を揺らし、ヒラリと、波打ち際に姿を現わす。

「冷たい」
打ち寄せる波に足を入れ、ゴウカは小さく叫んだ。
「まだ、水は嫌いなのか」
「冷たいものは全部嫌い。水も、風も、お菓子も……。
人も。
熱いのが好き」
俺に向けられた瞳が、炎の様に揺らぐ。
「さっきバス襲ったアゼンダとか言う奴、知ってるか？」
「昔、お母さんに負けた殺し屋の……子どもかな」
「殺し屋の子どもか」
「フフ」
俺の言葉にゴウカは小さく笑い、羽織っていた白いレースの上着を脱いだ。
俺はまた、言葉を失った。
水着姿のゴウカは、背中や脚を日の光にさらし、ステンドグラスの様にキラキラ揺らめいている。砂と海に区切られた単色の世界に、無数の色に輝く星が現れたみたいで、俺はその美しさに見入ってしまった。
「プリンセスのこと、好きですか？」
急にゴウカが、そんな言葉を投げかけてくる。
「そ、そんなことねぇよ!!」
思わず、俺はそう怒鳴っていた。
嘘だ。

でも、そう言うしかなかった。しかも、今まで聞いたこともない様な話し方で聞いてくるもんだから、何かゴウカであってそうじゃない、別の誰かに訊かれた様な気がして焦った。

「……じゃあ、花火の日、来て」

花火の日……。

ああ、臨海学校最後の夜か。

……その日に2人で会うなんて、まるでデートじゃねぇか。

「行かない、っつったら？」

ちょっとビビりながら、俺は聞いてみた。

ゴウカは黙って、海に飛び込み、

そして、

「海が干涸らびるかもね」

そう言った瞬間、

海に浮かべたゴウカの両手から、青い炎が放たれる。

ボウ……

海がどんどん干上がり、遠くまで、痛々しい地表を晒す。一瞬で、地球の裏側まで干上がってしまうだろう。

「……やめろ」

狂気じみた「無表情」を浮かべるゴウカに、俺は小さく、そう言うのが精一杯だった。

干上がった海に、1匹の焼け焦げた魚が上がってくる。

ゴウカはそれを見ながら、

「……たい焼き」

そう呟いた。

……怖すぎる。

「冗談だよ」

ゴウカはそう言い、いつもの優しい笑みで、焼け焦げた魚を撫でた。すると魚は、嘘のように鱗を輝かせ、ピチピチと跳ね回り、やがて海に消えていった。

いつの間にか、再び静かな海が広がっている。

「あなたと一緒なら、冷たい海も楽しいかもね」

ゴウカはそう言い、

『変身。

マーメイド』

組んだ足を、さっきの魚と同じ様な尻尾に変えた。

「じゃあ、待ってるからね」

パシャッ

ゴウカは、輝く水面に姿を消した。

俺は、波に残った僅かな波紋を、ずっと見つめていた。

（俺のせいだ）

さざ波の音を背に、俺は宿舎に戻った。